有元遺跡
男戸嶋遺跡

津山総合流通センター埋蔵文化財発掘調査報告4

1999
津山市土地開発公社
津山市教育委員会

巻頭図版 1

有元遺跡全景(上空から)

巻頭図版 2

男戸崎遺跡遠景(北上空から)

有元遺跡
男戸嶋遺跡

津山総合流通センター埋蔵文化財発掘調査報告4

1999
津山市土地開発公社
津山市教育委員会

序

今から約1280年前、備前国から6郡を割いて美作国が誕生し、美作国の役所である国府は、津山市総社を中心とする地区に置かれました。その後、中世には院庄館跡が院庄地区に設置され、近世には津山城が築城されて、城を中心とした町づくりが行われてきました。現代の都市もこうした歴史的な伝統のもとに発展し、津山は古来から美作地方における政治・経済・文化の中心としての役割をはたしてきました。

こうした伝統は、古墳時代や弥生時代といった、さらに古い時代における歴史に基礎をもつことはいうまでもありません。津山市では、現代の町づくりと歴史遺産の保存を両立すべく努力を続けてまいりましたが、今回の津山総合流通センターの建設に伴う発掘調査もそうした事業のひとつです。関係者の理解と協力を得て、予定地内の遺跡について発掘調査を順調に実施することができたほか、田邑丸山古墳群については現状で保存することができました。

本書が、これまで比較的知見の少なかった津山市西部における歴史資料として活用されることを期待します。

調査の実施にあたって、ご理解とご協力をいただいた津山市土地開発公社をはじめとする関係機関および関係者ならびに地元関係各位に厚くお礼申しあげます。

平成11年3月31日

津山市教育委員会

教育長　松　尾　康　義

例　言

1．本書は津山総合流通センター建設に伴う有元（ありもと）遺跡、男戸嶋（おんどしま）遺跡の発掘調査報告書である。

1．津山総合流通センター建設事業に伴い、9遺跡を調査した。報告書は5冊に分けて刊行する予定であり、本書はその第4冊目である。

1．発掘調査等に必要な経費は、原因者である津山市土地開発公社が負担した。

1．発掘調査は、津山市教育委員会が主体となり、津山弥生の里文化財センター安川豊史、小郷利幸が担当した。

1．本書のうちⅠ・Ⅱ章は小郷が執筆し、他の執筆と編集は安川がおこなった。

1．本書に用いた標高は、海抜高である。また、方位および平面位置は国土平面直角座標系第Ⅴ系によった。

1．図2．2には、建設省国土地理院発行5万分の1（津山西部）を複製して使用した。

1．本文および挿図等には遺構の略称を用いている。分類は次のとおりである。

SH：住居址、SB：掘立柱建物址、ST：段状遺構、SG：土壙墓、SK：土坑（袋状貯蔵穴を含む）、SD：溝、SA：柵列、SX：不明遺構、P：柱穴

1．整理作業から報告書作成まで、小澤かおり、大谷みゆき、丸干佳苗、橋本玲恵、浅図美恵、広政美智子、八幡佳奈絵、山本有希、上原香里、三谷順子、野上恭子、岩本えり子、家元弘子、諸氏の協力を得た。

1．出土遺物および図面類は、岡山県津山市沼600-1　津山弥生の里文化財センターに保管している。

本文目次

Ⅰ　津山総合流通センターと発掘調査に至る経過……1

1　津山総合流通センター建設に至る経過……1

2　発掘調査に至る経過……1

Ⅱ　流通センター内の遺跡と周辺の遺跡……3

1　津山総合流通センター内の遺跡……3

2　周辺の遺跡……7

A　旧石器・縄文時代……7

B　弥生時代……7

C　古墳時代……7

D　古代以降……7

Ⅲ　遺跡立地と調査経過……9

1　遺跡の位置と立地……9

A　調査に至る経過……9

B　調査経過……9

3　調査体制……11

Ⅳ　有元遺跡の調査……13

1　遺跡の概要……13

2　弥生時代……13

A　住居址……13

B　段状遺構……15

C　袋状貯蔵穴……17

D　溝……22

E　谷部出土の遺物……22

3　古墳時代……25

A　住居址……25

B 建物址 ……28
C 段状遺構 ……28
D 土 坑 ……34
4 その他の遺構・遺物 ……35
A 土 坑 ……35
B 谷部出土の遺物 ……37
5 考 察 ……40
A 弥生集落の範囲と構成 ……40
B 古墳集落の性格 ……41

V 男戸嶋遺跡の調査 ……43
1 遺跡の概要 ……43
2 弥生時代 ……45
A 住居址 ……45
B 建物址 ……56
C 段状遺構 ……59
D 袋状貯蔵穴 ……63
3 その他の遺構・遺物 ……64
A 住居址 ……64
B 段状遺構 ……64
C 土 坑 ……64
D 火葬墓 ……67
E 近世墓 ……68
F 遺構に伴わない遺物 ……71
4 考 察 ……78
A 弥生集落と石器製作 ……78

挿図目次

図1　津山市位置図…… 1
図2.1　津山総合流通センター用地内の遺跡（1：10,000）…… 4
図2.2　津山総合流通センター内遺跡と周辺の遺跡分布図（1：50,000）…… 6
図3　有元遺跡・男戸鳴遺跡周辺地形図（1：2,000）…… 10
図4.1　有元遺跡全体図（1：500）…… 14
図4.2　SH2実測図（1：80）…… 15
図4.3　SH3実測図（1：80）…… 15
図4.4　ST4·ST5実測図（1：80）…… 16
図4.5　ST6実測図（1：80）…… 16
図4.6　ST11実測図（1：80）…… 16
図4.7　袋状貯蔵穴実測図1（1：40）…… 18
図4.8　袋状貯蔵穴実測図2（1：40）…… 19
図4.9　袋状貯蔵穴実測図3（1：40）…… 21
図4.10　袋状貯蔵穴実測図4（1：80）…… 22
図4.11　各遺構出土弥生土器（1：4）…… 23
図4.12　谷部出土弥生土器（1：4）…… 24
図4.13　石器実測図（1：2）…… 25
図4.14　SH1実測図（1：80）…… 26
図4.15　SH5実測図（1：80）…… 27
図4.16　SH7実測図（1：80）…… 27
図4.17　建物址実測図（1：80）…… 28
図4.18　段状遺構実測図1（1：80）…… 29
図4.19　段状遺構実測図2（1：80）……30-31
図4.20　ST14実測図（1：80）…… 31
図4.21　ST16·18·SX1実測図（1：80）…… 31
図4.22　ST19·20実測図（1：80）…… 31
図4.23　各遺構出土古墳時代土器1（1：4）…… 33
図4.24　各遺構出土古墳時代土器2（1：4）…… 34
図4.25　土坑（落とし穴）実測図（1：40）…… 35
図4.26　谷部トレンチ東壁面実測図（1：80）…… 36
図4.27　谷部出土土器実測図（1：4）…… 38
図4.28　石製品・鉄滓実測図（1：2）…… 39
図5.1　男戸鳴遺跡A地区全体図（1：600）……44-45
図5.2　男戸鳴遺跡B地区全体図（1：600）…… 45
図5.3　SH1実測図（1：80）…… 46
図5.4　SH2実測図（1：80）…… 46
図5.5　SH3実測図（1：80）…… 47
図5.6　SH4実測図（1：80）…… 48
図5.7　SH5実測図（1：80）…… 48
図5.8　SH6実測図（1：80）…… 49
図5.9　SH7実測図（1：80）…… 49
図5.10　SH8実測図（1：80）…… 50
図5.11　SH9実測図（1：80）…… 51
図5.12　SH10実測図（1：80）…… 51
図5.13　SH11実測図（1：80）…… 52
図5.14　SH12実測図（1：80）…… 53
図5.15　SH13実測図（1：80）…… 54
図5.16　SH14実測図（1：80）…… 54
図5.17　SH15実測図（1：80）…… 54
図5.18　SH16実測図（1：80）…… 55
図5.19　H18実測図（1：80）…… 55
図5.20　SB1·2·3実測図（1：80）…… 56
図5.21　SB4·5実測図（1：80）…… 57
図5.22　SB6実測図（1：80）…… 57
図5.23　SB7実測図（1：80）…… 58
図5.24　SA1実測図（1：80）…… 58
図5.25　ST1·6実測図（1：80）…… 60
図5.26　ST7·11·12·SD6実測図（1：80）…… 61
図5.27　袋状貯蔵穴等実測図（1：40）…… 62
図5.28　SH17実測図（1：80）…… 64
図5.29　ST10実測図（1：80）…… 64
図5.30　SK1·2実測図（1：40）…… 65
図5.31　SK4·5·6·8·23実測図（1：40）…… 66
図5.32　SG10実測図（1：20）…… 67
図5.33　SG14実測図（1：20）…… 67
図5.34　近世墓実測図（1：40）…… 69
図6.1　各遺構出土弥生土器（1：4）…… 71
図6.2　弥生土器2（1：4）…… 72
図6.3　弥生土器3（1：4）…… 73
図6.4　玉類、金属製品、砥石…… 73
図6.5　石　器1…… 74
図6.6　石　器2…… 75
図6.7　古墳・奈良時代土器…… 76

図版目次

巻頭図版1　有元遺跡全景(上空から)

巻頭図版2　男戸嶋遺跡全景(北上空から)

図　版1　有元遺跡・男戸嶋遺跡全景

図　版2　有元遺跡 弥生時代住居址SH2と北側貯蔵穴群、SH2、SH3

図　版3　有元遺跡 段状遺構ST4･5、ST6、ST11

図　版4　有元遺跡 袋状貯蔵穴SK1、SK5･8、SK8

図　版5　有元遺跡 袋状貯蔵穴SK6、SK5、南貯蔵穴群

図　版6　有元遺跡 古墳時代住居址SH1、SH4、SH5

図　版7　有元遺跡 古墳時代住居址SH6、SH7、建物址SB1･2

図　版8　有元遺跡 西側谷部中央、西側谷部南、谷部調査風景

図　版9　有元遺跡 段状遺構ST1、ST2、ST7

図　版10　有元遺跡 段状遺構ST8、ST9、ST10

図　版11　有元遺跡 段状遺構ST13、ST15、ST16

図　版12　有元遺跡 土坑SK11、SK18

図　版13　男戸嶋遺跡 弥生時代住居址SH1、SH2、SH3

図　版14　男戸嶋遺跡 住居址SH3、SH4

図　版15　男戸嶋遺跡 住居址SH5、SH5壁際杭跡の炭化米

図　版16　男戸嶋遺跡 住居址SH5壁際杭跡断面、SH6、SH7

図　版17　男戸嶋遺跡 住居址SH7火災状況、SH7、SH8

図　版18　男戸嶋遺跡 住居址SH8、SH9

図　版19　男戸嶋遺跡 住居址SH9(西から)、SH10(南東から)、SH11(南から)

図　版20　男戸嶋遺跡 住居址SH12(南東から)、SH13(南西から)、SH14(南東から)

図　版21　男戸嶋遺跡 住居址SH15(上空から)、SH15(東から)、SH16(上空から)

図　版22　男戸嶋遺跡 住居址SH16(西から)、SH18(東から)、SH18(東から)

図　版23　男戸嶋遺跡 建物址SB1･2･3(上空から)、SB1･2(西から)、SB4･5(南から)

図　版24　男戸嶋遺跡 建物址SB6(上空から)、SB6(南西から)、SB7･SH13(上空から)

図　版25　男戸嶋遺跡 建物址SB7(西から)、SB7(東から)、D8区柱列SA1(北西から)

図　版26　男戸嶋遺跡 段状遺構ST1(南東から)、ST2･3(南から)、ST4･5(南から)

図　版27　男戸嶋遺跡 段状遺構ST6(南から)、ST7(北西から)、SD6(西から)

図 版28　男戸嶋遺跡 袋状貯蔵穴SK7・9・24(南から)、SK7(北から)、SK9(西から)
図 版29　男戸嶋遺跡 土坑SK1(南から)、SK2(南から)、SK5(南西から)
図 版30　男戸嶋遺跡 古墳時代遺構SH17(西から)、SH17(北から)、ST10(北西から)
図 版31　男戸嶋遺跡 古墳時代遺構ST10(南から)、奈良時代遺構SG14(南東から)、SG14(北西から)
図 版32　男戸嶋遺跡 近世墓A17区近世墓群(上空から)、阿上(北から)、SG5(南から)
図 版33　男戸嶋遺跡 近世墓SG7(北から)、SG8(南から)、SG9(南から)
図 版34　有元遺跡各遺構出土弥生土器、古墳時代土器
図 版35　有元遺跡出土古墳時代土器、鉄滓、弥生時代石器
図 版36　男戸嶋遺跡出土弥生時代土器、管玉、石器、鉄器、古墳時代須恵器、金属製品
図 版37　男戸嶋遺跡出土石器
図 版38　男戸嶋遺跡出土石器
図 版39　男戸嶋遺跡 奈良時代火葬墓出土土器

表 目 次

表1　津山総合流通センター地内遺跡調査 一覧表 …… 5
表2　男戸嶋遺跡遺構一覧表 …… 44

Ⅰ　津山総合流通センターと発掘調査に至る経過

1　津山総合流通センター建設に至る経過

津山市は、岡山県の北部、中国山地と吉備高原の中間に位置し、人口約９万人、南北19㎞、東西15㎞、面積約185㎢、面積の約54％を山林・原野が占め、宅地となっているのは約11％ほどである。

市内の東から南へと県内三大河川の吉井川が、加茂川や広戸川など多くの支流をしたがえて流れている。本市の地質は、主に古生層と第三紀層、第四紀層で構成されている。また、市内最高峰は加茂町との境にある天狗寺山（831.8m）である。この盆地をぬうように昭和50年には中国自動車道が開通し、市内に２箇所のインターチェンジ（津山・院庄）が設けられる。これが産業・教育・文化等あらゆる面に多大な影響を与え、これを契機に工業団地（院庄工業団地、綾部工業団地、草加部工業団地、国分寺工業団地、高野工業団地、津山中核工業団地）の造成が各地で行われた。このことにより阪神地域や九州地域などとの物流の拠点として、中国地方内陸部の中核都市としてますますの発展が期待された。その後、中国横断道が米子さらには総社まで開通し、瀬戸大橋を経由することによって山陰・四国地方を含めた高速交通網が整い、さらに広範囲の物流も可能となる。また、岡山空港の整備からさらに流通網が徐々にではあるが整いつつある。その中で、21世紀へ飛躍する物流・情報の発信基地、情報により高度化した流通団地の形成と情報ネットワークによる配送システムの確立をめざして、津山総合流通センターが中国自動車道院庄インターチェンジ近くに計画された。

2　発掘調査に至る経過

津山総合流通センター建設予定地は、津山市と鏡野町との境に位置する約93haの広がりをもつ。そのほとんどが津山市域であるものの、鏡野町域も一部含むため、事業主体の津山市土地開発公社と鏡野町教育委員会および津山市教育委員会の三者が、埋蔵文化財の取り扱いについて事前に協議を行った。その結果、鏡野町域については同町教育委員会が、津山市域分については同市教育委員会が、あらかじ

図１　津山市位置図

め埋蔵文化財の有無を確認し、あわせて必要な箇所の発掘調査を担当することとした。その後、平成7年3月に造成計画の工程が確定したため、その工程計画に合わせ、埋蔵文化財の調査を実施することとした。

平成7年6月26日付け津土公第17号で、文化財保護法第57の3第1項に基づき、津山市土地開発会社理事長中尾嘉伸から「埋蔵文化財発掘の通知」が文化庁長官に提出された。この段階では周知の遺跡として認識されていたのは、田邑丸山古墳群と戸島・戸島B遺跡だけであった。しかし、開発面積が広いため、これら以外についても地形的に遺跡の立地が予想される部分については、立木伐採後に再度分布調査を実施することとした。分布調査の結果、遺跡の立地が広範囲に及ぶことが予測されたので、必要箇所については試掘調査を実施することとした。調査はバックホーを使用し、幅2m程のトレンチを尾根の稜線および斜面に設定した。その結果、遺跡はおもに予定地内の東側丘陵に集中して存在することが判明したため、全面発掘調査が避けられない状況となった。発掘調査の対象となったのは、有本古墳群、有本遺跡（A・B地区）、上遠戸嶋遺跡、男戸嶋遺跡、男戸嶋古墳、荒神峪遺跡、有元遺跡の7遺跡である。発掘調査に先立ち、平成7年7月1日付け津教委文第48号により津山市教育委員会教育長藤原修己から文化財保護法第98条の2第1項に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知」を文化庁長官宛に提出した。なお、田邑丸山古墳群については現状のまま保存することとした。

Ⅱ　流通センター内の遺跡と周辺の遺跡

1　津山総合流通センター内の遺跡

津山総合流通センターは、津山市上田邑、下田邑、戸島、鏡野町布原、沖にまたがる約93haが建設予定の敷地である。その大半を占める津山市域の中に、周知の遺跡として認識されていたのは、図2.1左側の戸島・戸島B遺跡（男戸嶋遺跡の一部）と田邑丸山古墳群だけであった。今回の調査に先立ち立木伐採前に事前に分布調査を行い、その際、新たに有本古墳群の存在を確認した。さらに立木伐採前の段階では樹木の繁茂がはげしく古墳の確認すらも困難であり、集落遺跡の存在する可能性の大きい丘陵も存在することから、立木伐採後に再度分布調査を行い、あわせてトレンチ調査による試掘調査を実施することとした。調査対象面積は、約153,000㎡である。その結果、図2.1右側のとおり6遺跡（有本遺跡、上遙戸嶋遺跡、男戸嶋古墳、男戸嶋遺跡、有元遺跡、荒神峪遺跡）を新たに確認し、流通センター建設予定地内の遺跡（津山市域分）は合計8遺跡となり、田邑丸山古墳群が保存される以外はすべて発掘調査が行われる結果となり、発掘調査面積は約37,000㎡となった。なお、鏡野町域については葡萄田頭遺跡と槇之木峪古墳の2遺跡が発掘調査の対象となった。以下、各遺跡の概要を記す。

有本古墳群（ありもとこふんぐん、図2.1-1）　方墳7基からなる古墳群である。埋葬施設はいずれも東西方向を向いており、竪穴式石槨が1基ある以外は、ほとんど木棺を使用している。内部に枕石を置くものの他に、鼓形器台を枕に転用しているものもある。副葬品としては、鉄剣、鉄鏃などの鉄製品の他、ヒスイ製勾玉、碧玉製管玉、ガラス製勾玉などの装身具が出土している。これらの出土遺物から時期は古墳時代前期と考えられる。

小郷利幸「有本古墳群」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第59集 津山市都市開発公社・津山市教育委員会 1997

有本遺跡（ありもといせき、同2・3）　弥生時代後期の集落と集団墓地からなる複合遺跡である。便宜的にA・B両地区に分けている。

A地区には、住居址4棟、建物址7棟、貯蔵穴4基などがある。

B地区は集団墓地で、溝や石列による区画が3基存在する。区画の内外から約140基の土壙墓を検出した。鉄鏃、ガラス製管玉の他、特殊器台の破片が出土している。これ以外に江戸時代の近世墓16基と弥生時代中期の段状遺構も検出された。

小郷利幸「有本遺跡・男戸嶋古墳・上男戸嶋遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第62集 津山市都市開発公社・津山市教育委員会 1997

上男戸島遺跡（かみおんどしまいせき、同4）　弥生時代中期の集落遺跡であり、住居跡1軒を確認した。この住居から石斧、石鏃、砥石などが出土している（前掲書）。

男戸嶋古墳（おんどしまこふん、同5）　直径15.5m、高さ1.5m程の円墳で、周溝が部分的にめぐっている。埋葬施設は木棺1基で、主軸は北東方向を向いている。副葬品として鉄刀2、鉄鏃がある。特に鉄鏃は複数が束となってまとまって出土している。また、周溝外に土師器の甕に赤色顔料を詰め、高坏で蓋をしたものがあり、その周辺から滑石製の小玉も1点出土している（前掲書）。

男戸嶋遺跡（おんどしまいせき、同6）　弥生時代中期の集落遺跡と近世墓からなる。弥生時代の集落

計画段階の周知の遺跡と試掘調査範囲（網版）

A　田邑丸山古墳群
B　戸島遺跡
C　戸島B遺跡

発掘調査した遺跡

1　有本古墳群　　2　有本遺跡A地区
3　有本遺跡B地区　　4　上遠戸嶋遺跡
5　男戸嶋古墳　　6　男戸嶋遺跡(旧戸島遺跡)
7　荒神峠遺跡　　8　有元遺跡
9　田邑丸山古墳群・田邑丸山遺跡
10　葡萄田頭遺跡　　11　槙之木峠古墳

図２．１　津山総合流通センター用地内の遺跡(１：10,000)

は、住居址18棟、建物址７棟、貯蔵穴などからなる。住居址からは碧玉製の管玉が出土している。近世墓は９基あり、寛永通宝、櫛などが出土している（本書）。

荒神峪遺跡（こうじんざこいせき、同７）　弥生時代後期の集落遺跡。住居址20棟、建物址３棟、貯蔵穴などからなる。住居址には直径が11mを測る大形住居もある。石包丁や青銅製の銅鏃、ガラス製の勾玉、小玉などが出土している。その他、縄文時代と考えられる落とし穴や近世墓などがある。

有元遺跡（ありもといせき、同８）　弥生時代後期と古墳時代後期の集落遺跡である。弥生時代は住居址２棟、段状遺構、貯蔵穴などを検出した。古墳時代としては、住居址４棟、建物址２棟、段状遺構などを検出し、須恵器、土師器、鉄滓が出土している。その他に、縄文時代と考えられる落とし穴が存在する（本書）。

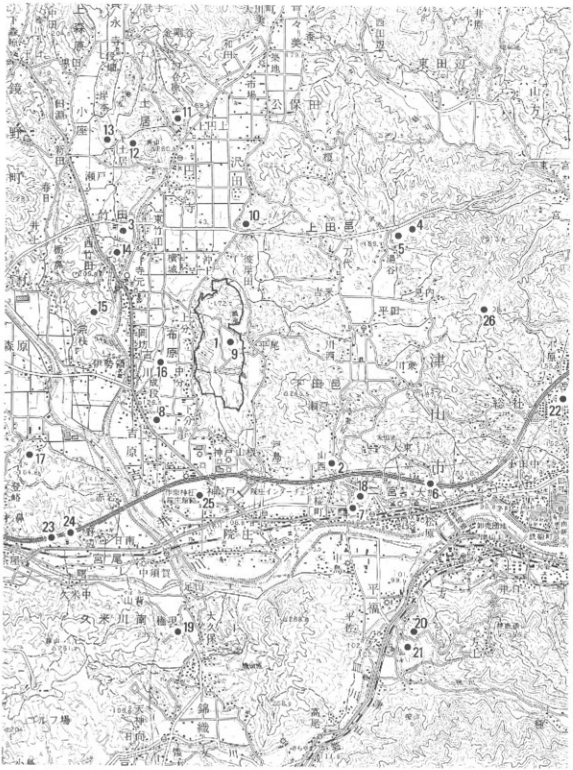
田邑丸山古墳群・遺跡（たのむらまるやまこふんぐん・いせき、同９）　円墳９基で構成するとされていた（註１）が、現存するのは５基である。そのうち１号墳は直径37mの円墳で、竪穴式石槨から乳文鏡１面、鉄斧、剣、車輪石形銅器２点が出土している。２号墳は、円墳と考えられていたが、確認調査の結果全長40m程の前方後方墳で、竪穴式石槨から過去に鏡が４面出土したと伝えられているが、所在は不明である。３～５号墳については出土遺物は知られていない。また、９号墳（古墳がどうかは不明）から鼓形器台の破片が発見されている。本古墳群（１～５号墳）は、緑地公園として整備されている。また、古墳の東側の丘陵斜面から弥生時代の住居址２棟が検出された。

葡萄田頭遺跡（ぶどうだがしらいせき、鏡野町、同10）　弥生時代中期から後期の集落遺跡。住居址、建物址、貯蔵穴、木棺墓などを検出（註２）。

槙之木峪古墳（まきのきざこふん、鏡野町、同11）　円墳で、埋葬施設は木棺と推定されている。須恵器が出土しており、６世紀中頃の古墳である。

番号	遺跡名	調査面積(㎡)	調査期間	調査担当者	報告書刊行
1	有本古墳群	4,000	H7.8.1～12.4	安川・小郷	平成８年度
2	有本遺跡(A地区)	4,500	H7.9.1～10.13	〃	平成９年度
3	〃　(B地区)	2,800	H7.10.13～ H8.4.10	小郷	〃
4	上遠戸鳴遺跡	400	H7.12.12～12.15	安川・小郷	〃
5	男戸鳴古墳	650	H8.2.16～2.28 5.7～6.14	小郷	〃
6	男戸鳴遺跡	14,000	H8.2.29～10.8	安川・小郷	平成10年度
7	荒神峪遺跡	6,800	H8.5.15～12.24	小郷	〃
8	有元遺跡	3,200	H8.10.4～ H9.1.20	安川	〃
9	田邑丸山古墳群 〃　遺跡	350	H9.1.21～4.9	小郷	平成11年度

表１　津山総合流通センター地内遺跡調査一覧表(番号は図２.１に対応)



1	流通センター内遺跡	8	九番丁場遺跡	15	古川3号墳	22	美作国府跡
2	大開遺跡	9	田邑丸山古墳群	16	大開遺跡	23	久米廃寺
3	竹田遺跡	10	東花穴古墳群	17	經観音山古墳	24	宮尾遺跡
4	アモウラ東遺跡	11	赤峪古墳	18	美和山古墳群	25	院庄館跡
5	アモウラ遺跡	12	土居天王山古墳	19	狐塚古墳	26	神楽尾城跡
6	二宮大成遺跡	13	土居妙見山古墳	20	門の山古墳群		
7	二宮遺跡	14	竹田妙見山古墳	21	寺山古墳群		

図2.2　津山総合流通センター内遺跡（網版部分）と周辺の遺跡分布図（1：50,000）

2　周辺の遺跡

津山総合流通センターは、吉井川の支流、戸島川右岸の南北に長い低丘陵一帯が敷地であり、樹枝状に小さな丘陵が派生している。周辺では、用地西側の鏡野町布原地区にかなり広い平野部が存在するが、反対の東側は西側ほど広くはなく、どちらかと言えば谷状の奥まった地形である。そのため集落としての生活基盤を周辺に求めると、西側の布原地域の方が重要視されていたと考えられる。このことが、西側の鏡野町側に多くの遺跡が存在するという分布状況に反映している。

以下周辺の遺跡を時代別に概観する（図２．２参照）。

A　旧石器・縄文時代

旧石器時代の遺跡としては、津山市大開遺跡（註３）が知られており、サヌカイト製ナイフ形石器が１点出土している。この遺跡では縄文時代早期の押型文土器や石鏃なども出土しているが、明確な遺構は確認されていない。同じく早期の遺跡として、竹田遺跡（註４）がある。この遺跡では住居址６棟が検出され、数多くの土器片と石鏃などが出土している。流通センター内の遺跡ではわずかな量の遺物以外には、狩猟用の落とし穴と考えられる遺構が多数検出されている。

B　弥生時代

この時代は、丘陵上に集落が営まれている例が多い。中国自動車道建設などに伴い調査された二宮大成遺跡（註５）、二宮遺跡（註６）、アモウラ遺跡（註７）などがあり、津山市大開遺跡では後期の住居址から板状鉄斧が出土している。

竹田墳墓群（註８）では、列石による区画をもつ墳墓が調査されている。この墳墓は埋葬施設として土壙墓14基、土器棺４基があり、後期前半頃のものである。また、九番丁場遺跡（註９）では、直径11.9mの大形住居からガラス製の管玉が出土している。

C　古墳時代

集落遺跡としては西隣布原地域の平野部に鏡野町大開遺跡（註10）があり、古墳時代前期の住居址が検出されている。また、アモウラ東遺跡（註11）では、住居址や段状遺構が検出され鉄滓や須恵器、土師器が多量に出土し、６世紀末から７世紀初頭と考えられている。

古墳では吉井川の流域と内陸部では、古墳群の構成が大きく異なっている。内陸部では円・方を主体とした古墳群であるのに対し、流域では前方後円墳が一定間隔に築かれている。内陸部では流通センター予定地内の有本古墳群（方墳）、東花穴古墳群（方墳７基、註12）などがあり、前方後円墳は見られない。逆に吉井川流域では、美作最大の美和山１号墳（全長80m、註13）、狐塚古墳（全長60m、註14）、郷観音山古墳（全長43m、註15）、古川３号墳（全長30m、註16）、赤峪古墳（全長45m、註17）、竹田妙見山古墳（全長36m、註18）、土居天王山古墳（全長27m、註19）などがあり、首長の系譜がある程度たどれる地域である。

D　古代以降

古代になり東４kmに美作国府（註20）が沖積地を臨む段丘上につくられると、南西３kmには出雲街道沿いに久米郡衙に比定されている官尾遺跡（註21）、久米廃寺（註22）が隣接して存在する。また、中世になると院庄館跡（註23）が南1.5kmに置かれる。このことから、おそらくこの辺りが古代一中世にかけて交通の要所であったことが伺える。ただ近世になるとこの院庄も、棯城の候補地としてあげられるが、東５kmの鶏山に津山城が築かれ、同時に城下町や街道が整備されていく。

註

1 土居徹他「山邑丸山古墳群」『津山市文化財年報1』津山市教育委員会 1975
整備に伴い、1997年に確認調査を実施。
2 鏡野町教育委員会 立石盛詞氏に御教示を得た。
3 平岡正宏「大開古墳群・大開遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第51集 津山市教育委員会 1994
4 土居徹「竹田遺跡」『岡山県史考古資料』岡山県史編纂委員会 1986
5 栗野克己他「二宮大成遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
6 岡山県教育委員会 1973
6 高畑知功他『二宮遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告28 岡山県教育委員会 1979
7 1981－1982年に広域林業構造改善事業文化財発掘調査委員会が調査を実施。報告書未刊。
8 今井堯他『竹田墳墓群』鏡野町教育委員会 1984
9 氏平昭則「九番丁場遺跡」「最近の岡山県下における埋蔵文化財発掘調査概要の報告会」1996
10 鏡野町教育委員会が1994－1995年に、岡山県教育委員会が1995年に調査。
井上弘『国道179号改良工事に伴う発掘調査』『岡山県埋蔵文化財報告26』岡山県教育委員会 1996
11 行田裕美「アモウラ東遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第36集 津山市教育委員会 1990
12 立石盛詞「鏡野町東花穴古墳群の調査」『調査団ニュース第3号』岡山県遺跡保護調査団 1992
13 中山俊紀「史跡美和山古墳群」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第42集 津山市教育委員会 1992
14 小郷利幸「狐塚古墳」『前方後円墳集成中国・四国編』山川出版社 1991
15 土居徹「郷牌倉山古墳」『岡山県史考古資料』岡山県史編纂委員会 1986
16 安川豊史「古川3号墳」『前方後円墳集成中国・四国編』山川出版社 1991
17 近藤義郎「赤峪古墳」『岡山県史考古資料』岡山県史編纂委員会 1986
18 土居徹「美作鏡野町土居妙見山古墳」『古代吉備第6集』古代吉備研究会 1969
19 安川豊史「土居天王山古墳」『前方後円墳集成中国・四国編』山川出版社 1991
20 岡田博他「美作国府跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告6 岡山県教育委員会1973
岡田博「美作国府跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査補遺編』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告24 岡山県教育委員会1978
安川豊史「美作国府跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第50集 津山市教育委員会 1994
平岡正宏「美作国府跡（総社小林アパート）発掘調査概要」『年報津山弥生の里第2号』津山弥生の里文化財センター 1995
安川豊史他「美作国府跡－日本生命社宅新築に伴う発掘調査－」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第56集 津山市教育委員会 1995
平岡正宏「美作国府跡（藤森地点）の調査」『年報津山弥生の里第3号』津山弥生の里文化財センター 1996
21 橋本聡司他「官尾遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告4 岡山県教育委員会 1973
22 栗野克巳「久米廃寺」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告4 岡山県教育委員会 1973
栗野克巳「久米廃寺」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査補遺編』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告24 岡山県教育委員会 1978
23 河本清『史跡院庄館跡発掘調査報告』津山市教育委員会 1974
行田裕美『史跡院庄館跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第7集 津山市教育委員会 1981

Ⅲ　遺跡立地と調査経過

1　遺跡の位置と立地

有元遺跡は岡山県津山市戸島635-2番地に位置する。遺跡の立地するのは、樹枝状を呈しながら用地内を南に延びる丘陵のひとつである。この丘陵は、男戸嶋古墳が存在する地点を最高所とする丘陵から東に派生した小丘陵で、南北、東西とも約130mをはかる。丘陵の最高所は標高149mで、東側は戸島川が形成した狭い谷状の平地に下る。平地との比高差は25m。

丘陵の南側はいったん緩やかに下り、鞍部を介して荒神峪遺跡の存在する丘陵にいたる。北側には東に下る谷があり、西側は男戸嶋古墳・遺跡の存在する丘陵との間が狭い谷となっている。この谷はほぼ直線的に南に延びる。遺跡は丘陵のほぼ全域に広がるが、遺構分布は南北に延びる尾根筋を境に東西に分かれる。発掘調査範囲は、ほぼ遺跡の全域を含むと思われるが、東側の未調査区にはなお広がっていた可能性もある。

男戸嶋遺跡は同638番地他に位置する。男戸嶋古墳の所在する標高約156mの最高所から南に下る丘陵斜面上に遺跡が立地する。遺跡は南北の２区に大別され、北側をＡ地区、南側をＢ地区とする。Ａ地区の東側はおおむね急斜面となっていて、遺構は主として尾根筋から西側の緩斜面に存在する。Ｂ地区は平坦な台地状を呈する。遺跡の範囲は東西約90m、南北約270mをはかる。

両遺跡の所在する丘陵は、一部変成を受けた泥岩質の基盤で、その表面は白黄褐色に風化している。風化土の上には褐色土層が堆積し、谷の一部には黒ボク土由来の黒褐色土の堆積が認められることもある。全般に開析作用が進んでいて、尾根筋の部分は基盤上の土層堆積は薄い。有元遺跡、男戸嶋遺跡とも確認調査に入るまでは山林となっていたが、男戸嶋遺跡Ｂ地区は過去に開墾されて畑地となっていた時期があった。

2　調査経過

A　調査に至る経過

男戸嶋遺跡（旧戸島遺跡）以外は、周知の遺跡ではなく、樹木伐採後の分布調査及び試掘調査によって新たに発見された遺跡である。有本古墳群の調査と併行して、予定地内の15.3haを対象とする範囲について試掘調査を行うこととした。

バックホーを使用し、尾根筋および斜面について等高線に直交する形を基本として、幅２m程のトレンチを設定し、有本遺跡（Ａ・Ｂ地区）、男戸嶋遺跡、上遠戸嶋遺跡、荒神峪遺跡、有元遺跡が新たに発見された。また、男戸嶋古墳は分布調査時に確認していた。一部が戸島遺跡、戸島Ｂ遺跡として知られていた箇所については、遺跡が連続して広範囲に及ぶことが確認されたのと、周辺部に新発見の遺跡があいついだことにより、小字をとって男戸嶋遺跡と改名した。

遺跡数および調査面積等を考慮し、造成工事計画に合わせて年間の調査計画を立てた。有本古墳群の調査に継続して各遺跡の調査をそれぞれ実施した。その調査経過は以下の通りである。

B　調査の経過

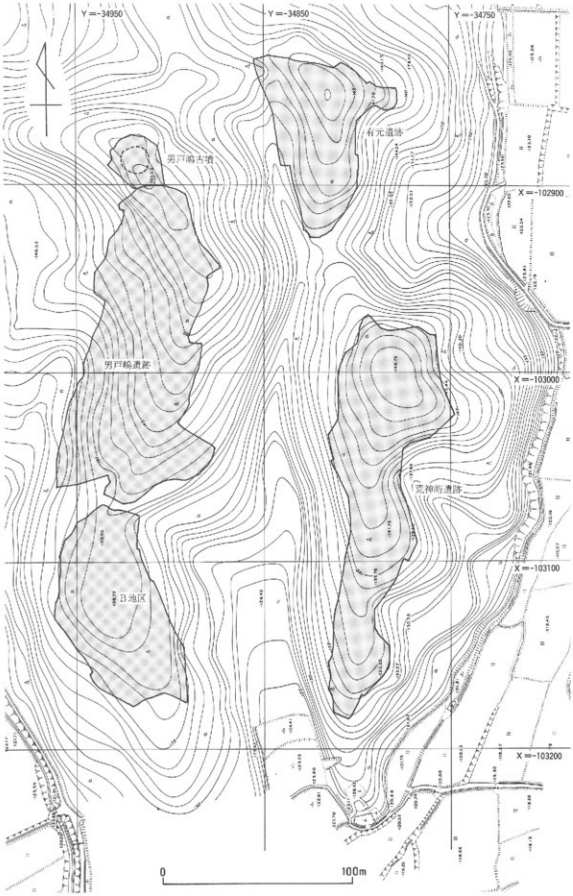


図3　有元遺跡・男戸崎遺跡周辺地形図(1：2,000)

平成７年８月１日から有本古墳群の調査を開始し、９月１日からはこれと併行して有本遺跡Ａ地区の調査をおこなった。Ａ地区では弥生時代集落址を検出したが、同一丘陵の尾根に存在する有本古墳群の墳丘下にも遺構が存在することが判明したため、古墳群調査終了後、一部の古墳について盛土を除去して下層の精査を行った。Ｂ地区は10月13日から調査を開始し、弥生時代の集団墓地が丘陵全面に存在することを確認した。平成８年４月10日に調査を終了した。

有本遺跡Ｂ地区の調査と併行して、平成８年２月16日からは男戸嶋古墳の調査を、同２月29日には男戸嶋遺跡の調査を開始した。調査区のグリッド割りは、他遺跡と同様に国土座標に従った10ｍメッシュとした。男戸嶋古墳と同遺跡は連続しているため、古墳の北西部、Ｘ＝-102,870ｍ、Ｙ＝-34,960ｍの地点を原点とし、南方に１から始まるアラビア数字を、東方向にＡで始まるアルファベットを用いて調査用座標を設定した。本書の調査区名称はこの座標による。

男戸嶋遺跡は、遺構分布密度は低いものの、今回の調査遺跡の中では最大のもので、排土の処理等に手間取った。平成８年10月８日に発掘作業終了後、平成８年10月22日にラジコンヘリコプターを使用した空中写真撮影を行った。

平成８年10月４日からは有元遺跡の発掘調査を開始した。本遺跡は、立木伐採後の観察では尾根上に地形の凹凸がみられ、古墳の存在が予想された。試掘調査の結果、これらは自然地形であることが判明したが、丘陵の西斜面からは須恵器の出土があり、古墳時代集落址の存在が確認された。この段階では遺跡範囲の確認が充分とはいえなかったので、バックホーを用いた表土除去の際に遺構の有無を見ながら、最終的に南北100ｍ、東西80ｍの範囲を調査することとした。調査区の東端は、工事対象外の緑地に隣接している。調査区の北西外の、Ｘ＝-102,820ｍ、Ｙ＝-34,860ｍの地点を原点とし、南方および東方に開く調査用座標を、男戸嶋遺跡と同様に設定して調査を実施した。

平成８年12月14日には、隣接する荒神峪遺跡とあわせて有元遺跡の一般市民を対象とした現地説明会を行った。その後も調査を続け、遺構がほぼ掘り上がった12月24日に有元遺跡の空中写真撮影を行った。それと併行して遺構実測および写真撮影を行い、平成９年１月14日に現地調査を終了した。

用地内の他の遺跡については、平成８年５月15日から同12月24日まで荒神峪遺跡の発掘調査を実施した。古墳公園として保存整備される田邑丸山古墳群については、古墳範囲と構造の把握を目的とする確認調査を平成９年１月21日から開始した。この間に田邑丸山古墳群の南側で工事中に弥生住居址が発見され、緊急に発掘調査を実施し（田邑丸山遺跡）、平成９年４月９日に流通センター予定地内の埋蔵文化財調査を完了した。

一部調査と併行しながら、平成８年度に有本古墳群、平成９年度に有本遺跡・上遠戸嶋遺跡・男戸嶋古墳、平成10年度には荒神峪遺跡と有元遺跡・男戸嶋遺跡の報告書を作成した。

3　調査体制

発掘調査は津山市教育委員会が主体となって、以下の体制で実施した。

津山市教育委員会	教育長	藤原修己（～平成８．９．30）
		松尾康義（平成８．10．１～）
	教育次長	内田康雄（～平成８．３．31）
		中尾義明（平成８．４．１～平成９．３．31）

山本直樹（平成９．４．１～平成10．３．31）
菊島俊明（平成10．４．１～）
文化課長　　榎山三千穂（～平成９．３．31）
永礼宣子（平成９．４．１～）
文化財センター所長　神田久遠
次長　中山俊紀
主査　安川豊史（調査担当）
主事　小郷利幸（　〃　）
主任　青木睦子（事務担当、～平成８．９．30）
主事　坂本裕子（　〃　、平成９．４．１～）

遺物整理作業は、文化財センター嘱託員野上恭子、岩本えり子、家元弘子、臨時職員小澤かおり、大谷ゆかり、丸王佳苗、橋本玲恵、浅岡美恵、広政美智子、八幡佳奈絵、山本有希、上原香里、三谷順子が担当し、遺物の実測は上原と安川がおこなった。

発掘作業は、社団法人津山市シルバー人材センターにお願いした。作業従事者は次のとおりである。

調査作業員　青木　保、内田克巳、内田久仁男、沢　保、柴田揚一、杉山由和、高山　実
田口晴道、田中琢志、中尾一雄、中村　信、西本　徳、橋本　満、平林　好
広野　守、細田憲一、三好昭二、水島友一、水杉暁四、横部　明、米井英祐
脇山　康、脇山静馬、青木敬子、青木照美、青木敏子、稲村奈美子、右近冬子
内田秀子、内山芙喜子、坂手美恵子、高橋不三子、高山祥子、田渕高子
橋本琴枝

学生アルバイト他　赤坂健太郎、為貞義弘、仁木良知、藤本　優、片岡大助、田渕芳宣、熊代昌之
細川　浩、八木利恵、春名葉子

なお、発掘調査から報告書作成にいたるまで、津山市土地開発公社・文化財センター職員および下記の方々の指導、助言、協力を得た。記して厚く御礼申しあげます。

近藤義郎、河本　清、高畑知功、立石盛詞、土居　徹（敬称略）

Ⅳ　有元遺跡の調査

1　遺跡の概要

有元遺跡は、大別すると弥生時代後期の集落遺跡と古墳時代後期の集落遺跡からなる複合遺跡である。遺跡が南北100m、東西80mの調査区の内、中央の尾根筋から東側の斜面に弥生集落が位置し、反対の西側に古墳集落が位置するという、対照的な位置関係を示す。

弥生集落は、東斜面のやや高所に営まれ、２棟の竪穴式住居、４基の段状遺構、24基の袋状貯蔵穴、その他溝状遺構からなる。この内、住居は丘陵北側の最高所から東に派生するゆるやかな尾根上に立地し、その周囲と丘陵南東斜面の２群に分かれて袋状貯蔵穴が存在する。段状遺構は住居の南北に分かれて位置する。各遺構の位置からは東側に戸嶋地区の広い谷間を見下ろすことができ、弥生時代集落としては通常の立地を示す。これらの遺構はいずれも後期前葉に属する。

これに対し、古墳集落は西斜面の下方を中心に、男戸嶋遺跡の所在する丘陵との間に形成された狭い谷底にかけて位置する。この場所は、北側と東西の３方が丘陵で囲まれ、南側にも幅の狭い谷が続き、あたかも周辺の平地から隠れたような特殊な立地をもつ。５棟の竪穴式住居、２棟の掘立柱建物、16基の段状遺構、１基の土坑が検出された。このうち、１棟の住居だけは丘陵の頂部付近に位置する。

上記２時代の遺構の他に、４基の長方形土坑を検出した。いずれも所属時期を示す遺物は出土しなかったが、縄文時代の落とし穴と考えられる。これらの遺構は主に尾根筋に沿って設置されていて、狩猟対象となった動物の生態を知る上で興味深い。

また、西側谷底の堆積土中下層から弥生中期後葉を中心とし、一部後期前葉を含む遺物が出土した。この地点には弥生時代の遺構は存在せず、本遺跡の弥生集落に由来するもののほか、西の男戸嶋遺跡側から廃棄されたものか、流出したものの可能性がある。ただし、隣接部の試掘調査では遺構の存在は確認されていない。

2　弥生時代

A　住居址

SH２（図４．２）　調査区の最高所から東に派生する尾根の斜面に位置する直径7.4mの円形竪穴式住居。中央穴を中心として同心円状に３回の拡張がなされている。斜面下半部は流失していて、壁と壁溝は斜面上方の北西部だけに遺存する。当初のSH２Aは４本柱で、直径約4.6mをはかる。次のSH２B段階でもほぼ同じ位置で柱の建て替えを行うが、住居規模はひとまわり大きくなる。SH２C段階では６本柱、最終段階のSH２Dでは７本柱となり、規模はさらに拡張する。拡張に伴い、中央穴も造り替えられているが、新旧関係の詳細は把握できなかった。中央穴内には木炭粒を多く含む暗褐色灰土層が堆積していた。

最終段階で火災を受けていて、北西の壁際で弥生土器が出土した。西側の壁際床面から拳大程度の円礫が10数個出土したが、その性格は不明である。

SH２出土土器（図４.11）　壺形土器（１-３）、甕形土器（４-９）、高坏形土器（10・11）がある。こ

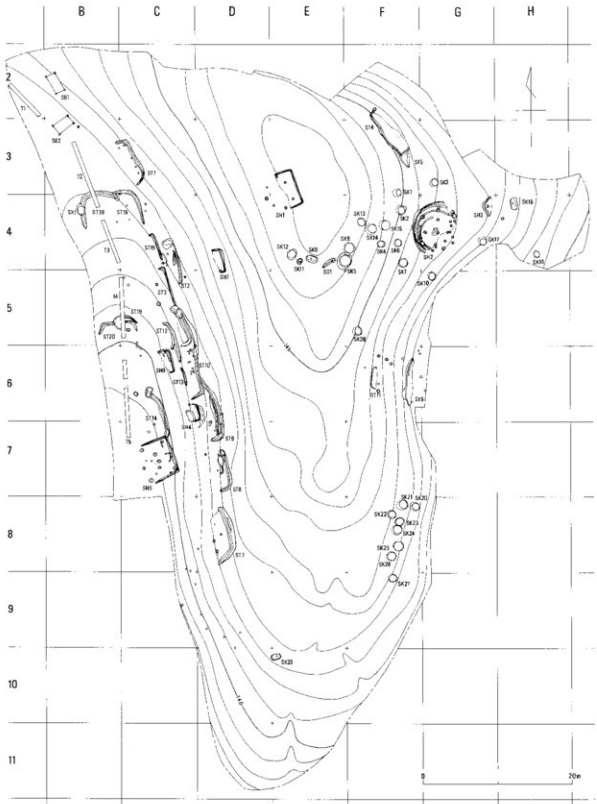


図４．１　有元遺跡全体図（１：500）

のうち、２・５・10は北西壁際の床面に集中して遺存していたものである。

壺はいずれも長頸壺で、筒状の頸部に沈線文を施す。

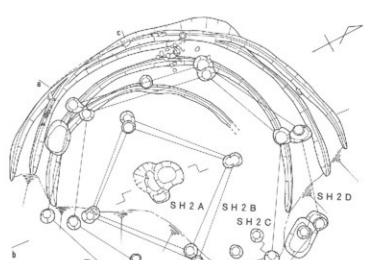
甕の口縁部には端面に凹線文を施すもの(5)と、ヨコナデ調整のみで凹線文をもたないものの２者が認

められるが、後者が多い。甕底部の内面はヘラ削りを施す。

高坏はいずれも坏部だけで脚台部を欠く。10は、緩く湾曲した坏体部がわずかに屈曲して上部外方に開く形態をもち、あまり類例をみない。脚台との接合部の成形は円盤充填法によるが、円盤を欠く。11は、いったん上方に屈曲して再び外方に屈曲した口縁部をもち、口縁端部は丸くおさめていたらしい。屈曲部の外側には明瞭な稜線をもち、上側の屈曲線の上下にはヨコナデによる凹線を巡らせる。

SH 3（図４．３） SH２の東下方に隣接する隅丸方形の住居址で、４本柱と考えられる。斜面上方の東側に床面と壁面の一部を残すだけで、柱穴も南東側の２穴を除き流失している。１辺が４ｍ程の隅丸方形の平面形であったと推定される。埋土中から甕形土器の口縁部小片が出土した。

SH 3 出土土器（図４.11-12） 拡張した口縁端面に２条の凹線文を施す。中期後葉にさかのぼる可能性がある。



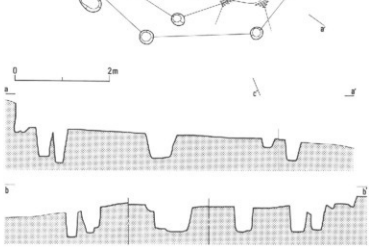


図４．２ SH２実測図（１：80）

B 段状遺構

ST 4（図４．４） 調査区頂部からやや下った北東部の斜面に位置する。南東側を段状遺構ST５に切られている。等高線に沿った長さ6.6m、幅2m弱の平坦面を削りだし、山側に溝を巡らせる。本来は、ST５を含めた長さ8.6mの規模であったと考えられる。平坦面の中央近くに径40㎝の焼土面を検出した。山寄りの床面に径30㎝程の河原石が置かれていた。溝からは高坏形土器が出土した。溝の北西端部に２本の柱穴を検出したほかには、精査したにもかかわらず柱穴等は検出されなかった。

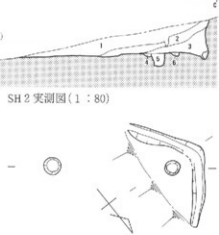


図４．３ SH３実測図（１：80）

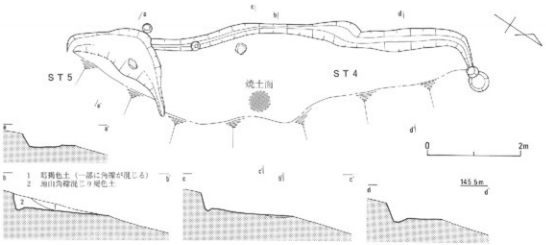


図4．4　ST4・ST5実測図（1：80）

上屋の構造は不明だが、作業場と考えられる。

ST4出土土器

（図4．11-13）　高坏形土器で脚台部下半を欠く。屈曲して上部外方に開く口縁部をもち、円盤充填法による成形である。器肌荒れのため調整不明。

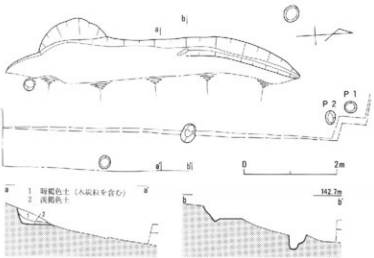


図4．5　ST6実測図（1：80）

ST5（図4．4）　長さ2m程の平坦面を画する溝が遺存するだけで、平坦面はほとんど失われている。溝の中央部は幅広となっていて、自然礫が出土した。

ST6（図4．5）　調査区中央部の東端斜面に位置する。この地点は丘陵の緩やかな谷部にあたり、黄褐色の基盤層の上には暗褐色土が厚く堆積している。そのため、遺構検出作業時にやや掘りすぎたが斜面に数本の柱穴を検出した。ただし、これらの柱穴相互および平坦面との関係は不明である。幅0.8m、長さ6m程の平坦面が残るが、山側の溝は途中で消失し壁面のみとなる。溝からは、棒状の自然円礫が出土したほか、段状遺構北側のP1から弥生土器が出土した。

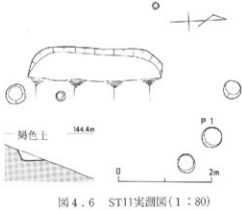


図4．6　ST11実測図（1：80）

ST6出土土器（図4．11-14）　壺形土器の破片で、拡張した口縁部に3条の浅い凹線文を施す。頸部以下の内面をヘラ削りし、胴部外面はハケメ調整の後、ナデ仕上げする。

ST11（図4．6）　ST6の斜面上方に位置する。長さ2.8m、幅0.6mの平坦面を削りだしただけのもので、壁溝はもたない。他の段状遺構とは性格を異にする可能性もある。周辺部から柱穴がいくつか検出されたが、建物としてはまとまらない。堆積土中から弥生土器片が出土した。

ST11出土土器（図４.11-15）　甕形土器の破片で、拡張した口縁部はヨコナデを施す。頸部以下の内面をヘラ削りする。

C　袋状貯蔵穴

SK１からSK28までの合計24基の貯蔵穴が検出された。これらは、大きくみて南北の２群に分かれる（図４.１）。南群（SK20-SK27）は南北10m程の間に８基が存在し、密集の度合いが高い。北群は16基の貯蔵穴からなり、南北40m、東西65mの範囲に分布する。北群のSK１西側に土坑状の落ち込みがあり、調査時点にSK16という遺構番号を付したが、その後検討した結果、遺構ではないと認められたので、この遺構番号は欠番となっている。

どの貯蔵穴も他の遺構との重複は認められない。特に北群ではSH２の山側の周囲に位置していて、住居の壁面からは1.5mないし２mの距離を置く。このことは、住居壁体外に想定される土堤の存在を傍証させるものである。

いずれも上面が狭く、底面付近に最大径をもつ台形の断面形、円形の平面形を基本とする。底面には溝などの付属施設は存在せず、平坦である。

SK1（図４.７）　SH２の北東側に位置する。東西断面で口径0.6m、深さ0.8m、底径1.1mをはかる。斜面下方から奥に掘り進めたような断面形を呈する。底面から中程までは「砂時計」状の土層堆積状況を示す。弥生土器片が出土した。

SK１出土土器（図４.11-16・17）　甕の口縁部と底部がある。口縁部は拡張してナデ調整するのみで、凹線文は施さない。底部の内面はヘラ削りする。

SK２（図４.７）　SK１の南側に位置する。上面は、柱穴の可能性がある小土坑と切り合うほか、崩落のため不整な形態を示す。口径１m、深さ1.2m、底径1.3mで、堆積土は13層に分層される。比較的長時間にわたって埋没したことが知られる。上層の一部には炭灰層が認められ、隣接するSH２の火災との関連も推察される。

SK３（図４.７）　SH２の北側に位置する。口径0.75m、底径0.95m、深さは0.4mをはかるのみで、上部を流失している。

SK４（図４.７）　SK２の南東に位置する。口径0.8m、底径0.95m、深さは0.15mと底部をわずかに残すのみである。底面から弥生土器の胴部小片が出土した。

SK４出土土器（図４.11-18）　１個体の甕形土器がある。口縁部から胴部にかけての破片で、口縁肥部は上下に拡張してナデ仕上げする。頸部以下の内面はヘラ削りする。

SK５（図４.７）　丘陵頂部付近に位置するもののうちのひとつで、SK８に隣接する。SK８との間には幅0.7mの、断面が台形をなす溝が存在するが、これらの土坑と同時に存在したものかどうか不明である。口径1.7m、深さ1.15m、底径1.3mをはかり、大形の印象を受けるが壁面の崩落が進んでいるためでもある。ただし、この崩落は一度に起きたものではなく、堆積層は地山ブロックからなる崩落土層と有機質を含む暗褐色土層との互層となって堆積している。底面近くの一部に主として木炭粒からなる炭灰層を検出した。

SK６（図４.７）　SK４の東に位置する。SK２と同様、SH２の周辺に所在するが、SH２の壁体とは約２mの距離を置く。口径0.75m、深さ0.6m、底径1.1mをはかる。下層の堆積土には木炭粒を多く含む。

底面からやや浮いた状態で、長さ55cm、幅24cm、厚さ16cmの大形の自然礫が出土した。円礫で平坦な形状の上面中央には、敲打痕が集中して認められるほか、磨滅痕も観察される。据え付けて使用された

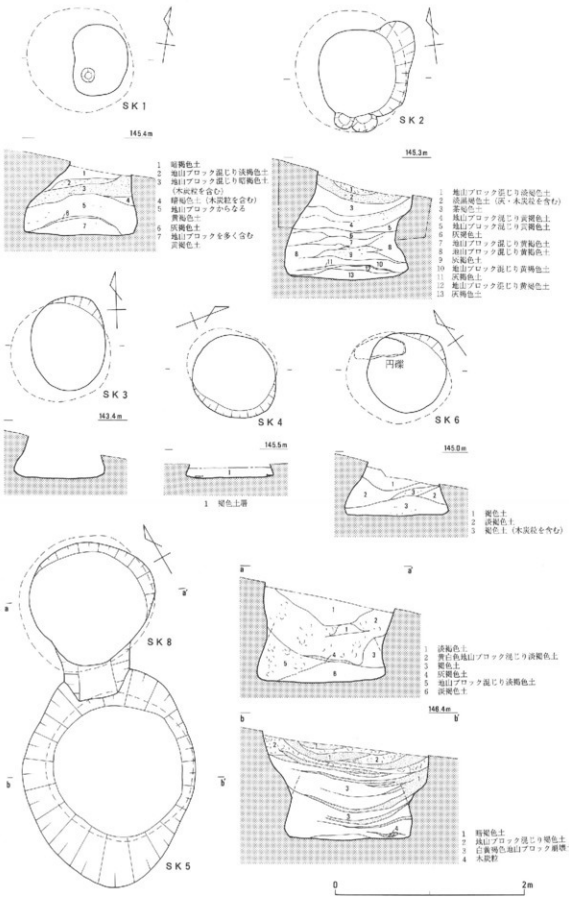


図4.7　袋状貯蔵穴実測図1(1:40)

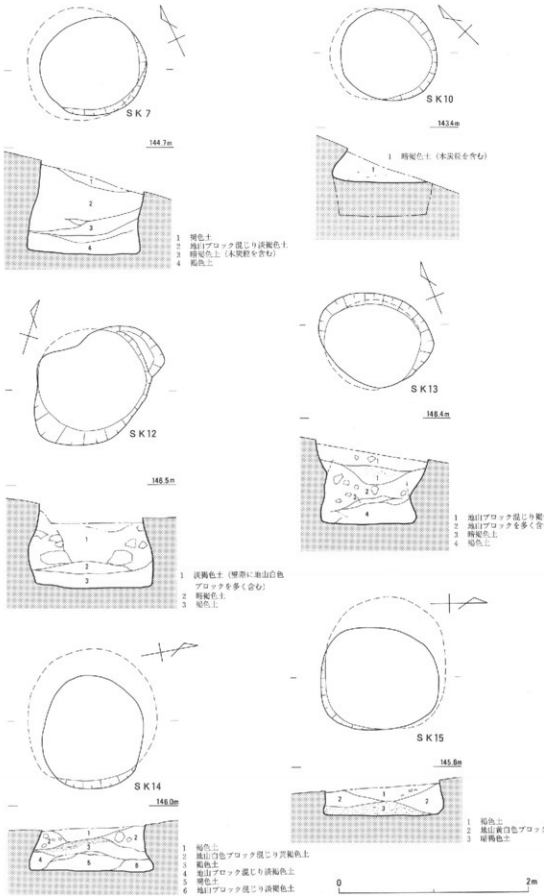


図４．８　袋状貯蔵穴実測図２（１：40）

台石と考えられるが、土坑の規模からみてこの位置で使用されたものとは思えない。坑内に保管されたか、遺棄されたものであろう。

SK 7（図４．８） SK６の南に位置する。口径１m、深さ１m、底径1.2mをはかる。壁面が比較的直立していて、崩落の程度が進んだものである。石鏃1点が出土した。

SK 7 出土石器（図４.13-１） サヌカイト製の凹基式石鏃で、両面の中央に素材時の剥離面を大きくとどめる。長さ2.4cm、幅1.1cm、厚さ3.5mm。

SK 8（図４．７） SK5に隣接する。口径1.4m、深さ1.05m、底径1.35m。やはり壁面の崩落が進んでいる。

SK 8 出土土器（図４.11-19） 甕形土器の口縁部小片が出土している。頸部以下の内面をヘラ削りし、下方に拡張した口縁端面には凹線文を施す。

SK10（図４．８） SH２の南側に位置する。比較的急な斜面に造られていて、底面と山側壁面の一部をとどめる程度で、大半を流失している。山側の深さ0.3m、底径1.1m。暗褐色の堆積土には木炭粒が含まれる。

SK12（図４．８） 丘陵上面に位置する。北群の貯蔵穴のうち西端に所在するもので、白色の硬い基盤層を掘り抜いて造られたものである。このため、坑内の堆積土中には白色の基盤ブロックが壁際に集中して崩落している。上面の一部が木の根によって攪乱を受けている。口径1.1m、深さ0.85m、1.2mをはかる。

SK12周辺出土土器（図４.11-20） 脚台部を欠く高坏形土器がある。この遺物は遺構から遊離して出土したものである。屈曲して外方に開く口縁部は丸くおさめている。脚台との接合部は、通常の円盤充填法とは異なる成形法で新しい傾向を示す。

SK13（図４．８） SK８の北東に位置する。口径1.2m、深さ0.9m、底径１mをはかる。上半部は壁面の崩落が進み、断面形は上半が開いた形状となっている。

SK14（図4.8） SK13の南東に隣接する。口径1.1m、深さ0.5m、底径1.3mをはかる。上部はかなり流失している。他の多くの例と同様に底面付近は、壁面を構成する基盤層由来の堆積土と外部からの流れ込みによる褐色土の交互の堆積があり、大きく崩落した基盤土ブロックは比較的上部に顕著である。

SK14出土土器（図４.11-21） 壺形土器の口縁部片で、上下に拡張した端面に浅い凹線文を施している。

SK15（図4.8） SK14の東側に位置する。上部を大きく流失していて、底面付近だけが遺存する。口径1.2m、深さ0.35m、底径1.3mをはかる。

SK17（図４．９） SH２の東側斜面に位置する。口径0.8m、深さ0.8m、底径1.15mをはかる。土坑内には中間に薄い淡褐色土層をはさみ、その上下に木炭片を含む暗褐色土が堆積する。SH２の火災に対応するもので、貯蔵穴と住居の同時存在を裏付ける事例である。

SK19（図４．９） 調査区の東端近く、もっとも低い箇所に位置する。底面付近を残すだけで、上部を流失する。口径0.7m、深さ0.3m、底径0.9mの小形のものである。坑内には暗褐色土が堆積していて、木炭粒および土器片を含む。打製石斧が１点出土した。

SK19出土遺物（図４.11-22・23、図４.13-５） 弥生土器は、いずれも底部の破片で、22は甕形土器、23は壺形土器の可能性がある。23の内面はヘラ削りのあとナデ調整を加える。打製石斧(5は、長さ10.2cm、幅3.5cm、厚さ1.9cmをはかる緑色片岩製のものである。細長い円礫を打割して素材とし、簡単な調整を加えたもので、土掘り具として使用されたものと思われる。

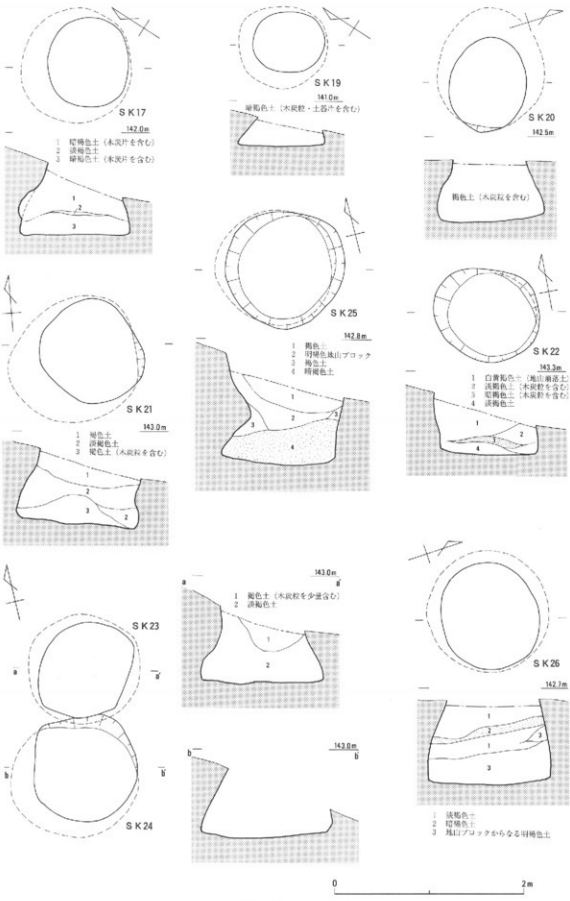


図４．９　袋状貯蔵穴実測図３（１：40）

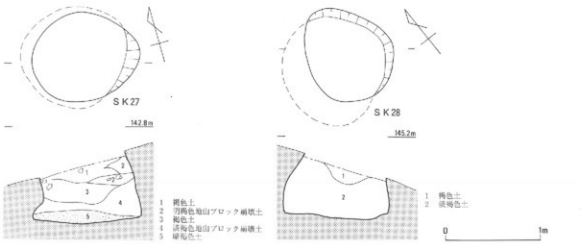


図４.10　袋状貯蔵穴実測図４(１：80)

SK20（図４.９）　南群の北東壁に位置する。口径0.75m、深さ0.7m、底径1.15mをはかる。坑内には褐色土が堆積し、木炭粒を含む。

SK21(図４.９)　SK20の西側に隣接する。断面形は斜面の山側を抉った形状を示す。最下層の３層には木炭粒を含む。

SK22(図４.９)　SK21の南西に位置する。口径1.1m、深さ0.6m、底径1mをはかる。壁面の崩落が進み、断面形は袋状を呈さない。下半の堆積土中には木炭粒を含む。

SK23(図４.９)　SK22の南東に位置する。口径0.9m、深さ0.8m、底径1.3mをはかる。上層の褐色土中には木炭粒を少量含む。

SK24(図４.９)　SK23の南側に、底面を接するように隣接する。口径1.05m、深さ0.7m、底径1.4mをはかる。本例は土層断面図を作成できなかったが、SK22同様比較的単純な堆積状況を示していた。土器片が出土した。

SK24出土土器（図４.11-24・25・26）　甕形土器の底部片と口縁部片がある。いずれも小片で器肌荒れのため、調整等の詳細は不明だが、24の内面はヘラ削りしている。

SK25（図４.９）　SK24の南に位置する。口径1.3m、深さ1.2m、底径1.2mをはかる。底面近くを山側に掘り込み、上部は崩落しているため靴状の断面形を呈する。

SK26（図４.９）　SK25の南東に位置する。口径１m、深さ0.9m、底径1.3mをはかる。坑内から土器が出土した。

SK26出土土器（図４.11-27）　甕形土器とみられる。器面の剥落が激しく、調整等は不明である。口径の割に胴部が大きく、短頸壺形土器の可能性もある。

SK27（図４.10）　南群の南端に位置する。口径0.9m、深さ0.8m、底径1.15mをはかる。

SK28（図４.10）　口径0.85m、深さ0.65m、底径1.1mをはかる。

D　溝

SD１（図４.１）　SK５の東側に、幅0.5m、長さ約２mの溝を検出した。深さは0.1mで一端は直径50cmの浅い土坑と重複する。反対側はそのまま消失する。この溝の性格については不明である。土坑からは弥生土器片が出土した。

E　谷部出土の遺物

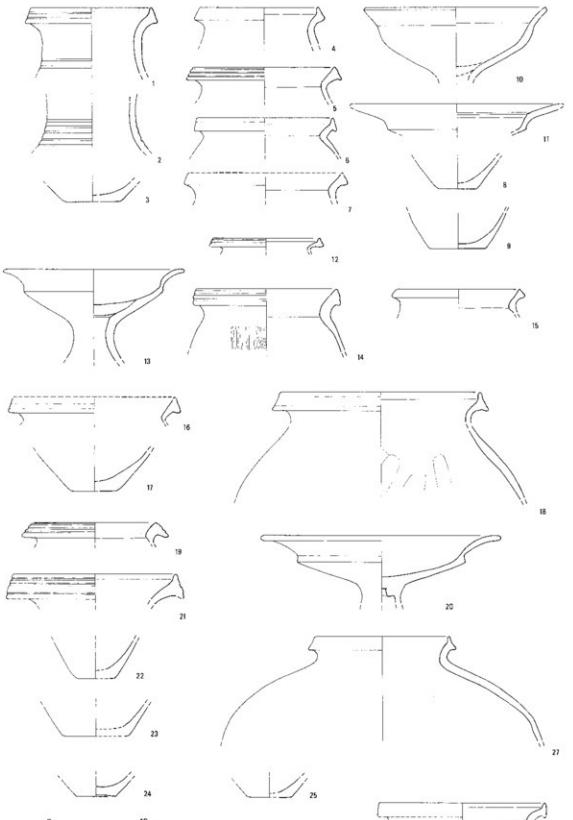


図４.11　各遺構出土弥生土器（１：４）

(1-9：SH2、12：SH3、13：ST4、14：ST6、15：ST11、16・17：SK1、18：SK4、19：SK8、20：SK12付近、21：SK14、22・23：SK19、24-26：SK24、27：SK26)

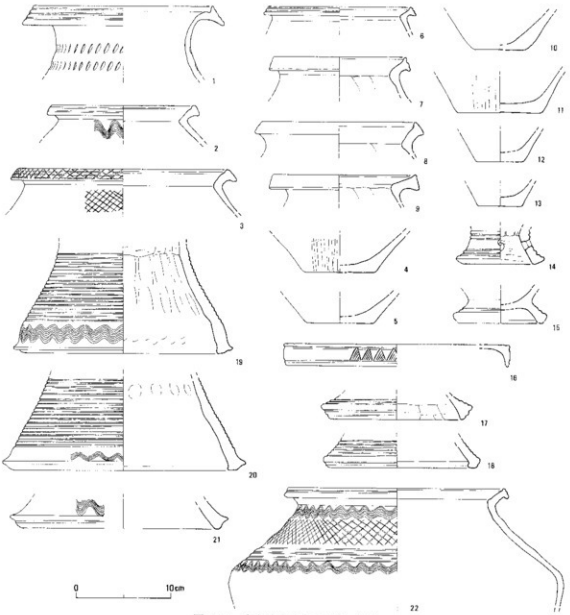


図４.12　谷部出土弥生土器（１：４）

（１・10・22：Ｔ３付近、２・４・９・16・17・19・21：Ｔ４付近、11・14：Ｔ２上層、15・20：Ｔ３中層、18：Ｔ５付近）

調査区西側の谷部に設定したトレンチおよびその周辺から、若干の弥生土器と石器が古墳時代遺物とともに出土した。ここでは弥生時代遺物について説明し、トレンチの状況および出土状況については古墳時代遺物とあわせ次節で説明する。

弥生土器（図４.12）　長頸壺(1)、無頸壺（２・３・22）、甕形土器（６－９）、壺形土器底部（４・５）、甕形土器底部(10-13)、壺形土器あるいは鉢形土器の脚台(14・15)、高坏形土器(16-18)、器台形土器(19-22)がある。

長頸壺は、頸部外面に指先による押圧文を２段巡らせ、口縁端面には凹線文を施す。

短頸壺は甕に近い形態をもつが、肩部外面に装飾を施すことと肩部が角をもって屈曲することが異なる。肩部の装飾は、頸部下端から櫛描波状文で始まるもの（２・22）と、ヘラ描き斜格子目文で始まるもの(3)がある。３は口縁端面に凹線文を施した後、ヘラ描き格子目文で加飾する。壺底部内面は、ナデ仕上げで明確なヘラ削りの痕跡は認められない。

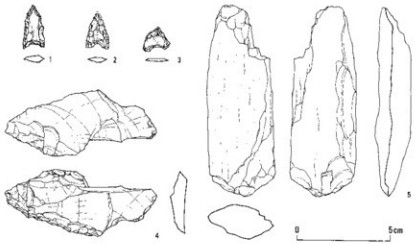


図4.13 石　器(1：2)

甕の口縁部は、端面に凹線文を施すもの(6)と、ナデ仕上げのものとがあり、後者は頸部以下の内面をヘラ削りする。甕底部内面はナデ仕上げする。

高坏の坏部口縁(16)は、深皿状の坏部から屈曲して水平に張り出したもので、端部を下方に拡張し凹線文を施した後に、ヘラ描きの鋸歯文を巡らせる。高坏脚台部外面にはいずれも凹線文を施し、17の内面はヘラ削りする。

器台はいずれも脚台部で、外面下部には櫛描き波状文を巡らせる。波状文の上には細かい凹線文帯を施す。19の嗣部中央内面はヘラ削りする。

以上の弥生土器は、Ⅳ期からⅤ期前葉にかけてのもので、7～9はⅤ期に属する。

石　器(図4.13-2・3・4)　いずれもサヌカイト製の石鏃2点と削器がある。2は凹基式石鏃で、長さ1.9cm、幅1.2cm、厚さ2.5mmで、先端の一部を欠く。3は左右非対称の不整なものだが、いちおう先端を作り出している。長さ1.4cm、幅1.4cm、厚さ1.5mmの凹基式鏃。2点ともT2の周辺から出土した。

削器はT4中層で出土したもので、長さ8.1cm、幅3.3cm、厚さ8mmをはかる。不整な剥片の一側縁に、片面調整で急角度の刃部を形成したものである。

3　古墳時代

A　住居址

SH1(図4.14)　調査区の頂上に位置する方形の竪穴式住居址で、西半部の壁と床面は流失している。東辺は4.7mをはかり、ほぼ同規模の正方形に近い平面形であったとみられる。

壁面の高さは、保存状態の比較的良い東側で0.3m程度で、垂直に近く立ち上がる。壁面に沿って幅15cm程の壁溝が巡る。壁面から約1m離れた位置に、主柱と考えられる4本の柱穴が正方形に配置されている。柱間は2.4mから2.7m、床面からの深さは0.4mで、しっかりしたものだが、床面での柱穴の直径は25cm程度で、あまり太い柱は用いられていないようである。床面には、4本の主柱穴の他に、中央付近の南北の壁際にそれぞれ1本の柱穴がある。いずれも主柱にくらべると浅い。北側の柱穴は、径30cm、深さ15cm。南側柱穴は、長径38cmの楕円形で深さ約30cmをはかり、直径18cmの柱痕が認められた。これらは棟柱に相当すると考えられる。この柱列に直交した西側には二段掘りの1柱穴が存在する。本住居址に付属することが確実とすれば、出入り口に関する施設の一部かもしれない。

床面には柱穴以外の施設は認められない。北東柱穴の内側の床面で土師器甕形土器が1点出土したが保存状態が悪く、実測することはできなかった。

SH4(図4.19)　調査区中央の西斜面に位置する小形方形の竪穴式住居址は東側の辺が2.1mをはかる。西側半分ほどを流失していて、流失箇所は浅い土坑状を呈する。わずかに10cm内外残る壁体の内側には

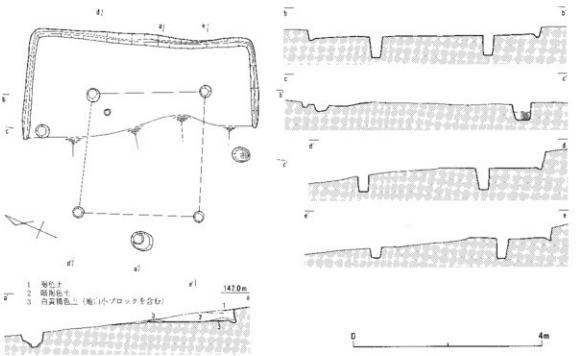


図４.14　SH１実測図（１：80）

やや幅広の溝が巡る。東側の床面両隅には、壁溝と一部を重複して柱穴が位置する。柱穴の深さは10数cmから20cm。北側に１柱穴を検出したが、壁体部と重なる位置なので、これは本住居に付属するものではないと思われる。床面は東側半分程を残すが、柱穴以外の施設は検出されなかった。

北東柱穴から須恵器坏身が出土した。

本住居址の上層には、暗褐色土と淡褐色土の互層からなる堆積層が存在する。これは、住居址の東側に位置する段状遺構ST９の造成埋土と考えられるもので、ST９がSH４の後に造られたことを示している。

SH４出土土器（図４.23-１-３）　須恵器が３点出土している。２が柱穴から出土し、他はいずれも床面近くの出土である。坏身（１・２）と有蓋高坏蓋(3)がある。

坏身は、口径が10ないし10.6cmをはかり、口縁端部には段をつける。

有蓋高坏蓋は、上部がくぼんだ碁石状のつまみをもち、肩部の段はややにぶい。口縁部には明瞭な端面をつくる。口径11.7cm、器高5.5cm。

SH５（図４.15）　西側谷部の南方に位置する竪穴式の方形住居址で、東辺は4.8mをはかる。谷側の西辺は壁体が遺存していないが、西側の規模もほぼ同様の正方形に近い平面形と考えられる。ただし住居の平面形は正確な方形ではなく、ややいびつな形態を示す。

床面中央に２本の柱穴が南北に位置し、四隅の壁際には柱穴が位置する。中央の２柱穴の深さは両者とも約60cmを測るのに対し、四隅の柱穴の深さは10cmから20cm程度と浅いことから、棟柱である中央の２柱が主として屋根の荷重を支えていたことを示している。本遺跡では、この２＋４本という柱構造の存在が注目される。

２主柱の間には、平面形が長径50cmの楕円をなす浅い皿状の窪みが存在する。深さは５cm程で、底面から西外部の床面の一部は焼けて赤褐色を呈する。窪みの中には炭灰層が薄く堆積していた。この窪みは炉とみられる。

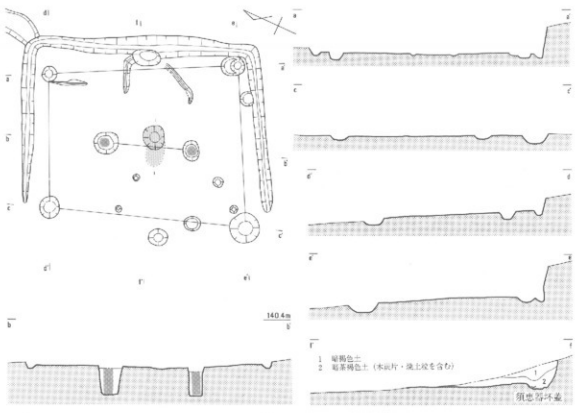


図４.15　SH５実測図（１：80）

東壁際に浅い土坑があり、そこから「ハ」の字形に幅５㎝程の浅い溝が延びている。同様の溝は北東隅の柱穴付近の床面にも認められたが、いずれも性格は不明である。

埋土から須恵器や土師器などの土器が出土した。

SH５出土土器（図４.23-４-17）　須恵器と土師器が出土した。須恵器には坏蓋（４-７）、有蓋高坏（８・９）、甕（10）があり、土師器には直口壺（11）、甕（12-16）、高坏（17）がある。

坏蓋は、いずれも口径が11.4㎝程で、肩から口縁部にかけての屈曲部は明瞭な段をなすが、突出の度合いは低い。どれも口縁端部は段をなす。天井部のヘラ削りは全体の３分の２以上におよぶ。有蓋高坏は、坏部と脚台部の破片がある。坏部(8)は口縁端部を欠くが、推定口径は10.4㎝。脚台部(9)は長方形透しをもつが、個数は不明である。

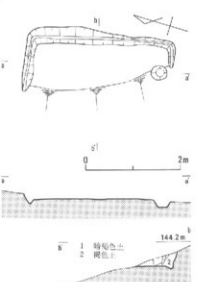


図４.16　SH７実測図（１：80）

直口壺は、頸部からやや開きながら直立する口縁部をもち、口径10.5㎝をはかる。器高10数㎝と推定される小形品である。甕には、ゆるやかに屈曲して外に開いて端部を丸くおさめた形態のA類（12-14）と、二重口縁のB類（15･16）とがある。B類はさらに２者に分類できる。高坏は丸い椀状の坏部をもつ。

SH６（図４.19）　SH４の北側の西斜面に位置する。東辺が3.1ｍの方形住居址で、床面の半分以上を流失している。壁体に沿って巡る溝の他に、北側壁溝から派生する同様の溝を検出した。明確な建て替えの痕跡は認められないので、何らかの付属施設かもしれない。床面中央には床炉があり、長径50㎝の

範囲に被熱痕が認められた。周辺部は暗褐色に、中央部は黄褐色に変色する。残存する範囲には柱穴が認められないが、もともと付属しなかったと考えられる。

住居内の堆積土層は、暗褐色土と褐色土が互層をなしていて、斜面上方に存在する段状遺構ST12あるいはST10などとの間に先後関係のあったことを示している。

SH 7（図4.16） 西側斜面の上方に位置する。東辺が3.1mの方形住居址で床面の3分の2を流失する。壁体と壁溝以外には南壁際付近に柱穴状の浅い土坑を検出したが、本住居に伴うものかどうか不明である。

B 建物址

調査区の北西部に2棟の掘立柱建物址を検出した。いずれも柱穴だけの検出である。

SB1（図4.17-上） 調査区北西隅に位置する1間（2.6m）×1間（1.3m）の建物址。柱穴は径20cm内外の小さなもので、斜面下方にあたる南西側柱列はかろうじて残る程度である。平面形は、ややいびつな長方形を呈する。

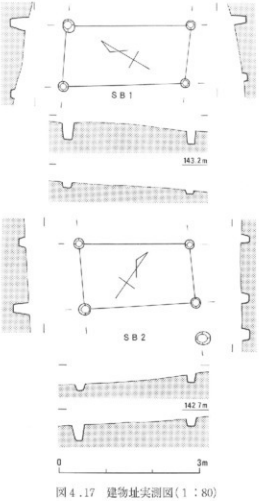


図4.17 建物址実測図（1：80）

SB 2（図4.17-下） SB1の南方に隣接する1間（2.4m）×1間（1.3-1.4m）の、SB1とほぼ同形同大の建物址。柱穴規模も類似する。建物長軸はSB1と直交する。柱穴内から砥石が出土している。

SB 2 出土砥石（図4.28-2） 現長4cm、幅3.5cmの破片で、破損後も使用した痕跡がうかがえる。黄色、比較的硬質の仕上げ砥石である。

C 段状遺構

標高142m前後の丘陵西側斜面から谷部にかけて、多数の段状遺構を検出した。これらは、山側の溝を残す程度のものがほとんどで、平坦面を残すものは少数である。さらに多くは重複し、個々の規模を確認できないものも存在する。

ST 1（図4.18） 調査区の北西隅、SB2の南東に位置する。等高線に沿って、長さ6mの平坦面を造成する。平坦面は流失し、山側に巡る幅0.4m程の溝が残るだけである。溝に沿った内側に一列の柱穴を検出したが、柱間は不揃いで、小規模なものである。南北2間の長方形建物が推定されるが、東西規模は不明。南東部の溝底から小柱穴が検出された。溝から須恵器小片が出土した。

ST 1 出土土器（図4.23-18） 須恵器坏蓋の天井部の破片で、外面の半分ほどまでヘラ削りする。しっかりした屑部をもち、推定口径14cm。

ST2（図4.18） ST1の南側、SH7の斜面下方に位置する。長さ6m、幅0.4mの溝を残すのみで平坦面は失われている。溝の北端には浅い土坑が存在する。溝の中には焼土層および焼土ブロックの堆積が認められ、火災を受けたことがうかがえる。その後、内側に長さ2mの溝が新たに掘られている。

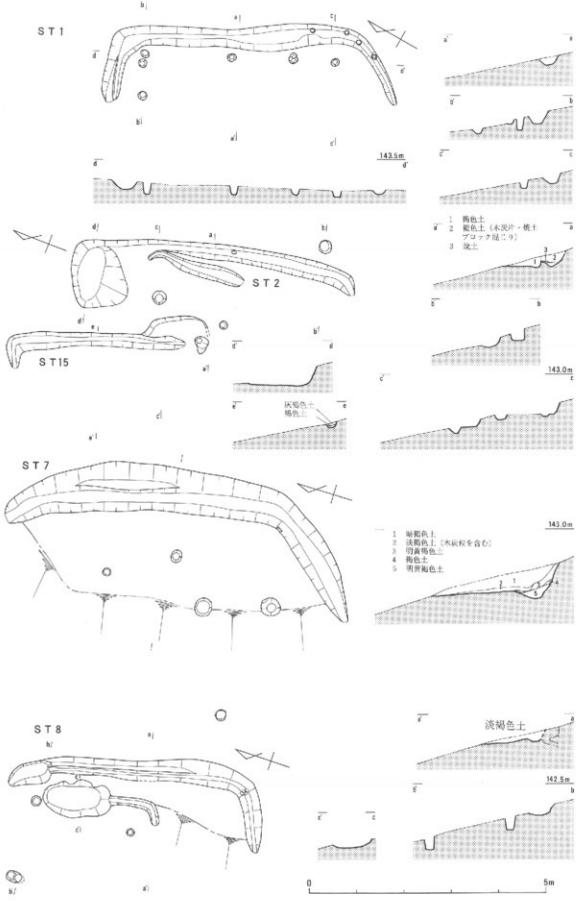


図４.18　段状遺構実測図１（１：80）

下層にST15、ST３が位置するが、隣接していて同時併存は考えにくい。山側の溝から少量の土器と砥石、鉄滓が出土した。

ST2出土遺物（図４.23-19・20、同４.28-１）　須恵器坏蓋(19)と土師器甕(20)がある。坏蓋は、口径13.2㎝をはかり、口縁端部は凹面をなす。土師器甕は、頸部から外方に湾曲して開き丸くおさめた口縁部のもので、成形時の粘土紐痕跡を残す。

砥石（１）は硬質の流紋岩質の石材を用い、多面体をなす不整な形状を呈する。使用中に破損したものを、最後まで丁寧に使用した痕跡がうかがえる。いくつかの研磨面に、鋭利な刃物でつけた条痕を残す。

鉄滓は小片で発掘時に破損したため図示しなかったが、多孔質で比重の軽いものである。

ST３（図４.19）　ST２の西側に位置する。長さ5.3m、幅0.3mの溝が検出された。この溝の北端部は斜面下方に折れ曲がるが、南方は攪乱坑と浅い皿状の土坑を経てさらに５m程延びていた可能性がある。ここでは土坑から南側をST10として記載する。

ST７（図４.18）　調査区南西部の斜面に位置する。長さ７m、幅２mの平坦面を造りだしたもので、山側に幅0.8m、溝底幅0.2mの溝を巡らせる。溝の両端は鈍角をなして斜面下方に屈曲する。平坦面からは４本の柱穴を検出したが、不規則な配置で建物等には復元できない。溝などから若干の遺物が出土した。

ST７出土遺物（図４.23-21・22、同４.28-３）　須恵器坏蓋（21・22）と砥石（３）がある。坏蓋は同形同大のもので、口径が11.5㎝ないし12㎝と他のものより一回り小さいことに加え、口縁の立ち上がりもやや短い。口縁端面は明瞭な段をなす。21は南端の柱穴から、22は溝から出土した。

砥石は、軟質の流紋岩質で、一部に風化した節理面をとどめる。荒く打割して成形したものである。やはり一部に刃物による条痕をとどめる。

ST８（図４.18）　ST７の北側に隣接する長さ５m、幅1.5m程の段状遺構。南方にわずかな平坦面を残す。山側を巡る溝の北端は浅い落ち込みとなっていて、はっきりしない。溝の下層には長径1.4m、短径0.8mの楕円形の皿状土坑と、そこから南に延びて下方に屈曲する１条の溝が検出された。付近に柱穴を検出したが、まとまるものではない。若干の土器が出土した。

ST８出土土器（図４.23-23-27）　須恵器と土師器があり、段状遺構平坦面および埋土から出土した。須恵器には坏蓋（23・24）と坏身(25)がある。坏蓋はいずれも口径12.8㎝で、明瞭に張り出した肩部をもつ。口縁端部は段になっている。坏身は口径10.2㎝をはかり、水平に開く受け部から上方に延びた口縁部には蓋と同様の段をもつ。底部外面の半ばまでヘラ削りする。

土師器は高坏が２点ある（26・27）。いずれも半球形を呈する椀状の坏部のもので、短く開いた脚台をもつ。坏部下半から脚柱にかけて指頭の成形痕をとどめる。

ST９（図４.19）　ST８の北側に位置する。斜面下方に存在するSH４を取り巻く周溝のようなあり方を示すが、先に記したようにSH４の後に営まれた遺構である。山側を巡る幅0.5mの溝は、南北９m近くに達するが、北側は緩やかにカーブしながらST10に達するのに対し、南側は一段低い土坑状となって斜面下方に屈曲するという非対称な形態をもつ。山側の溝に接して、これに先行する溝が内側に存在する。山側の溝、つまり新段階に火災に遭っていて、焼土などが検出された。溝の周辺からいくつかの柱穴を検出した。なかでも山側溝を挟んで存在する１対の柱穴は、たがいに逆方向に傾いていて注意される。少量の遺物が出土した。

ST9出土土器（図４.23-28-31）　いずれも土師器で、手づくねの小形壺らしい底部の破片(28)と、甕

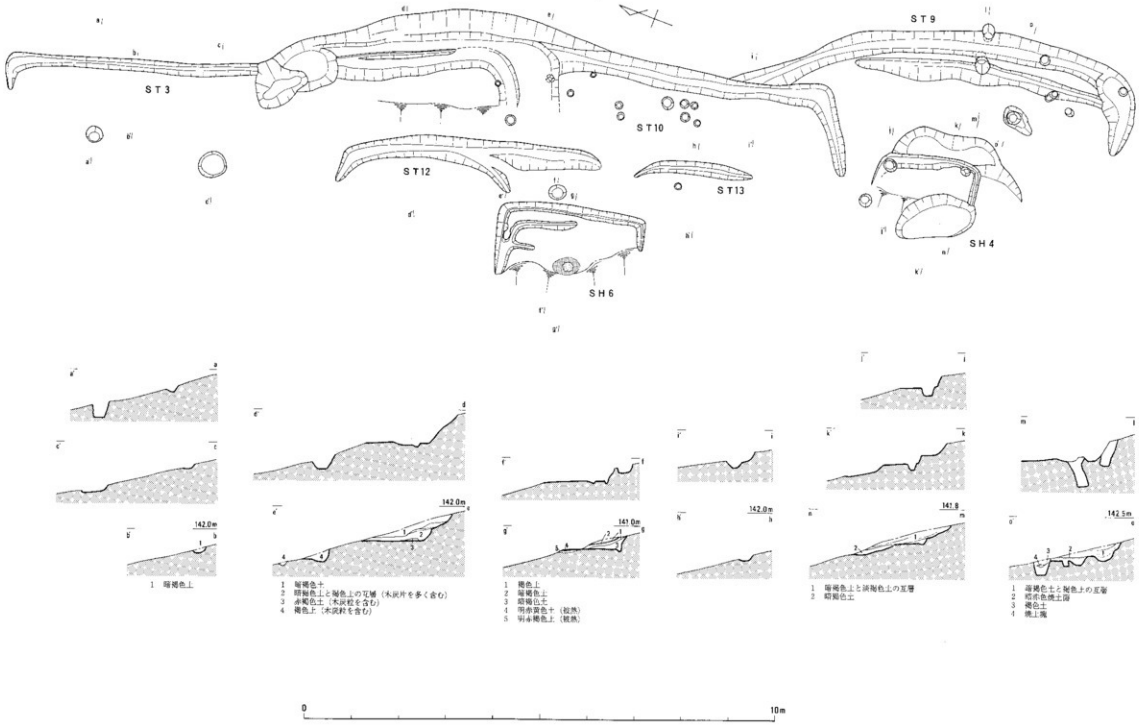


図4.19　段状遺構実測図2（1：80）

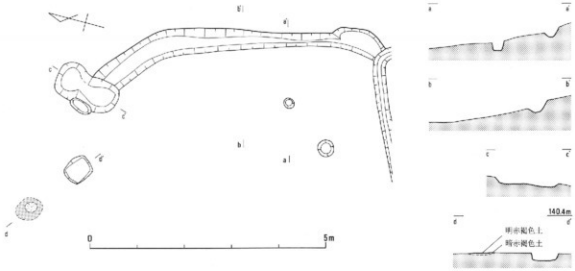


図４.20　ST14実測図（１：80）

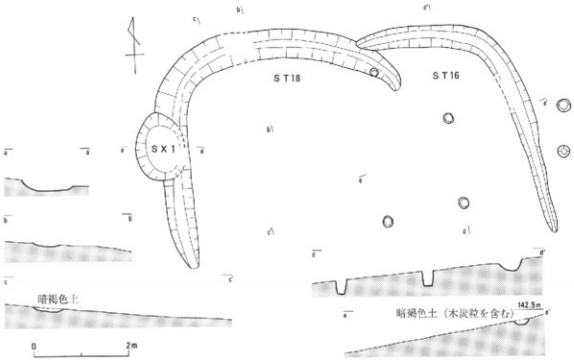


図４.21　ST16・18・SX１実測図（１：80）

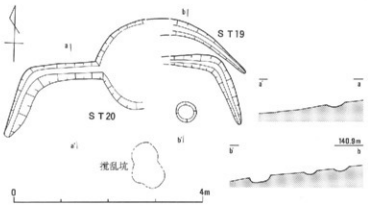


図４.22　ST19・20実測図（１：80）

(29-31) がある。甕は口径10数cmのもので、いずれも屈曲して外方に開く単純な口縁形態をもつ。

ST10（図4.19） ST3とST9に重複しながら、両者の間に位置する。山側を巡る溝だけが残存し、平坦面は遺存しない。溝の南側は屈曲して斜面下方に向かうが、北側は浅い土坑となって終わる。いくつかの小穴を検出したが、いずれも浅いもので柱穴とは言い切れない。

ST10出土土器（図4.23-36-40） 土師器甕（36-39）と高坏脚台(40)がある。甕は、頸部から屈曲して外方に開く口縁形態のもので、端部は丸くおさめる。このうち38は、ST3から延びて来た幅広の溝が屈曲して斜面に下る位置の外側テラスで出土した。

高坏脚台は、短い脚柱から水平に開いた底部をもち、坏部との接合部で剥離したものである。

ST12（図4.19） ST10の下方に位置する。長さ5.5m、0.5m程の溝が残存するだけで、平坦面は流失している。溝の中央部付近は二股となり、一方は斜面側に湾曲して終わる。溝埋土の明確な切り合いは観察できなかったものの、途中で改変されたと考えられる。溝内から須恵器が出土した。

斜面のすぐ下側にSH6が位置するが、同時存在ではない。SH6の堆積土層の中層（2層）には、堆積作用の休止状態を示す暗褐色土の薄い堆積があり、さらにその上に明褐色土の堆積が認められることから、本段状遺構がSH6に後行する可能性がある。

ST12出土土器（図4.24-1-5） 須恵器坏蓋（1・2）と坏身（3-5）がある。坏蓋肩部の屈曲部外面は鋭く突出し、口縁端部は凹面をなして薄く仕上げられている。1の口径は10.8cm、2は12.3cmをはかる。坏身のうち、3・4は口縁部を欠く。5は口径10cmで、口縁端はやや丸みを帯びるものの、端面をなす。坏身、蓋とも大小の2類に分けられる。

ST13（図4.19） ST12の南側に隣接する。長さ2.5m、幅0.3mの溝と1本の柱穴を検出したのみで、平坦面は存在しない。溝の北側は、斜面方向に緩やかに屈曲するので、同様の段状遺構と判断される。

ST14（図4.20） 調査区西側谷南方のSH5に隣接して存在する。西側を向いた南北溝は長さ6m、幅0.5mをはかるが、南に行くほど細くなる。溝の両側は斜面側に緩やかに曲がっているが、北側は浅い皿状の土坑となり、南側はSH5の北隅に達する。両者の先後関係は不明である。溝の下方から柱穴状の落ち込みと皿状の窪みを1カ所ずつ検出しただけで他には関連する遺構はない。溝内から少量の土器が出土した。

溝の北端部から北東2.5mの地点で、60cm×40cmの範囲が焼けた地床炉を検出した。中心の径20cm程は明赤黄色に焼け締まっている。谷部に設定したトレンチ（T5）の北東隅にあたる。炉の南東側には一辺が0.5mの方形土坑が存在する。他には関連遺構が存在しないのでこれらの性格については不明であるが、周辺から出土した土器から見て、古墳時代に属するものと考えられる。

ST14出土土器（図4.24-6・7） 土師器が2点ある。頸部から屈曲して外に開く口縁部をもつ甕(6)と把手(7)破片で、後者は甕あるいは甑のものと思われる。

ST15（図4.18） ST2の北西に隣接する。長さ3.8m、幅0.3mの溝で、北端は直角に折れ曲がる。南側はそのまま途中で消失している。平坦面も残らないので、本来の規模は不明である。溝の南端近くには外に広がる落ち込みと小穴が検出された。ST2との同時存在は考えにくい。溝から土器片が出土した。

ST15出土土器（図4.24-8） 土師器が1点ある。頸部から外方に開いた後、さらに屈曲してやや内傾する二重口縁の甕で、端部は丸くおさめる。屈曲部の外面は丸みを帯び、明確な稜線はもたない。頸部以下の内面を丁寧にヘラ削りし、外面には水平に近い斜め方向および縦のハケメ調整を施す。似た例がSH5から出土している。

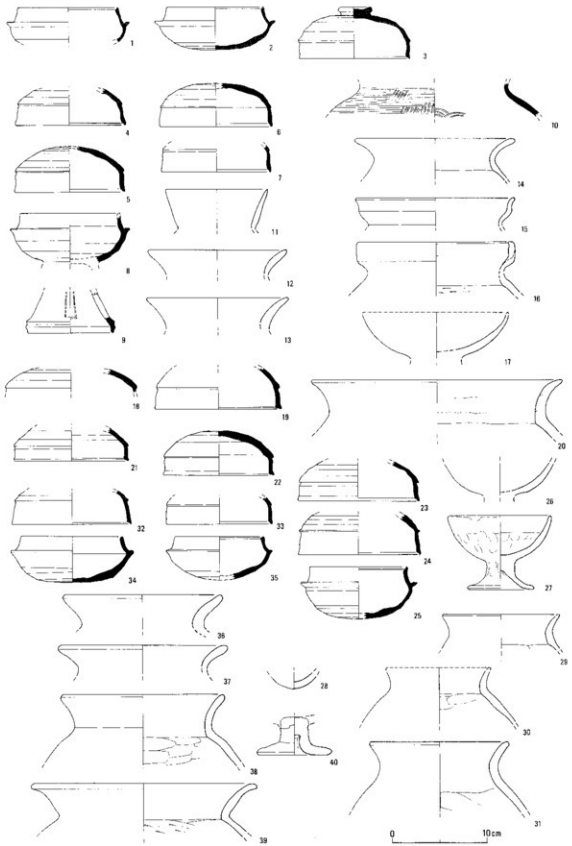


図４.23　各遺構出土古墳時代土器１（１：４）

（1-3：SH４、４-17：SH５、18：ST１、19・20：ST２、21・22：ST７、23-27：ST８、28-31：ST10、32-40：ST10）

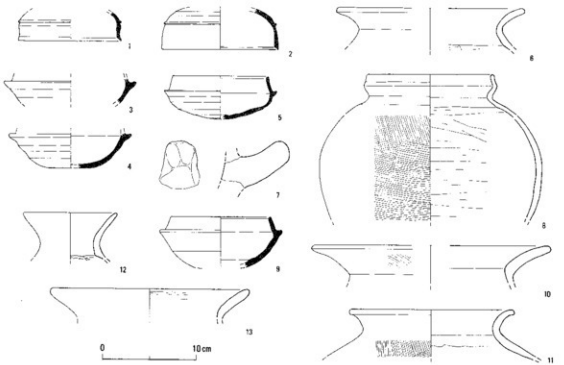


図4.24　各遺構出土古墳時代土器2（1：4）

（1-5：ST12、6・7：ST14、8：ST15、9・10：ST16、11：ST18、12・13：SX1）

ST16（図4.21）　ST1の南下方の谷底近くに位置する。他の段状遺構とは異なり、溝は中央付近で折れ曲がる。ST18とともに、南を向いた1画を区画するようにみえるが、同時存在ではない。溝の南側約4mは直線的に延びて消失することから、多くの段状遺構同様、西側に平坦面を造り出したものと考えられる。溝の東側で小土坑を、西側に柱穴3本を検出したが、組み合わせは不明である。土器が少量出土した。

ST16出土土器（図4.24-9・10）　須恵器坏身(9)は、溝の北東に位置する小土坑から出土したもので、ST16に伴うものではない。口径10.6cmで底部外面の半分程までをヘラ削りする。土師器甕(10)は水平に近く開いた口縁部破片で、溝から出土した。小片のため口径不明。

ST18（図4.21）　1辺の長さ約4m、幅0.6mをはかる、北西を区画した溝。平坦面、柱穴等の施設は検出されなかった。溝の西側中央に土坑状の窪みSX1が存在する。東側はST16溝と切り合うが、先後関係は不明。

ST18出土土器（図4.24-11）　溝から出土した土師器甕で、頸部から屈曲して外方に開く口縁をもつ。胴部外面はハケメ調整を加える。

ST19（図4.22）　谷の中央部、ST20の北東部に溝の一部を検出した。やや湾曲した形態から段状遺構の一部と判断した。検出したのは長さ1.8m、幅0.3m程で、さらに西側に延びていたと考えられるが、消失している。現存する西端からST20の中央部にかけて径2mの皿状落ち込みが存在する。

ST20（図4.22）　長さ4m、幅0.4mをはかる東西溝で、両端はやや開いて谷部南方に延びる。溝で囲まれた東側に、径0.5mの浅い土坑を検出した。平坦面は残存しない。

D　土　坑

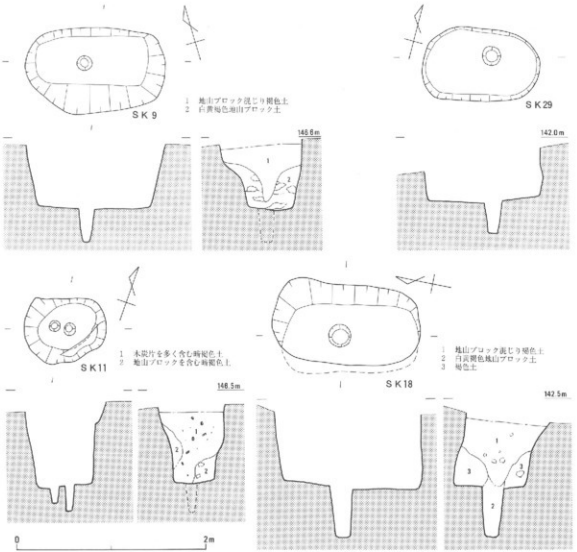


図4.25　土坑（落とし穴）実測図（1：40）

SX1（図4.21）　ST18の溝を掘り下げる過程で検出した、南北1.4m、東西1mの楕円形土坑。ST18により大部分を壊され、底面近くを残すだけとなっている。多くの段状遺構に付属してみられる皿状土坑と同類だが、土坑内から土器片が多く出土したので独立した遺構番号をつけた。

SX1出土土器（図4.24-12･13）　出土した土器片の多くは、土師器甕の胴部片である。実測できたのは土師器壺(12)と甕(13)の口縁部にすぎない。壺は口径9.8cm、器高10数cmと推定される小形品で、開いた口縁部をもつ。頸部下端以下の内面をヘラ削りして器壁を薄くする。甕は頸部から外に開いて端部を丸くおさめた通常の形態である。

4　その他の遺構・遺物

A　土　坑（図4.25）

ここで説明するのは、落とし穴状土坑（以下、「落とし穴」と呼ぶ。）である。遺物は出土していないが、弥生・古墳集落と重複あるいは近接して落とし穴が営まれることは通常考えにくいこと、そして他遺跡における類例から縄文時代のものと考えられる。

SK9　丘陵頂部のやや南の尾根筋に位置する。付近には弥生時代の貯蔵穴が存在する。上面は、長径

1.5m、短径0.9mの楕円形をなすが、壁の崩落によるもので、底面は長さ1.2m、幅0.5mの長方形を呈する。南を除く3方は、なお垂直に近い壁面をもつ。土坑長軸は、尾根筋に対し直交する。底面の中央には、径15cm内外、深さ35cmの小穴が1本存在した。

埋土の南北断面からは、まず両壁から崩壊した白黄褐色の地山ブロックからなる崩壊土の堆積があり、中央部が窪んだ形状を呈した後に比較的短期間内に埋まった状況が観察された。

SK11 SK9の東側に隣接する。上面は0.9m×0.7mの不整形をなし、底面も楕円形を呈する。底面中央には径10cmの小穴が2本存在する。土坑の埋没過程は基本的にSK9と同様で短期間に埋没したものとみられるが、上層には木炭片を多く含んでいることが注意された。森林火災によるものと思われる。

SK18 丘陵頂部から東に派生する尾根斜面に位置する。南北1.6m、東西0.85mをはかり、長軸を尾根筋に直交する。壁は垂直に近く立つが、底面は山側に掘り込まれた痕跡を示す。底面中央に径23cm、深さ50数cmの穴がある。

SK26 調査区南方の丘陵尾根筋に位置する。東西1.25m、南北0.8mの楕円形を呈し、長軸は尾根筋と直交する。平坦な底面の中央には径20cm、深さ35cmの小穴が1本存在する。

落とし穴遺構のうち、SK9・11は丘陵頂部に近い稜線に、SK29はそこから50m南の尾根筋、そしてSK18は丘陵頂部から東に派生する尾根の稜線に位置するという立地上の特徴をもつ。

もちろんこれらの落とし穴が同時に存在したという証拠はなく、常識的に考えればたいへん長い期間にわたって形成されたことが推定される。

津山市内では、この種の落とし穴が、過去の調査において弥生時代遺構に先行する事例があり、縄文時代に属すると判断される。いっぽう、当地方において断片的ながらも縄文時代の遺構・遺物が知られ

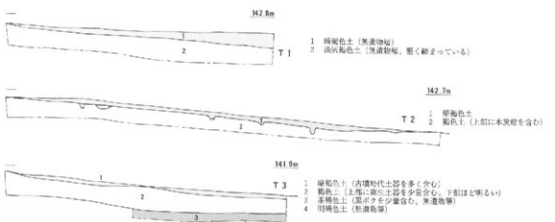


図4.26 谷部トレンチ東壁面実測図（1：80）

るのは早期と前期の一部および後・晩期に限られる。したがって、落とし穴の所属時期は、こうした人々の活動が認められる縄文早・前期ないしは後・晩期であろうという漠然とした想定しかできないのが現状である。

しかし、本遺跡の落とし穴のありかたは、この長期間をつうじて連続して営まれたと考えるにはあまりにも数が少ない。また、比較的短期間に埋没したとみられる土層状況からも、これらの落とし穴は縄文時代のある限定された期間内に営まれた可能性が高いと考えられる。

落とし穴の構造は、SK11が坑底に2本の杭跡をもつ他は共通する。すなわち、中央部に比較的太い1本の杭を立てた構造で、シカあるいはイノシシといった中型獣を狩猟対象としたことが容易に想定されるが、この罠猟の捕獲対象はそれにとどまらず、ウサギなどの小型獣をも射程に入れていたことを無視すべきではないと考える。

B　谷部出土の遺物

重機による表土除去後、丘陵西側の谷部から古墳時代土器や弥生土器などが出土することが判明した。そこでトレンチを設定して、堆積土層と遺物包含状況および遺構の有無を調査した。この過程で、先述したいくつかの遺構を発見したのに加え、遺物の包含が明らかとなったので、周辺の全域を無遺物層まで掘り下げた。弥生時代遺物については先述したので、ここではトレンチの所見に加えて古墳時代遺物について説明する。

トレンチ（図4．1・26）　谷筋に沿い、幅0.5mのトレンチを5本設定して調査した。谷の北端にあたるT1の設定箇所は狭い窪地状を呈する。地形図には表現されないが、T1南方のT2との間は小規模な分水界となっていて比較的平坦である。

T1の土層は上下2層に分かれ、上層には暗褐色土が堆積するが、いずれも無遺物層である。

T2も同様に2層に分かれる。上層の暗褐色土層からは若干の弥生土器と古墳時代土器が出土した。下層の褐色土は無遺物だが上部には木炭粒を含む。

T3は上面から1暗褐色土層、2褐色土層、3黒ボクを少量含む茶褐色土層、そして4明褐色土層と続く。このうち第1層には古墳時代の遺物を含み、第2層の上半には弥生土器を少量含む。第2層下半以下は無遺物層である。

T4の第1層はａｂｃに細分されるが、いずれも古墳時代遺物を含む。褐色土からなる第2層も3層に細分され、そのうちの上部2層には少量の弥生土器片を含む。２ｃ層以下は無遺物層である。

T5も基本的にはT4と同様の堆積状況を示す。このうち古墳時代遺物を包含するのは第1層だけで、第2層以下は無遺物層である。第1層下面で地床炉を検出し、ここが古墳時代の生活面であったことが判った。

須恵器（図4．27－1－26）　坏蓋（1－12）、坏身（13-20）、有蓋高坏（21）、𤭯（22・23）、甕（22）、壺（25・26）がある。

坏蓋は、口径が11.7㎝から12.9㎝をはかるA類（1－9）と、10.8㎝から11.5㎝までの小口径のB類（10-12）とに大別できる。これは口径の差だけではなく、口縁部の立ち上がりの寸法にも差がみられ、両者を形態的に区別することが容易である。前者の立ち上がり幅は2.1㎝から2.6㎝をはかるのに対し、後者は1.7㎝から1.9㎝の間に収まる。前者には天井部と口縁部の間の屈曲部が外方に突出するもの(6)も認められる。A類では天井部の半分から3分の2までを回転ヘラ削りし、B類は約半分ほどをヘラ削りしていて、これらの現象は時期差を示していると考えられる。ただし、両者とも屈曲部の段差は明瞭で、

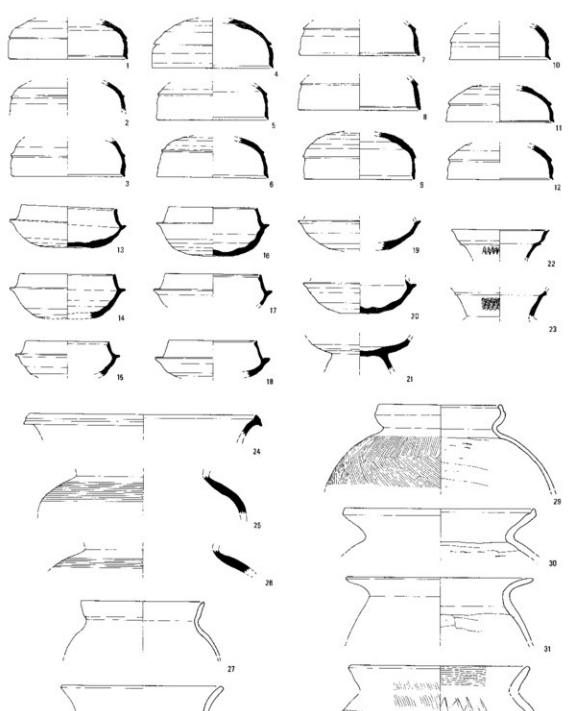


図4.27　谷部出土古墳時代土器(1：4)

(1・29：T2付近、2・3・10・13・17・18・22：T3付近、4・9・14-16・19・20・24・25・27・28・31：T4付近、5・6・12・21・32・34・36：T5付近、7・8・26：T5炉付近、11・23・30・33：T4第1層、37：T2第1層)

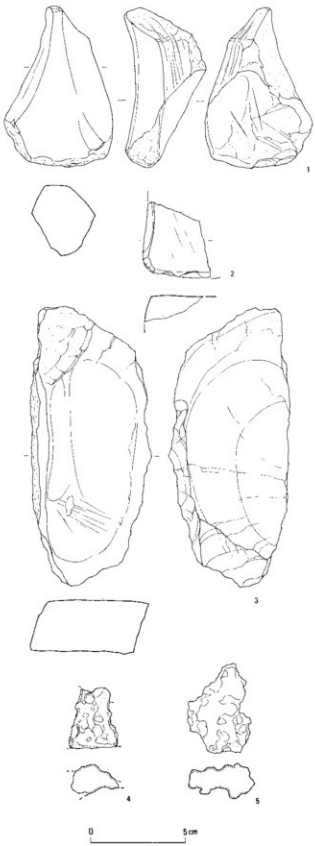


図4.28　石製品・鉄滓(1：2)
(1：ST2溝、2：SB2、3：ST7、4：T4付近、5：T5付近)

口縁端部に明瞭な段あるいは凹曲をもつことは共通する。

坏身も同様に、口径の大きなA類(13・14・16・20)とB類(15)に分けられる。

有蓋高坏は坏部から脚台の一部までの破片で全形は不明であるが、短脚である。

蓋は頸部の立ち上がりが短く、屈曲して立ち上がった口縁部も短く、古相を示す。頂部外面には波状文を施す。

甕は口縁端部の小片である。壺の肩部外面にはカキ目を施し、内面の同心円叩き目は丁寧になで消している。

土師器(図4.27-27-37)　甕(27-33)、高坏(34)、小形手づくね土器(35)、把手(36・37)がある。

甕は、頸部から屈曲して外方に開くA類(27・28・30-33)と、さらに屈曲して内傾して立ち上がる二重口縁のB類(29)とがある。A類はさらに口縁の開き方や端部のおさめ方によって細分されるが、いずれも小片のため全形は不明である。

高坏は、皿状の坏部から水平に近く開いた口縁部をもつもので、指先の整形痕や粘土帯の継ぎ目を留めた、やや雑なつくりである。

手づくね土器は、口縁端部を欠いているが、口径8cm、器高6.5cmをはかる。

把手は、甕ないしは甑のもので、棒状を呈し上方に屈曲する。

鉄　滓(図4.28-4・5)　2点の鉄滓が出土した。4は長さ3.2cm、幅2.6cm、厚さ1.5cmで発掘時に周囲を破損している。T4付近の包含層から出土。5は長さ4.7cm、幅3.4cm、厚さ1.9cmでT5周辺から出土した。いずれもガラス質の気泡に富むもので、一部に土を噛む。木炭痕は認められず、磁着反応はない。

5 考 察

A 弥生集落の範囲と構成

存続時期 有元遺跡の弥生集落を構成するのは、竪穴式住居２棟、段状遺構４基、袋状貯蔵穴24基で、これらの遺構群あるいは近辺から出土した土器は、ほとんどすべてが後期（Ⅴ期）に属するものである。SH３から出土した１点の甕形土器だけは、中期後葉（Ⅳ期）にさかのぼる可能性をもつが、他には類例は認められず、本集落がⅣ期に始まるとはなお断定できない。

むしろ、ほとんどの遺構がⅤ期に属することが注目される。とはいえ、Ⅴ期に属する資料自体も充分な量ではない。ここではわずかな点数ではあるが高坏形土器のもつ変異に注目して集落の所属時期を検討する。

図４.11-11の坏部上半は比較的平坦で、Ⅴ期初頭の様相をわずかに残すものである。これに対し13の坏部の形状は中葉のものに近づいてきているが、拡張部の坏部全体に占める比率はなお小さく、中葉のものに対して古相を示す。脚台部との連結も円盤充填法によることも古い様相である。これに対し、20の連結部は断面観察ができないものの、単純な円盤充填法とは異なり、やや新しい様相を示す。

以上の特徴を、周辺の土器編年にてらして所属時期を検討する。Ⅴ期を５型式に区分した津山市大田十二社の編年案（註１）では、１式よりは新しい様相をもつが、２式と完全に一致するわけではない。大田十二社２式の高坏には坏部と脚台部を別個につくり接合したものがあるが、円盤充填法によるものも併存するので、本遺跡例は１式と２式の中間段階あるいは２式の古段階に相当すると考えられる。

吉備南部の岡山市百間川遺跡群の編年案では後期Ⅱの古相に位置すると考えられている（註２）、百間川原尾島遺跡丸田調査区井戸16の資料（註３）に類似しつつも、やや先行する様相を示している。

また、高橋護氏の編年案（註４）ではⅤ-d期にほぼ相当すると考えられる。

以上のことから本集落出土の弥生土器については、Ⅴ期初頭の次の段階の意味でⅤ期前葉という位置づけをしておく。このようにみれば、SH３がⅣ期に属したとしてもⅤ期初頭を欠くので集落としては断絶したこととなる。ここでは、後期（Ⅴ期）前葉の比較的短期間営まれた集落遺跡として評価する。

集落の範囲と構成 本集落遺跡の立地上の特徴は、先に述べたように南北丘陵の東側に位置することで、遺構は主として斜面に立地する。平面的には南北60m、東西約30mの範囲を占める。高度別にみれば調査区のもっとも低い位置にある袋状貯蔵穴SK19は約142mに存在し、丘陵の最高所近くにあるSK12・SK13は148mに存在する。その差は６m程でさほど高低差のある立地とはいえない。

調査区の北側は急峻な斜面で、小規模な谷へと降りていて、この斜面から谷にかけて工事用の道路が敷設されたが、現地の観察では遺構遺物の存在は認められない。また、南側はより緩やかではあるものの、同様に谷へ下る。ここでも発掘調査用の仮設道を設けたが遺構等の存在は確認されなかった。したがって集落の南北そして西の範囲は調査区内に収まることは明らかである。調査区東側については、SH３の位置する斜面が緩やかな尾根状となり、工事地区外へ小丘陵となって張り出した地形を示していた。調査当初はSH３の位置までを調査区としていたが、遺構の存在が予想されたため工事予定範囲の境界付近まで調査区を東に拡張した経過がある。この拡張区では縄文時代とみられる落とし穴状遺構SK18と袋状貯蔵穴SK19を検出したのみで、住居等は発見されなかった。また、調査区中央から南半部にかけての東側は急な斜面で調査時点では遺跡の広がりは想定できない状況であった。

本集落を構成する諸施設のうち袋状貯蔵穴については、先にもふれたように南北の２群に分かれる。

そして、互いに遺構を切り合うことなく存在するので、なかには先後関係があったかも知れないが、少なくともこれらのいくつかは同時に存在した可能性が高い。北のグループは、SH２の周囲に一定の間隔をおいて取り巻くように存在するので、これらもまたSH２と併存したことが考えられる。このような遺構のあり方は、先にみた土器型式の示す集落存続時期の短さにも対応している。

SH２周辺に存在する10数基の貯蔵穴を、位置関係からみてSH２に対応するものととらえることも可能かも知れない。それでは、貯蔵穴の南のグループについてはどうであろうか。ここで注意されるのは、南北両グループ間に約20mの間、貯蔵穴の存在しない場所が存在することである。北と同様に考えれば、南のグループも斜面下方に存在したかも知れない未発見の住居に対応する可能性がある。ただし、この箇所に存在するST11やST６といった施設の存在を媒介にして両者が結びつくのも事実で、こうした様相は、集落における貯蔵穴のありかたとして注目される。

その他の遺構としては段状遺構がある。「段状遺構」が、少なくとも斜面を切り出して平坦面を造った施設という便宜的な概念であるため、個々の遺構の機能については個別の検討が必要となる。本遺跡の段状遺構のうちST４は火所をもつ作業場としての機能が考えられた。また、ST６には建物としてまとまらないが何本かの柱穴が存在し、掘立柱建物の一部であった可能性がある。このように考えてくれば、住居と作業場を含めた集落の規模はそう大きくはなかったと思われる。

調査区外の東斜面に集落範囲が拡大する可能性はあるが、地形からみてもその規模は検出された遺跡範囲を大きく超えるものではなかったと想定される。

有元遺跡の位置　本集落の東向き斜面の立地は、田邑から戸島を経て院庄にいたる流通センター用地の東側、戸島川流域の谷筋を強く意識していることを示す。この小集団の生産活動の拠点はこの谷か、さらに南下した平地に想定される。

B　古墳集落の性格

集落の時期と構成　各遺構間にはしばしば切り合い関係が認められ、いくつかのものは火災を受けていることは先述したとおりである。したがって、本集落においては一定期間の居住が考えられるのだが、これらの遺構は、丘陵の西半部の南北70m、東西30mの範囲内に収まり、集落の形態を大きく変えるものではなかった。むしろ、継続して営まれたといってよい。

出土した土器のうち土師器は、保存状態が悪く編年の検討に耐えられる資料は少ないので、主に須恵器の坏類から集落の所属時期を検討する。

谷部出土の須恵器坏類にはA・Bの２類の存在が認められた。この両者は遺構出土の資料にも存在する。ST７出土坏蓋（４.23-21･22）、ST10出土坏の一部（同33･35）がB類に属する。A類のうち図４.24-２および４.23-23のように天井部と口縁部のなす稜線が明瞭に突出するものは、A類のなかでもさらに古い特徴と考えられる。これを整理すれば、A類の一部-A類-B類という序列を想定できる。このうちB類については、津山市歓山６号墳第２埋葬主体（註７）、同オノ峪２号墳周溝内埋葬（註８）などに類例がある。本類は、陶邑編年のMT15型式に近い特徴をもつが、本地域における同型式併行期とされる坏の法量からは逸脱するので、前段階のTK47型式併行期の後半の段階を想定しておく。いっぽう、A類のうち古相を示すとしたものはTK23型式に併行する可能性もあるが、資料が少なく判然としない。したがって、本集落はTK47型式併行期にほぼ相当し、一部にやや先行する可能性を認めておく。これは従来の年代観（註９）に従えば、６世紀初頭に相当するが、近年の編年観からはやや遡る可能性が高い（註10）。ここでは５世紀末近くの20年間程度を本集落の存続期間と考える。

集落を構成する施設のうち、住居は合計5棟である。このうちSH１とSH５は本遺跡内では大形のもので、ほぼ同規模である。これらの住居を、遺構の切り合い関係の存在から仮に２等分した場合、同時存在の可能性の高い住居は、わずかに２～３棟となる。SH１とSH５以外の住居は小形で、明確な柱穴をもたないものも含む。したがって、SH１とSH５の２棟こそ、本集落を経営した主人公の住居というべきである。これらが同時に存在したかどうかは、特にSH１から良好な遺物が出土しなかったので、検討することが不可能だが、本遺跡は当時の最小の居住単位が生活した場とみられる。このように考えてくれば、調査区北端に位置する掘立柱建物SB１・２の規模と軒数は本遺跡の規模と内容を象徴的に示しているのかもしれない。

本遺跡を特徴付けるひとつは、多数の段状遺構の存在である。先にも説明したように、この施設は斜面を掘り込んで平坦面を造成し、山側に溝を巡らせたものである。発掘調査で検出できたのは、山側を巡る溝と、わずかな平坦面にすぎない。これらのなかにはいくつか柱穴を検出したものも存在するが、いずれも整然とした建物に復元することはできなかった。ST２などいくつかの遺構は火災を受けたことが確かで、この造成面上になんらかの上屋構造が存在したことは間違いない。また、これらの遺構のほとんどから須恵器や土師器といった日常土器が少量とはいえ出土していることも、機能を推定するうえで重要である。現状では、内容を特定できないものの何らかの作業場所として使用された施設と考えておく。同様の遺構は、津山市弧塚遺跡（註５）でも知られていて、中には鍛冶などの手工業の作業施設と考えられるものが存在するが、今後類例の増加をまって検討する必要がある。

鉄滓について　本古墳時代集落の営まれた時期は、当地方においては古墳への鉄滓供献が始まる時期に相当し、鉄器生産が広く開始されたことが知られている（註６）。発掘調査にあたっては鉄滓等製鉄関連遺物の有無に特に注意をはらった。その結果、３点の鉄滓を確認した。これらのうち１点はST２の溝内から出土し、他の２点も古墳時代集落の中心部といえる場所から同時代遺物とともに出土したので、わずかな資料ではあるが、これらが古墳時代集落に伴うものであることは確かである。

これらの鉄滓の金属学的分析は未了なので、分析結果を待つ必要があるが、ガラス質スラグで気泡に富む多孔質の形状は、類例からみて鍛冶滓である可能性が高いように思われる。集落の内外には鍛冶炉など製鉄関連遺構は発見されていないので、なぜ集落内に少量の鉄滓が持ち込まれたのかは不明であるが、集落の居住者が広義の鉄生産となんらかの関わりをもっていたと推定される。

註

1　中山俊紀他『大田上二社遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集 1981
2　下澤公明「第３節　弥生時代後期の土器」『百間川沢田遺跡２・百間川長谷遺跡２』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59 1985
3　正岡睦夫他『百間川原尾島遺跡２』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56 1984
4　高橋　護「弥生土器-山陽２-」『考古学ジャーナル』175 1980
5　河本　清『弧塚遺跡発掘調査報告』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第２集 1974
6　安川豊史「古墳時代における矢作の特質」『古備の考古学的研究』下山陽新聞社 1992
7　安川豊史『日上畝山古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第63集 1988
8　中山俊紀・湊　哲夫『オノ峪遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第18集 1985
9　田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981他
10　亀川修一氏の教示による。

V　男戸嶋遺跡の調査

1　遺跡の概要

男戸嶋遺跡は、最高所に位置する男戸嶋古墳から南に延びた丘陵に広がり、調査範囲は南北約270m、東西幅約90mに達する。この丘陵は独立したものだが、調査区北端から170m程南の20グリッドラインのあたりで、東西に谷が存在しややくびれた形状をもつ。そして、この東西ライン付近は遺構分布が希薄だったので、ここに調査用重機や作業員用の進入路を設定した。この進入路を境界にして北側をA地区、南側をB地区とした。

本遺跡は、弥生時代集落を主体とする遺跡である。このほかの遺構としては、縄文時代の落とし穴状遺構や、古墳時代住居址、奈良時代火葬墓、近世墓などが検出された。

弥生時代集落を構成する遺構の分布は、調査区の大半である南北230m、東西90mの範囲に及ぶ。種類は、竪穴住居址、掘立柱建物址、段状遺構、袋状貯蔵穴などである。住居址は、A地区ではH7区の丘陵頂部付近の尾根上に位置するSH2を最高所とし、主に尾根筋に沿って分布する。これらの間と周辺に段状遺構が配置される。袋状貯蔵穴は数基がSH2の周辺に位置するだけで、他には存在しない。丘陵北部から南西に派生する丘陵との間に形成されたC11区付近の谷部でもSH3およびSH6などの住居が検出され、集落の範囲が尾根筋にとどまらなかったことも知られる。これらの住居址は、北側からSH1・2・4・5からなる北群、SH7・10・9・8・11・12からなる中央群、SH13・14からなる南群、そしてSH3・6の西群に分けられるが、あまり明確ではない。このうち北群は小広場を取り囲むような配置をもち、その中央のH9区には柱穴群が検出された。建物を復元することはできなかったが、この場所に掘立柱建物が位置した可能性が高い。南群で1棟の掘立柱建物が確認された。本遺跡では最大のものである。D9区付近では柱穴列を検出したがこれも建物の一部であった可能性があり、西群に属するとみられる。SH3南方のC13区では、斜面堆積土中からサヌカイト剥片、石器、弥生土器などが出土し、土層断面で木炭粒を含む小土坑状の落ち込みを検出していて、この付近にも何らかの遺構が存在した可能性がある。

B地区では北端部に位置するSH18から、丘陵の西側斜面を取り巻くようにSH16・15が位置し、台地状の丘陵中央部に掘立柱建物が位置する。ただし、本地区はかつて畑として耕作されていた時期があり、丘陵上の削平が進んでいる。したがって、検出された以外にも住居が存在した可能性は高く、たとえばC23区では耕土除去中に木炭片と、加熱された石包丁が出土している。掘立柱建物はいずれも高床式倉庫の可能性が高いもので、SB1・2・3、SB4・5、そしてSB6の3群に分けられる。段状遺構は、南西斜面にST6・7が検出された。

以上の弥生集落からは若干の弥生土器が出土したが、小破片のものがほとんどで、出土量は少ない。また保存状態も良くないので、弥生集落の大部分が弥生中期後半に属することが判明したものの、一部は後期前葉に属することが知られる程度で、個々の詳細な所属時期を知ることは困難である。

縄文時代の落とし穴状遺構は、A地区北側の南西斜面に5基、B地区で1基が検出された。

古墳時代の遺構としては、A地区南西部の斜面で後期に属する住居址と段状遺構各1を検出した。調

査区外の斜面下方にさらに拡がるかどうかは不明だが、いずれにしても小規模な居住であったと考えられる。

奈良時代火葬墓を2基検出した。ひとつはA地区の南尾根上に位置するSG14で、弥生住居SH12内に重複する。もうひとつはB地区の南西斜面に位置するSG10である。

近世墓は、A地区の南西斜面、A17区に営まれた1群と、B地区のB28区に位置する1群に大別される。その他にも両地区にわたり少数の散発的な分布が認められる。

この他に、B地区南東からA地区南側にかけて断続する溝状遺構を検出した（SD3・5・8）。これは尾根の稜側に沿って営まれた古道で、近年まで存在したものである。

以上の遺構の他にも調査区一帯からは、土坑状の落ち込み等が検出されたが、出土遺物に乏しく性格の不明なものが多い。

遺構名	地区	種　類	時　期	備　考
SA1	D8	塀？	弥生	
SB1	D21	掘立柱建物	弥生	SB2と重複
SB2	D24	掘立柱建物	弥生	
SB3	D25	掘立柱建物	弥生	
SB4	D27	掘立柱建物	弥生	SB5と重複
SB5	D27	掘立柱建物	弥生	
SB6	B27	掘立柱建物	弥生	
SB7	G19	掘立柱建物	弥生	
SD1	B25	溝	不明	
SD2	C27	溝	不明	
SD3	E26	古道	現代	
SD4	E26	古道	現代	
SD5	E27	古道	現代	
SD6	D8	溝	不明	
SD7	D26	溝	弥生	SB4の付属施設
SD8	K19	溝	不明	
SG1	A17	近世墓	近世	
SG2	A17	近世墓	近世	
SG3	A17	近世墓	近世	
SG4	A17	近世墓	近世	
SG5	A17	近世墓	近世	
SG6	A17	近世墓	近世	
SG7	A17	近世墓	近世	
SG8	B28	近世墓	近世	
SG9	B28	近世墓	近世	
SG10	B28	火葬墓	奈良	
SG11	C26	近世墓？	近世？	
SG12	B13	近世墓？	近世？	
SG13	F13	近世墓？	近世？	
SG14	E16	火葬墓	奈良	SH12に重複
SG15	D16	近世墓	近世	
SH1	G7	住　居	弥生	
SH2	H8	住　居	弥生中・後期	
SH3	C11	住　居	弥生	火災
SH4	G10	住　居	弥生中期	
SH5	F10	住　居	弥生	火災
SH6	D10	住　居	弥生	
SH7	H13	住　居	弥生	火災
SH8	E11	住　居	弥生	中期
SH9	F13	住　居	弥生	中期
SH10	G14	住　居	弥生中期	火災
SH11	F15	住　居	弥生	

遺構名	地区	種　類	時　期	備　考
SH12	E16	住　居	弥生	
SH13	G18	住　居	弥生	
SH14	I18	住　居	弥生中期	
SH15	A27	住　居	弥生	
SH16	A23	住　居	弥生中期	
SH17	A17	住　居	古墳後期	
SH18	C21	住　居	弥生中期	
SK1	D6	落とし穴	縄文？	
SK2	D6	落とし穴	縄文？	
SK3	H8	貯蔵穴？	弥生	
SK4	G9	落とし穴？	縄文？	
SK5	F8	落とし穴	縄文？	
SK6	E7	落とし穴	縄文？	
SK7	H7	貯蔵穴	弥生	
SK8	F8	落とし穴	縄文？	
SK9	H8	貯蔵穴	弥生	
SK10	C25	土坑	不明	
SK11	C24	近世墓？	近世？	方形土壙
SK12	C23	皿状土坑	弥生中期	
SK13	C25	土坑	近世？	石臼
SK14	C25	土坑	不明	
SK15	C25	土坑	不明	
SK16	C26	土坑	近世？	
SK17	A24	土坑	不明	SK23を切る
SK18	A24	皿状土坑	弥生中期	
SK19	F29	土坑	不明	
SK20	D16	近世墓？	近世？	鉄釘
SK21	E29	土坑	不明	
SK22	C27	近世墓？	近世？	
SK23	A24	落とし穴	縄文？	SK17が切る
SK24	H8	貯蔵穴	弥生	
SK25	H8	貯蔵穴	弥生	
ST1	F6	段状遺構	弥生	
ST2	F7	段状遺構	弥生中期	ST3と連続
ST3	F8	段状遺構	弥生中期	
ST4	G11	段状遺構	弥生中期	ST5と重複
ST5	G12	段状遺構	弥生中期	
ST6	B28	段状遺構	弥生中期中葉	
ST7	A27	段状遺構	弥生	
ST10	B17	段状遺構	古墳後期	金環
ST11	G14	段状遺構	弥生	
ST12	A26	段状遺構	弥生	

表2　男戸崎遺跡遺構一覧表

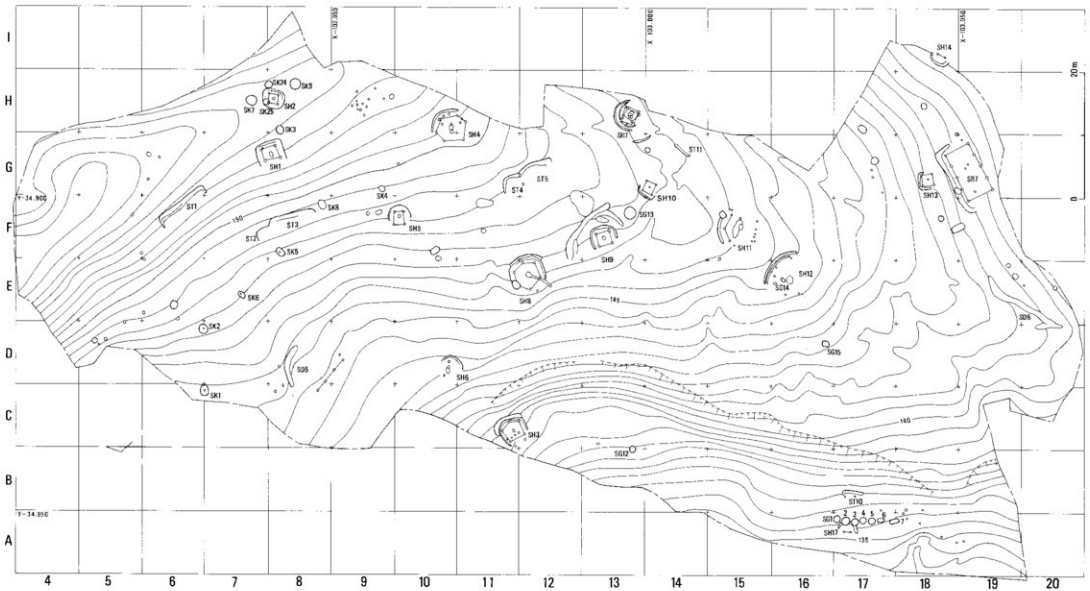


図５．１　男戸鳴遺跡Ａ地区全体図（１：600）

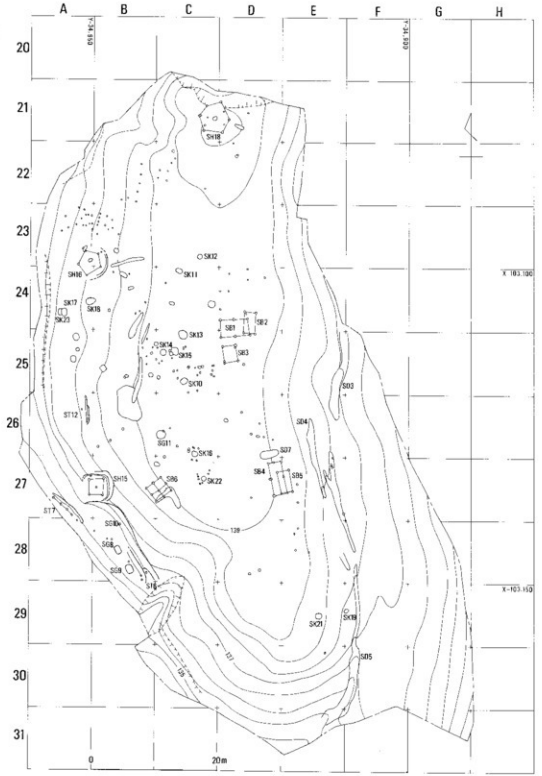


図５．２　男戸崎遺跡Ｂ地区全体図（１：600）

２　弥生時代

Ａ　住居址

Ａ地区でSH１からSH14までの14棟の住居を、Ｂ地区でSH15・16・18の３棟の住居を検出した。

SH１（図５．２）　Ａ地区の北方、丘陵頂部近くの西斜面に位置する１辺が4.7ｍをはかる隅丸方形住

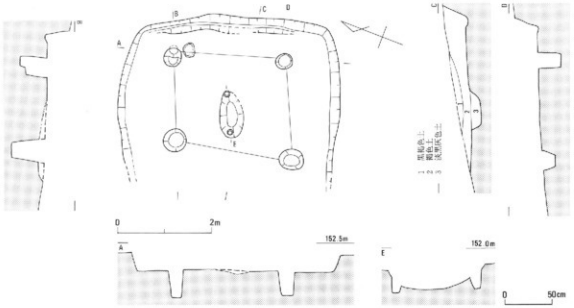


図５．３　SH１実測図（１：80）

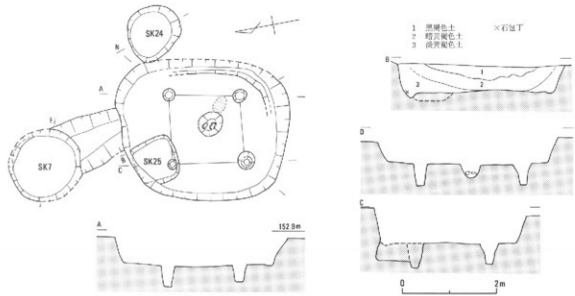


図５．４　SH２実測図（１：80）

居。西側の壁体と床面の一部を流失する。４本柱で、床面の中央に長径96㎝、幅50㎝、深さ25㎝をはかる長楕円形の中央穴をもつ。中央穴の両端には径10㎝、深さ20㎝ほどの小柱穴が穿たれている。中央穴内には淡黒灰色土が充満していた。埋土中からサヌカイト剥片が出土した。刃器として使用された可能性もある。

SH２（図５．４）　SH１の東の尾根上に位置する。南北3.7m、東西３mをはかる４本柱の隅丸方形住居址。中央に長径57㎝、深さ30㎝の中央穴があり、その南東床面に中央穴と接する焼土面が認められる。中央穴からは加熱痕をとどめる２個の角礫が出土した。住居の北東には袋状貯蔵穴SK24が、北方にはSK７が位置し、SK７とSH２の北壁との間には幅1.2mの浅い溝状落ち込みが存在する。住居床面の北東隅には、一辺が１m、深さ0.4mの貯蔵穴（SK25）が存在し、底面には炭化米の堆積が認められた。土層断面の観察では、SK25はSH２に先行すると判断された。SK24とSH２は壁を接して

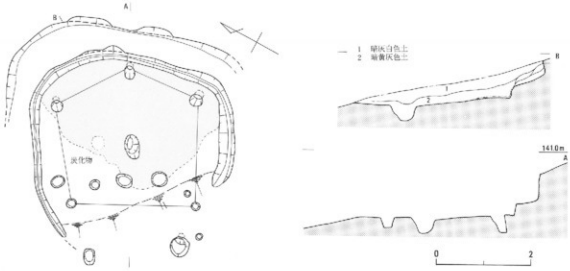


図５．５　SH３実測図（１：80）

いて、やはり同時存在を想定することは困難である。住居北西の壁際から石包丁が、住居埋土から弥生土器などが出土した。

SH２出土遺物（図６．１、６．５・６）　弥生土器には壺形土器底部（２）と甕形土器の口縁部（３）・底部（１）がある。２の内面はナデ仕上げで、３の頸部以下の内面にはヘラ状工具の痕跡が認められる。保存状態が悪く、詳細は不明だが、中期後半から後期前葉にかけてのものと考えられる。

石器には石包丁（31）、敲き石（40）、刃器（30）がある。刃器はサヌカイト製剝片を加工した後、刃部の一部を研磨したもので、屈曲した刃部をもつ。全体の形状は不明。石包丁は緑色片岩製の磨製品で、外湾刃、背部の直線的な形態である。敲き石は火成岩の棒状円礫をそのまま利用したもので、一端に敲打痕をとどめる。

SH３（図５．５）　丘陵西側の谷部、C11区に位置する直径4.3mをはかる不整円形住居。斜面側の一部を流失しているが、５本ないし６本柱であったと考えられる。山側の壁際には幅50㎝の段状施設が巡っている。床面中央には長径50㎝、深さ30㎝の楕円形を呈する中央穴が存在する。火災に遭い、床面には炭化物の堆積が広く認められた。

石鏃１点と石鏃未製品２点、サヌカイト砕片11点、ガラス小玉１点が出土した。

SH３出土遺物（図６．４、６．５）　石鏃（６．５－５）は突基式のもので、先端を欠損している。石鏃類はすべてサヌカイト製である。ガラス製小玉（６．４－１）は直径６㎜をはかる青色で、穴に対し直交して割れたものを、そのまま利用したらしい。厚さ３㎜を残すだけで、本来の高さは不明。端面は窪んでいる。

SH４（図５．６）　SH２の25m南方の緩斜面に位置する、６本柱で、直径6.5m程の円形住居である。壁体は北東の一部を残すだけで、床面もかなり流失している。床面の中央に径70㎝、深さ30㎝の中央穴が存在する。北東の柱穴脇には角礫が置かれていた。

弥生土器少量と石鏃１点、サヌカイト砕片35点、敲き石１点が出土した。

SH４出土遺物（図６．１、６．６）　壺形土器の底部（４）が１点ある。柱穴のひとつから出土したもので、外面はヘラ磨きし、内面はナデ仕上げする。中期後半に属する。

石鏃類はすべてサヌカイト製で、住居内でさかんに石器製作がおこなわれたことを示している。敲き

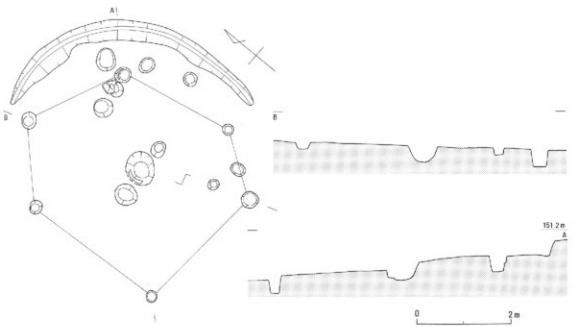


図５．６　SH４実測図（１：80）

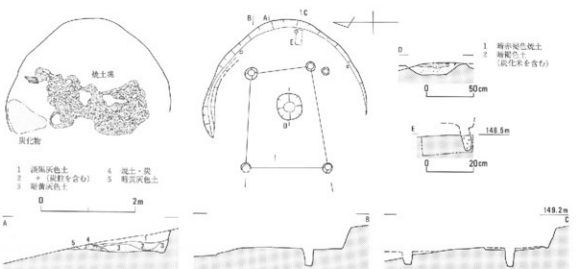


図５．７　SH５実測図（１：80）

石（39）は分岩製で、棒状の自然礫を利用したものである。両端に敲打痕が認められ、おそらくサヌカイト製品の製作に使用された剝離具と思われる。

SH５（図５．７）　SH４北西の西斜面に位置する、直径3.5m×４mの円形住居。４本柱で、西側を流失している。床面中央には径50cm、深さ15cmをはかる皿状の中央穴が存在する。

火災を受けていて、床面には炭化物の堆積が広く認められた。炭化物には上屋材に由来する炭化材のほか、炭化米が多量に含まれる。東側の壁際には直径４～５cmの杭痕が1.3m間隔で３箇所認められた。炭化米は中央穴やこれらの杭痕からも検出された。この炭化米には籾殻が残存しており、正確には炭化籾と呼ぶべきものである。炭化米の堆積は、壁際では厚さ20cm近くに及び、床面全体に遺存していたとすれば多量の稲籾が住居内に備蓄されていたこととなる。この稲籾は床面に放置されていたとは思えないので、上屋に備蓄用の施設があったことが想定される。

床面中央の、主柱で囲まれた範囲には焼土塊の堆積が認められた。これは上屋構造のどこか一部に粘土が用いられていたものが火災時に焼成を受けた結果であると考えられる。

SH 5 出土土器（図 6．1） 器種不明の口縁部小片（5）がある。上下に拡張した端面にはすくなくとも 2 条の凹線文を施す。後期前葉に属する可能性がある。

SH 6（図 5．8） SH 3 の北東の緩斜面に位置する。推定直径 3.7m程の円形住居で斜面側の北西部を流失している。

床面中央に直径45㎝、深さ20㎝の円形の中央穴が存在する。その西側に長さ85㎝、幅45㎝、深さ30㎝の長楕円形土坑を検出したが、性格は不明である。周囲に2本の柱穴があるが、柱の構成は明らかでない。

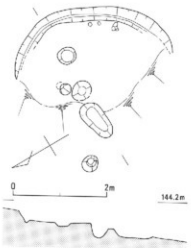


図 5．8 SH 6 実測図（1：80）

床面から碧玉製管玉が2片に割れ、離れて出土した。

SH 6 出土管玉（図 6．4－2） 淡緑灰色の碧玉製で、長さ 8 ㎜、幅1.7㎜の小形品である。約 4 分の 1 を欠き、片側穿孔である。

SH 7（図 5．9） SH 4 の南方、調査区の中央東端に位置する。4 本柱の円形住居で、3 回の拡張がおこなわれている。当初は直径 4 m、最終時には直径4.9mに達する。拡張に伴い、柱穴と中央穴はその都度造り替えられていて、その結果中央穴はやや複雑な形状となっている。

住居外方の南西部に、幅20㎝、深さ10㎝程の弧状の溝を検出した。住居を取り巻く外周溝の可能性が考えられる。

最終段階で火災を受けていて、北西床面に焼土塊の堆積が認められた。西側の柱間には補助柱とみられる柱穴が存在し、その脇に長さ25㎝、厚さ 8 ㎝の円礫を用いた台石が置かれていた。被熱して数片に

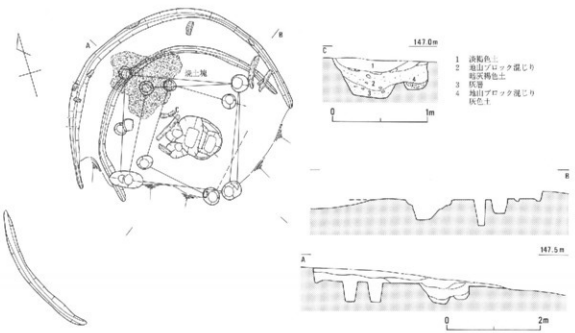


図 5．9 SH 7 実測図（1：80）

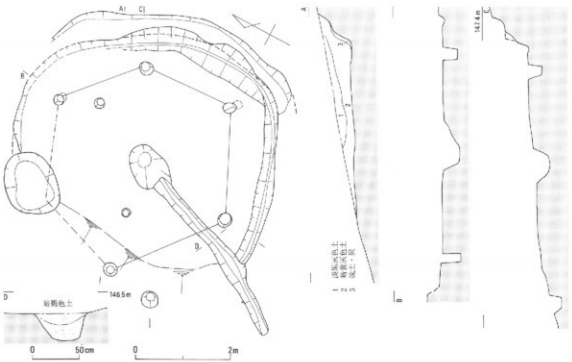


図５.10　SH８実測図（１：80）

割れていたが、上面には使用による磨滅痕を留めている。北西の壁際から砥石が、埋土中からはサヌカイト製石器と鉄鏃様の鉄製品が出土した。

SH７出土遺物（図６.４）　石製品としては、図示していないがサヌカイト製の不定形削器１点と砕片３点、砥石１点がある。削器は楔状の石核から剝離した剝片を利用したものである。砥石（７）は長さ21cm、幅9.3cmをはかる流紋岩製と思われるもので、断面形は６角形を呈する。一部に筋理面を留め、角礫状に打割した素材を用いたことを示している。

鉄製品（５）は、先端部を欠失するが、現長4.2cm、幅1.1cm、厚さ２mmをはかる。鉄鏃と考えられ、一部に植物繊維の付着が認められる。

SH８（図５.10）　A調査区のほぼ中央の斜面に位置する。直径5.6mをはかる不整円形住居で６本柱だが、北西の１穴はのちに穿たれた土坑によって残存しない。床面中央には長径90cm、深さ35cmの楕円形の中央穴があり、そこから南の住居外方へ排水溝が延びている。住居の山側には幅40cm程の段状施設が付属する。火災を受けていて、床面から壁面にかけて炭化物が堆積していたほか、壁面の一部が焼けている。

少量の土器と、石器が出土した。

SH８出土遺物（図６.１、６.５）　弥生土器には甕形土器(6)がある。口縁部の上端を拡張したもので中期後半期に属する。

石器には、石鏃（３）、「楔形石器」状石核１点、砕片３点がある。いずれもサヌカイト製だが、石鏃だけは風化面が黒味を帯びたやや異質な石材である。凹基式の特徴的な形態で、縄文時代に属すると考えられる。

SH９（図５.11）　SH８の南東の尾根付近に位置する。一辺が4.3mの隅丸方形住居で４本柱。床面中央に径45cm、深さ40cmの円形中央穴が存在する。中央穴の東側には長さ30cm、幅19cm、厚さ

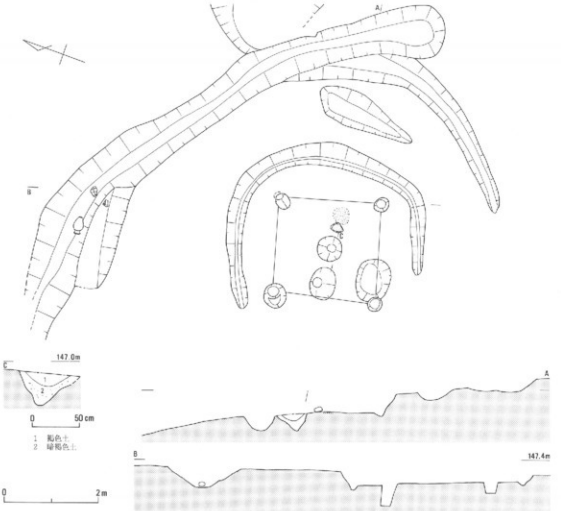


図５.11　SH９実測図（１：80）

10cmの河原石が置かれていた。西側と南西側で土坑を検出したが、攪乱坑と思われる。

住居外方の山側には外周溝が存在する。２本の溝が重なったもので、当初「コ」の字形に設置していたのを掘り直したもので、新しい溝の南東端は、閉じている。北西側の溝内から土器が出土した。

外周溝と住居壁体との間は、現状で1.2m程の平坦面となっていて、その一部に長さ2.2m、幅0.75mの溝状落ち込みを検出したが、遺構であるかどうか不明である。住居内からは石鏃などの石器が出土した。

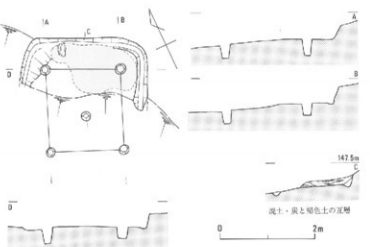


図５.12　SH10実測図（１：80）

SH９出土遺物（図６.１、６.５）　弥生土器は中期後葉に属するもので、壺形土器（７・８・10）と高坏形土器（９）がある。いずれも器肌荒れが激しく、文様などの詳細は不明な点が多い。７は頸部に施

された凹線文をがかろうじて判別できる程度で口縁部や胴部の施文の有無は判明しない。高坏は脚台部の破片で、脚端付近の外面に凹線文を施しているが、内面はヘラ削りせずナデ仕上げのみである。

石器には、石鏃（6）1点、不定形削器1点、石核1点、砕片3点が存在し、いずれもサヌカイト製である。石鏃は平基式の三角形に近い形状のものである。

SH10（図5.12） SH9の南東尾根上に位置する、一辺が2.7mの小形隅丸方形住居。山側の3分の1を残すだけで、南方の床面を流失する。4本柱で、床面中央には現状で径20cm、深さ6cmをはかる中央穴がかろうじて遺存する。

火災を受けていて、床面には建築材の炭化物が堆積していた。少量の土器と石器類が出土した。

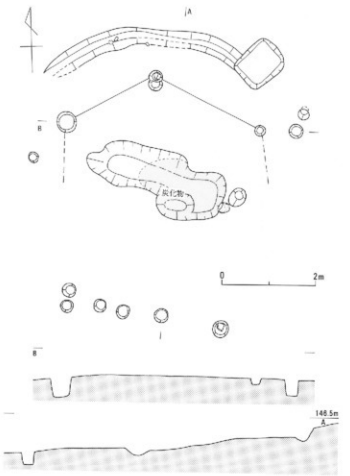


図5.13 SH11実測図（1：80）

SH10出土遺物（図6.1、6.4） 弥生土器には、脚台（11）と高坏脚台（12）がある。脚台は、台付き壺のもので、体部内面はハケメ調整を施す。12の外面には凹線文を施し、内面をヘラ削りする。中期後葉のものである。

石器には図示していないがサヌカイト製「楔形石器」様残核3点、砕片18点と砥石（6）がある。砥石は、硬質の流紋岩製で長さ7.6cm、幅3.3cm、厚さ2.2cmをはかる。中央に「V」字状の溝状研磨痕をとどめる。粒子の細かい仕上げ段階用のものである。

SH11（図5.13） SH10の南側の尾根に位置する。山側を除く床面と壁体の大部分を流失している。推定直径6mの円形住居で、6本以上の柱をもっていたと思われる。

中央に長径0.8m、短径0.6m、深さ15cmの中央穴が存在し、その北側は東西約3m、幅1m近い帯状の浅いくぼみになっている。中央穴からこのくぼみの中程まで炭化物および灰の分布が認められた。くぼみの深さは10cm程度で、東端の床面は熱を受けて小規模に赤変している。中央穴からこのくぼみを中心にして多量のサヌカイト砕片と石器の分布が認められた。北側の壁溝近くから扁平片刃石斧の未製品が出土した。壁溝の東端には方形の近世墓が位置する。

SH11出土石器（図6.5、6.6） 石鏃3点（7-9）、石錐2点（19･20）、扁平片刃石斧未製品（41）のほかに、図示していないがサヌカイト製「楔形石器」状残核3点、同砕片205点がある。石鏃のうち7・8は先端部の破片で製作中の破損品の可能性がある。9は完形品で凹基式。石鏃、石錐ともサヌカイト製である。扁平片刃石斧未製品は、緑色片岩製。

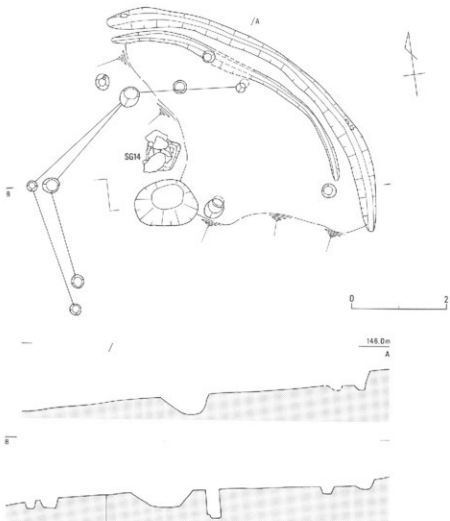


図５.14　SH12実測図（１：80）

SH12（図５.14）　SH11の南西に位置する。壁体と床面は北東部を残すだけで、流失している。精査したが、柱穴も一部は検出できなかった。推定直径が８ｍ程の大形円形住居で、柱数は７～８本であったと思われる。１回の拡張が認められ、２条の壁溝を検出した。規模はあまり変更がなく、補修あるいは造り替えの意味の方が強いのかもしれない。床面中央に径1.3m、深さ40㎝の中央穴が存在する。

壁際から扁平片刃石斧と太形蛤刃石斧が、中央穴の内外からサヌカイト製の石器や砕片が多く出土した。

中央穴の北側には奈良時代の火葬墓SG14が存在する。

SH12出土石器（図６.５、６.６）　石包丁１点（34）、扁平片刃石斧１点（42）、石槌１点（43）、石鏃４点（10-13）、石錐１点（21）、石包丁１点（35）、そして図示しなかったが、サヌカイト製の「楔形石器」状残核４点、不定形削器２、砕片74点がある。

石包丁は、結晶片岩製の磨製品である。背部および一端を破損しているのではっきりしないが、紐通し穴が１穴だった可能性がある。扁平片刃石斧は緑色片岩製。石槌は緑色砂質の火成岩製で、太形蛤刃石斧を転用したものである。石鏃の形態は突基式（10）、凹基式（11）、平基式（12･13）と様々である。このうち11-13は中央穴から出土した。21の基部は、両面加工の尖頭器状加工を施したものだが、先端部の両側縁は摩滅していて、石錐として利用したことを示している。

SH13（図５.15）　Ａ地区南東の南斜面に位置する、一辺が2.8ｍの隅丸方形住居で、南側床面を大きく流失している。４本柱で、柱穴はいずれも壁面に近接し、やや傾斜をもって掘り込まれている。中央部に径25㎝の中央穴が存在する。本来の深さは25㎝程度である。

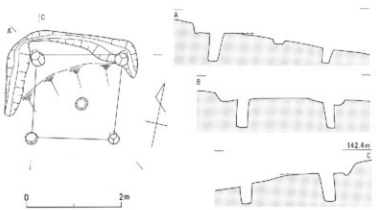


図５.15　SH13実測図（１：80）

SH14（図５.16）　Ａ地区南東隅に位置する。工事用進入路によって存在が確認されたものの。山側半分が遺存する。直径3.2ｍの隅丸方形住居で、床面中央に２本の柱穴を検出した。この柱列の北側に焼土面が認められたが、中央穴の存在は明らかでない。

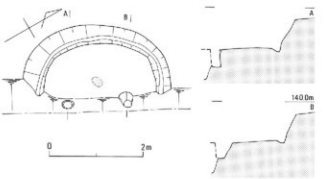


図５.16　SH14実測図（１：80）

SH14出土土器（図６.１）　壺形土器の底部（13）がある。器肌荒れのため詳細は不明だが中期後半のものと思われる。

SH15（図５.17）　Ｂ地区中央の南寄り西斜面、Ｂ27区に位置する。斜面下方に弥生時代の段状遺構ＳＴ７が存在する。本住居造営の際に排出された土層の堆積が、ＳＴ７堆積土上に認められたので、ＳＴ７に後行することが判明した。一辺4.2ｍの隅丸方形住居で、４本柱である。南西の一部を流失している。床面中央に、長径45㎝、深さ25㎝をはかる楕円形の中央穴をもつ。山側には幅50㎝の段状施設を巡らせる。火災を受けていて、床面から炭化物が検出された。

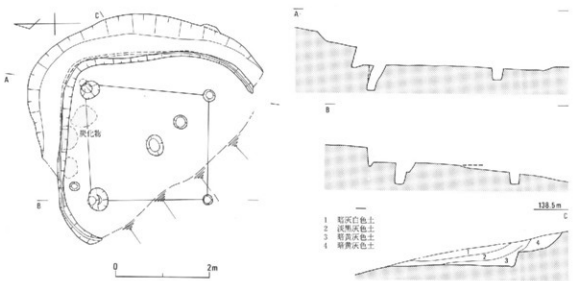


図５.17　SH15実測図（１：80）

SH16（図５.18）　B地区の北西斜面に位置する。床面および壁体の西側を大きく流失している。５本柱で、直径5.5m程度の円形住居であったと考えられる。床面中央に径50cm、深さ45cmの中央穴が存在する。通常の中央穴と異なり、山側をやや抉り込むように掘削している。反対側には浅いくぼみがみられる。少量の土器とサヌカイト製石器類が出土した。

SH16出土遺物（図６.１、６.５）　弥生土器には斑形土器の底部（15）と甕形土器の底部（16）がある。15は中央穴から出土したもので、内面はナデ仕上げする。16は底面が外に拡がった特徴的な形態をもつ。いずれも中期後半期に属する。

石器（22）はサヌカイト製の打製品である。断面三角形の分厚い剝片を利用し縁辺部に二次加工を施し、一端を細く仕上げる。側縁部には摩滅などの使用痕は認められないが、形状から石錐と分類しておく。中央穴から出土した。

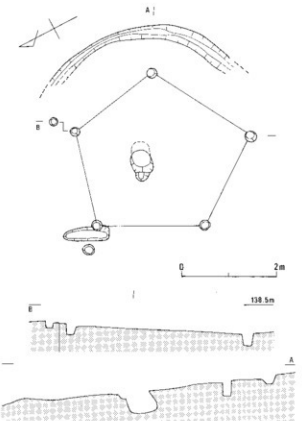


図５.18　SH16実測図（１：80）

SH18（図５.19）　B地区の北端に位置する。畑地の造成の際に大きく削平されていて、壁体および壁溝は全く遺存しない。

本来は直径６m前後の円形住居であったと思われる。６本柱で、１回の建て替えが認められる。住居の中央に径60cm、深さ35cmの中央穴が存在するが、建て替えに伴って造り替えられた様子をとどめている。住居の東外方には幅35cm、深さ10cm程の溝を検出した。溝底は、中央穴に向かってゆるやかに上昇している。反対側は段をなしてさらに東に続いていたようである。中央穴から外に延びた排水溝の一部が遺存したものと考えられる。サヌカイト製の砕片12点と石片が出土した。

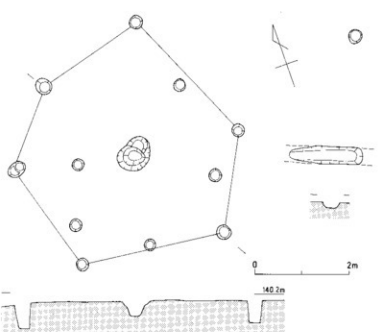


図5.19　SH18実測図（１：80）

B　建物址

A地区で２棟、B地区で６棟、合計8棟の掘立柱建物を検出した。A地区の１棟は個柱列のみの検出で、これにはSAの遺構番号を付けている。

SB１（図５.20）　B地区のD24区からD25区にかけて存在する、３棟からなる建物群のうちのひとつ、１間（2.8m）×２間（4.4m）の東西建物。東側に南北棟SB２が重複するが、前後関係は不明である。柱穴の直径は30～48cmで、建て替え等の痕跡は認められない。北側中央柱穴の西側には礫が詰められていたが、柱の補強用とみられる。この礫とともに不明鉄製品の小片と石核が出土したが、鉄器は図示できるものではない。

SB１出土石器（図６.５-23）　ペグマタイト状の石英角礫を使用した石核で、長さ2.9cm、幅2.3cm、厚さ1.9cmをはかる。節理面を打面とし、幅広の小剝片を剝離している。打面には敲打痕をとどめる。

SB２（図５.20）　１間（1.8m）×１間（3.4m）の南北建物。西側の２柱穴は掘り直されていて、補修のあったことを示している。北西の柱穴には、柱の抜き取り後に礫が埋められている。

SB３（図５.20）　SB１の南に位置する１間（２m）×１間（2.6m）の南北建物。北東と南西柱穴は掘り直している。南東以外の柱穴は、柱を抜き取った後に礫を埋めている。

本建物の東側柱列が、SB１東側柱列の方向に一致していることから、両建物が同時に存在した可能性が高いと考えられる。

SB４（図５.21）　B地区、D27･E27区に位置する１間（2.2m）×２間（5.1m）の南北建物。

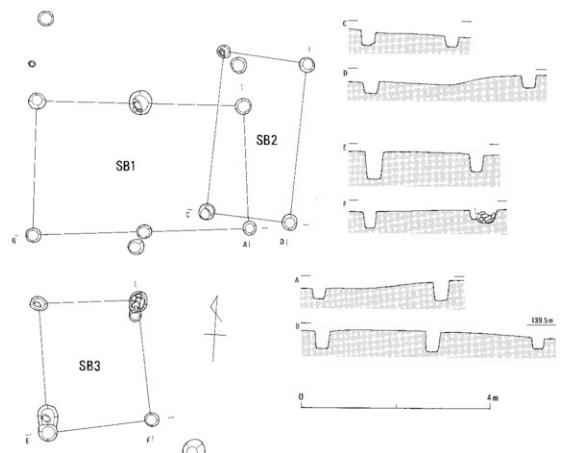


図５.20　SB１・２・３実測図（１：80）

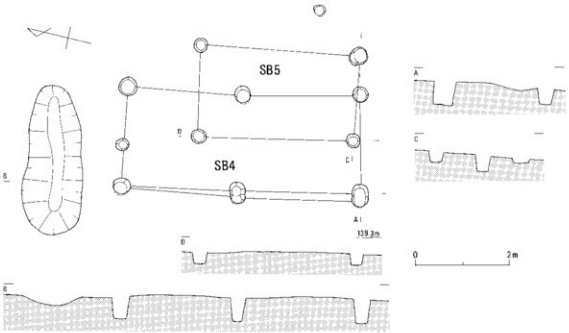


図5.21　SB4・5実測図(1：80)

南東の2柱穴には掘り直された補修痕が認められる。

北側に幅1.3m、深さ20cmの東西溝SD7が付属する。溝の両端は閉じている。

SB5（図5.21）　SB4の東側に重複して存在する1間（1.8m）×1間（3.3m）の南北建物。建物南辺をSB4の南辺と一致させている。両者の前後関係は不明である。

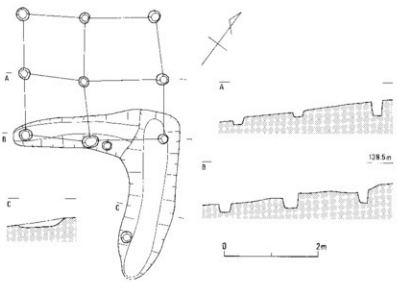


図5.22　SB6実測図(1：80)

以上の2群の建物址群で注意されるのは、それぞれのグループに1間×2間と1間×1間という、規模の異なる建物の重複関係が認められることである。集落内の同じ地点で同種類の施設の建て替えが認められる場合、これらの施設は同じ機能をもっていた可能性が高いと考えられる。この場合、小形建物の床面規模からみて、これらの建物は高床式倉庫であったと思われる。

SB6（図5.22）　B地区、B27・C27区に位置する2間（2.6m）×2間（2.8m）の方形建物。中央に床束柱穴が存在するが、側柱穴にくらべるとやや浅い。1柱穴から石鏃1点が出土した。

建物の南側柱列に沿った東西溝と、その東端から南方に直角に延びる溝（SD2）が検出された。SB6に付属する施設の可能性がある。

SB6出土石鏃（図6.5-14）　サヌカイト製の凹基式石鏃である。長さ2cm、幅1.6cm。

SB7（図5.23）　A地区の南東斜面、G19区に位置する東西建物で、建物長軸は等高線と平行する。

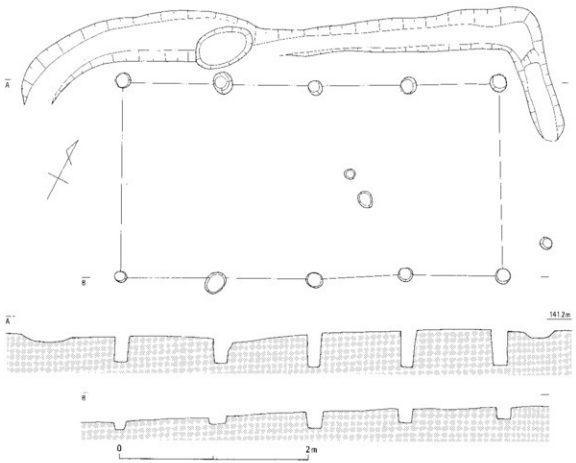


図5.23　SB7実測図(1：80)

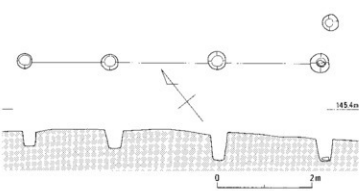


図5.24　SA1実測図(1：80)

南北1間(4.12m)×東西4間(8m)で、本遺跡最大の掘立柱建物である。

山腹に幅0.8mの溝を掘り、平坦面を造成したものだが、かなり流失していて、南西柱穴は深さ20cmを残すだけとなっていた。溝の中央西寄りには長径1.3m、深さ20cmをはかる性格不明の土坑があり、溝の北側上端はその付近でわずかに屈曲している。遺構検出当初、この屈曲部を2つの段状遺構が重複するものと理解してST8・9という遺構番号を付けた。その後、この段状遺構はSB7の一部であることが判明したので、これらの遺構番号は欠番とした。

妻柱穴あるいは棟持ち柱穴等は検出されなかった。溝等から弥生土器小片が出土したが図示できるものはない。

SA1（図5.24）　A地区のD8区緩斜面に位置する、等高線に沿った3間（2.8m）の柱列で、南東端の柱穴には片岩の礫を用いた礎石が据えられていた。3間×1間の建物の一部と考えられる。柱列の斜面下方を中心に周囲を精査したが、対応する柱列は検出されなかった。現存する柱穴の深さからみて谷側の柱列は流失したものと思われる。

C　段状遺構

A地区で6基、B地区で3基、合計9基の弥生時代段状遺構を検出した。A地区ではこれらの他に段状遺構の一部である可能性のある溝を検出していて、これを加えれば全体で10基となる。

ST 1（図5.25）　A地区北側の南西斜面F6区に位置する。等高線に沿った長さ8.8m、幅0.8mの平坦面が遺存する。山側には幅30cm程の溝を巡らせ、現存する壁面の高さは60cm程度である。溝は中央付近から北側にかけて壁面から離れる。あるいは補修によって付け替えられたものかも知れない。精査したが柱穴等の施設は検出されなかった。弥生土器の細片が出土した。

ST 2・3（図5.25）　ST 1南方の西斜面に位置する遺構で、長さ10m、幅2mの平坦面が遺存する。山側壁面は、北寄りの位置でいったん南方に屈曲してさらに北側に3m程延びて終わる。ふたつの段状遺構が重複したものと考えられ、北側をST 2、南側をST 3とした。ST 3の壁際には幅50cmの溝があり、弥生土器片や自然礫が出土した。中央部の床面にも長さ30cmの河原石が置かれていた。

平面図には表現されていないが、ST 2の壁際にも幅40cm程の溝が存在し、中央の断面図付近までは延びていた。ST 3に遺物が比較的多く残されていることからみて、ST 3は先に存在したST 2を造り替えてたものであると推定される。精査したが、柱穴は検出されなかった。

ST 2・3出土土器（図6.1）　壺形土器と甕形土器の底部が4点ある。ほとんどがST 3から出土した。いずれも器肌荒れが激しく判然としないが、内面調整はヘラ削りするもの（18）とナデ仕上げのものが混在する。弥生中期後葉に属する。

ST 4・5（図5.25）　ST 2・3の30m南の尾根近くに位置する。北側のST 4と南側のST 5は重複しているが前後関係は不明である。現存するST 4は、長さ3.6m、幅1mの平坦面と、山側を巡る幅40cm程の溝からなり、溝は中央で大きく湾曲する。溝近くの平坦面から弥生土器片が出土した。

ST 5は長さ4.6m、幅1.4mの平坦面と南北に延びた幅50cmの溝からなり、溝の南端は西側に屈曲して終わる。両段状遺構の中央部に2箇所の小ピットを検出したが、皿状のくぼみで柱穴ではない。これらとは別に、両者の溝が重なる部分に1本の柱穴を検出した。

ST 4出土土器（図6.1-21）　器台形土器と思われる脚台部破片がある。外面には細かい凹線文を施す。中期後葉。

ST 5出土土器（図6.1-22）　器台形土器あるいは壺など台付土器の脚台部破片がある。外面の下端部に3条の凹線文を施している。これは埋土中から出土したもので中期後葉。

ST 6（図5.25）　B地区の南西斜面B28区に位置する。北側に長さ2.3m、幅0.7mの平坦面を残すだけで、南側は流失している。山側には20cmの高さの壁体を認めるが、溝は存在しない。斜面側には幅0.7mの溝状遺構が一部存在する。これも段状遺構であった可能性があるが、明確ではない。付近から数本の柱穴を検出したが、浅いものが多い。

埋土中から弥生土器が出土した。

ST 6出土土器（図6.1-23）　壺形土器の口縁部破片で、水平に近くひらいた口縁端部は肥厚させるが破損していて装飾等は明らかでない。頸部には棒状器具によるヘラ描き沈線文を施す。所属時期は中期ないし後期と判然としない。

ST 7（図5.26）　B地区の中央西側、A27区の南西斜面に存在する。等高線に平行して、長さ6.8m、幅0.5mの溝が延びている。溝の南東端は斜面下方に向かって曲がり、北西はそのままで終わっている。溝に沿って5本からなる1列の柱穴が検出された。南端の1穴は他に比べると浅く、ひとまわり

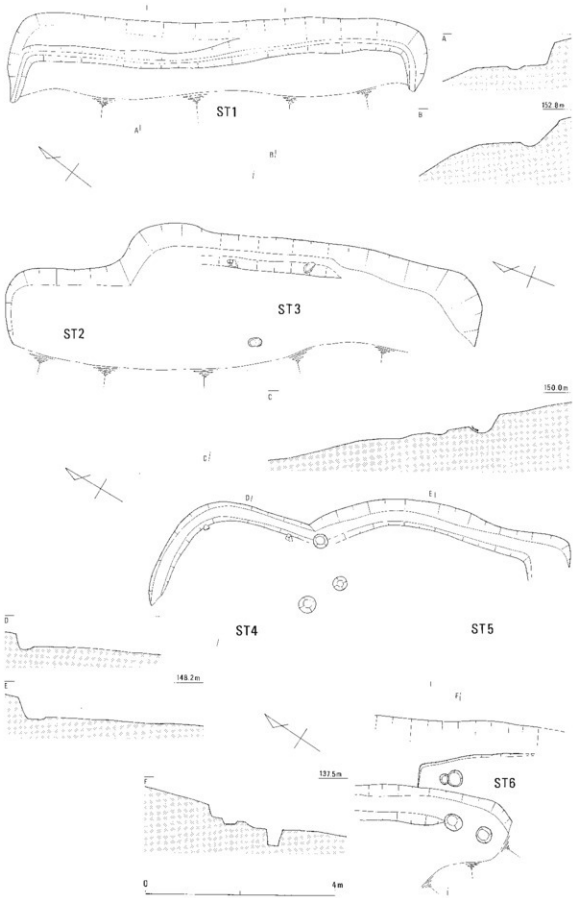


図5.25 ST1・2・3・4・5・6実測図(1：80)

小さく柱穴ではない可能性もある。平坦面は流失して存在しない。溝には暗褐色土が堆積していたが、その上には赤褐色土層の堆積が認められた。この土層は、本段状遺構の斜面上方にあるSH15の基盤層にあたるもので、SH15の掘削と造成にあたって埋め立てられたものである。したがって両遺構は、ST７からSH15の順番に形成されたものである。

ST７の南からST６にかけては長さ30mにわたってくぼんだ段状地形をなしていた。調査時には何らかの遺構の可能性があるとしてSX２と名付けたが、その後の土層立ち割りで基盤の地滑りによって形成された地形であることが判明した。ST６や奈良時代火葬墓SG10、近世墓SG８・９などはこうした地形を利用して形成されたものである。この部分の基盤上に堆積した褐色土層中から若干の弥生土器が出土している。

ST11（図５.26） A地区の東中央尾根筋、G14区に位置する。北東から南西方向に延びた長さ2.8m、幅40cmの溝の一端は斜面下方に曲がり、もう一方は流失している。平坦面は残存しない。全体の規模は不明で、住居址の一部であった可能性もあるが、溝底幅が広いのでここでは段状遺構に分類しておく。２本の柱穴を検出した。

ST12（図５.26） B地区の中央部西斜面、A26区に位置する。等高線に平行した長さ4.3m、幅20cmから60cmの溝が存在する。溝は途中で幅が変化し、この段状遺構が改変を受けたものであることを示している。溝の両端は斜面側に湾曲して終わり、平坦面は流失している。中央部に深さ50cm弱の１柱穴を検出しただけで、他には柱穴は検出されなかった。

SD６（図５.26） A地区北方の緩斜面、SA１の北側のD８区で、長さ6.5m、幅１mの溝を検出した。

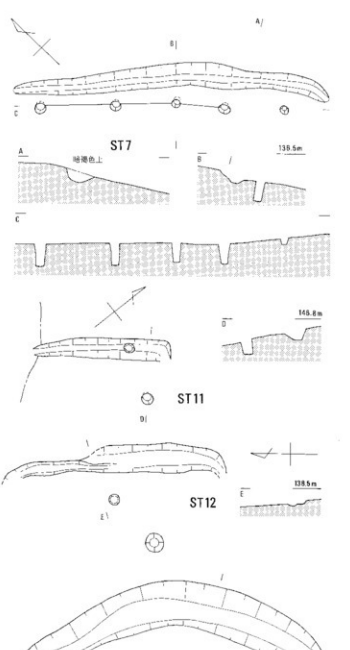


図５.26 ST７・11・12・SD６実測図（１：80）

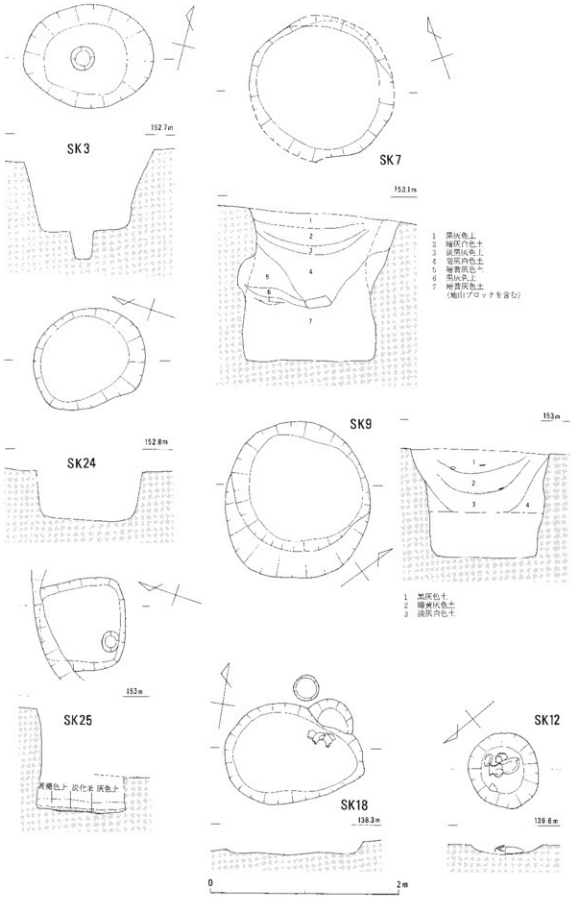


図５.27　袋状貯蔵穴等実測図(１：40)

溝は途中で湾曲した弧状を呈している。平坦面は遺存しないが、段状遺構の一部と考えられる。

D　袋状貯蔵穴

弥生時代の貯蔵穴は、A地区の最高所に近い尾根上、H7・8区に集中して位置する。これらは壁面のせり出しが顕著でなく、正確には袋状を呈さないものが多いが、壁面の崩落による変形の可能性がなお残されるので、ここでは袋状貯蔵穴と呼称しておく。弥生時代の他の土坑についても本項で説明する。

SK 3（図5.27）　SH1の東側に位置する長径1.4m、深さ0.9mの楕円形土坑で、底面は径0.9mの不整円形を呈する。底面中央に径25cm、深さ30cmの柱穴をもつ。落とし穴状遺構に類似するが、柱穴が杭を埋置したものにしては大きすぎることと埋土の状況から貯蔵穴の可能性が高いと判断した。

SK 7（図5.27）　SH2の北側に位置する。発掘時は直径1.5mの円形土坑であったが、後に東西の壁が崩落した。本遺跡では袋状を呈する唯一の例である。深さ1.6m、底径1.4mをはかり、底面は平担で溝等の施設は認められない。廃絶後の堆積途中に台石と思われる川原石が投棄された状態で出土した。

SK 9（図5.27）　SH2の南東側に位置する。直径1.5mの円形土坑で、壁面は垂直に近い。深さ1.2m、底径1.1mをはかる。坑内の堆積土中から弥生土器の小片が出土した。

SK24（図5.27）　SH2の東側に隣接する。検出面での直径1.2mの円形土坑で、壁面は垂直に近い。底径1m、深さ0.6m。

SK25（図5.27）　1辺が約1mの隅丸方形土坑。SH2の北壁と壁体を共有していて、SH2の床面からの深さ38cm、SH2北壁上端からの深さは1.1mをはかる。平坦な底面には部分的に1cm程の厚さの灰色土が堆積している。灰色土の上には全面にわたり、厚さ3～4cmの炭化米の堆積が認められた。炭化米層の上には基盤土混じりの黄褐色土が堆積していた。

調査当初はSH2の付属施設としてとらえたが、土層断面の観察でSH2の床面の続きらしい面が存在したこと、炭化米の出土にも関わらず火災を受けた痕跡が住居には観察されなかったこと、そして土坑底面の南隅で検出した柱穴が底面からわずか13cmの深さしかないことなどの理由から、本土坑はSH2に先行すると判断した。

以上の貯蔵穴以外に、弥生時代の土坑が2基存在する。いずれも皿状の浅いもので、少量の弥生土器が出土したが性格は不明である。

SK12（図5.27）　B地区の北方丘陵上、C23区に位置する直径0.8m、深さ10cmの円形の皿状土坑で、壁は緩やかに立つ。内部から弥生土器と川原石が出土した。住居等の付属施設の可能性もあるが、性格は不明。

SK12出土土器（図6.1）　壺形土器口縁部（24）と甕形土器の底部（25）がある。壺の口縁端部には凹線文を施すが、器肌荒れが激しく調整等は不明。弥生中期に属する。

SK18（図5.27）　SK12の西方斜面に位置する、長軸が1.5m、深さ10cm程の皿状窪みで不整円形を呈する。堆積土には炭化物を含み、弥生土器が出土した。遺構の性格は不明である。

SK18出土土器（図6.1）　甕形土器（27・28）と壺形土器（26）がある。28の甕口縁部は、器壁の剝落と摩滅が著しいが、口縁端部を拡張して凹線文を施していたものと思われる。27・28の内面はナデ仕上げである。26の平底は丸みを帯び、一見新相を示すように見えるが、使用に伴う摩滅によるものである。

3　その他の遺構・遺物

A　住居址

古墳時代後期に属する住居址1棟をA地区南西部の斜面下方で検出した。これは、SG1からSG7までの近世墓群を調査中に発見したものである。次に説明する同時期の段状遺構ST10とともに本地区において古墳時代後期に小規模な居住があったことを示すものである。

SH17（図5.28）　A17区に位置し、東側を近世墓SG2・3によって切られている。調査当初は、I18区に所在するSH14と同様の弥生時代に属する小形住居と考えていたが、須恵器等の遺物が出土してはじめて古墳時代に属することを確認した。

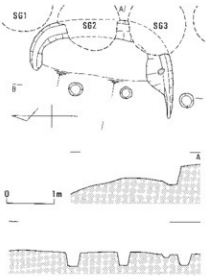


図5.28　SH17実測図（1：80）

南北3.1mの隅丸方形住居。壁際にはやや幅広の壁溝が巡る。床面の西半分以上は流失している。中央の南北に2本の柱穴を検出した。南側壁溝から加熱礫をとどめた自然礫が出土したほか、土器と鉄滓が出土した。

SH17出土遺物（図6.＊-76）　須恵器坏蓋と土師器があるが、後者は図示できない小片である。坏蓋は口径13.3cmをはかり、肩部に明瞭な段は認められない。鉄滓は、金属学的な分析を行っていないが、製錬滓とみられるもので数個床面から出土した。

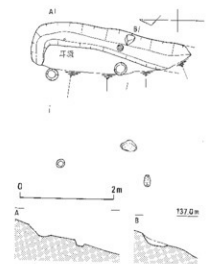


図5.29　ST10実測図（1：80）

B　段状遺構

ST10（図5.29）　SH17東側の斜面、B17区に位置する。長さ3.4m、幅0.5mの溝が等高線に平行して存在し、北端は直角に西に曲がり、南端はそのまま消失する。平坦面も一部を残すだけで流失し、全体の規模は不明である。2本の浅い柱穴を検出したが、本遺構に伴うものとは思われない。溝底から、耳環1個と銅立した須恵器高坏1点が出土した。

ST10出土遺物（図6.4、6.7）　遺物には土器（図6.7）と鉄鎌（図6.4-4）、耳環（同8）がある。

須恵器高坏（77）は焼成が悪く、取り上げ時に細片となった。脚台部は低く、脚端が水平に近く開く。土師器（78-80）のうち甕の口縁部（78）は、ST10の西側斜面から出土した。甕あるいは甑の把手が2点ある（79-80）。

鉄鎌（4）は現長6.5cm、幅3.3cm、厚さ2.5mmをはかる破片で、基部の折り返しをとどめるが、先端側を欠失している。

耳環（8）は直径2.4cm、太さ4.5mmの金環で、端部の仕舞は金箔を絞っている。

C　土　坑

弥生時代以外の土坑は全体で18基が検出された。このうち、縄文時代のものとみられる落とし穴状遺

構が6基存在する。その他の土坑は所属時期の不明なものが多いが、なかには近世墓の可能性のあるものもいくつか存在する。ここでは、落とし穴状遺構について説明する。

落とし穴状遺構は、A地区にSK1・2・5・6・8の5基、B地区に1基（SK23）が存在する。さらにA地区のSK4もその可能性がある。A地区における遺構配置をみれば、北西斜面下端のSK1を起点として南東方向に等高線と斜交しながら、等間隔でほぼ直線的に設置されている。これにSK4を含めても、その傾向は変わらない。おそらく当時の「けもの道」の存在を意識した配置であり、同時期に営まれた可能性が高いと考えられる。

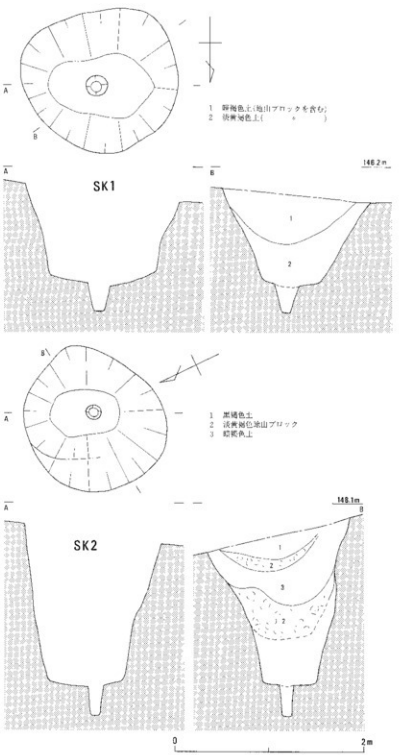


図5.30　SK1・2実測図（1：40）

SK1（図5.30）　A地区、C6区の南東隅に位置する。遺構検出面での平面形は、直径1.6mの円形を呈するが、底面では東西方向に長い不整楕円形となる。こうした形状は壁面の崩落によるものと思われる。深さは約1mで、底面中央に上面径20cm、下底部径10cm、深さ30cmをはかる杭痕がある。

SK2（図5.30）　SK1の10m東に存在する。SK1同様、土坑上面は径1.5mの不整円形を、底面は南北方向に長軸をもつ楕円形を呈する。深さは1.8mをはかり、底面中央に径12cm、深さ31cmの杭痕がある。

SK4（図5.31）　A地区中央寄りのG9区に位置する。斜面下方から山側に向かって掘り込んだ深さ1mの土坑で、底面は長辺0.8m、幅0.5mの長方形を呈する。底面には杭痕は検出されなかった。形状

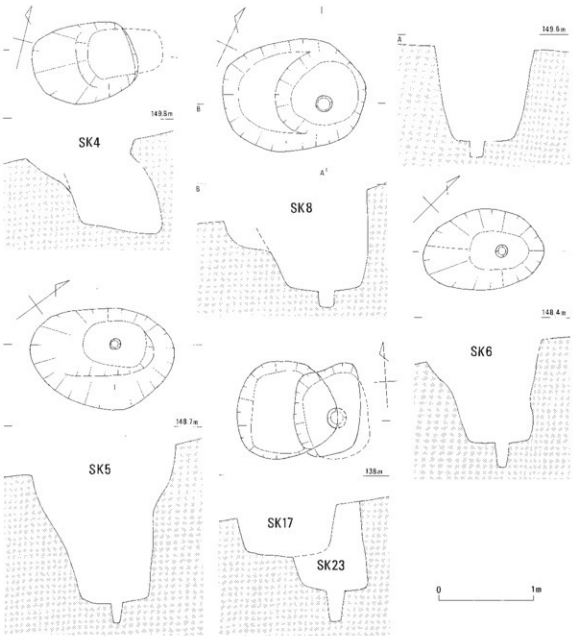


図5.31　SK4・5・6・8・23実測図(1：40)

も他の遺構とは異なるが、埋土の状況が類似しており、落とし穴の可能性がある。

SK5（図5.31）　A地区のF8区に位置する。平面形は長径1.5m、幅1.1mの楕円形をなし、底面も長径0.7mの楕円形を呈する。深さ1.6mで、底面中央に幅10cm、深さ20cmの1本の杭痕をもつ。

SK6（図5.31）A地区のE7区に存在する。SK2とSK5のほぼ中間に位置し、8～9mの距離を保つ。上面の長径1.3m、下底部の長径0.6mをはかる楕円形土坑で、深さは約1m。底面中央に幅12cm、深さ26cmの杭痕をもつ。

SK8（図5.31）　A地区のF8区に位置する直径1.1m、深さ1.1mの円形土坑。底面も円形に近く、径0.7mをはかる。底面中央に径14cm、深さ16cmの杭痕をもつ。

SK5の南東に10mの距離をおいて位置する。

SK23（図5.31） B地区の西斜面、A24区に位置する。南北0.9m、東西0.7m、深さ1mの不整方形土坑で、底面中央に径20cm、深さ25cmの杭痕を検出した。

このやや西寄りに直径1m、深さ0.5mの円形土坑（SK17）が重複して存在する。調査当初は、後者の底面から山側に深くなった2段掘りの土坑と考えたが、裁ち割り調査による土層観察で、SK17はSK23の埋没後に掘られた別の土坑であることを確認した。

D 火葬墓

A、B両地区で火葬墓を各1基検出した。いずれも奈良時代に属するとみられ、A地区では尾根の稜線近く、B地区は斜面と立地は異なる。

SG10（図5.32、6.7） B地区南西斜面、B28区に位置する。基盤層の地滑りによって形成された斜面に堆積した土層を掘り下げているときに検出した。

直径50cmの円形土坑内の、南以外の三方を板状の川原石で囲い、中に骨蔵器を納めたものである。骨蔵器は小形の甕形土師器でほぼ完形で出土し、内部から少量の人骨片が検出された。甕の上部付近には須恵器坏蓋の破片が存在し、蓋として用いられたものと思われた。骨蔵器の下にも礫が1枚置かれていたが、さらにその下部には各1個体の甑と甕の破片が敷かれていた。

したがって本火葬墓の造営は、土坑の掘削、甑等の破砕と敷き詰め、礫を用いた床面と壁体の構築、骨蔵器の設置、蓋石の設置の順に行われたと復元される。ただし、もともと南側に石が存在しなかったのかどうかは不明である。

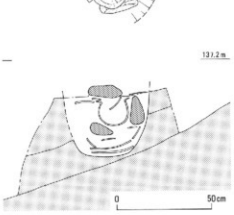


図5.32 SG10実測図（1：20）

SG10骨蔵器等

（図6.7） 須恵器坏蓋（81）は、口径18.2cm、高さ3.2cmをはかり、天井部に碁石状のつまみをもつ。図示できなかったが、同形同大の須恵器坏蓋がもう1点存在する。つまみ部を欠くもので、これも同様に骨蔵器の蓋として使用された可能性がある。

骨蔵器として用いられた土師器甕（82）

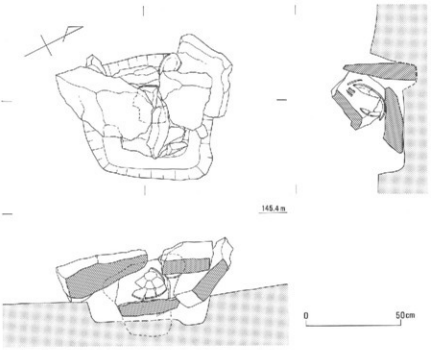


図5.33 SG14実測図（1：20）

は、口径16㎝、高さ14.2㎝をはかる小形品で、頸部から鋭く屈曲して水平に近く開いた短い口縁部をもつ。口縁部はヨコナデ調整を、体部の内外面はナデ調整を施している。もう1点の土師器甕（83）はひとまわり大きいもので、頸部から緩やかに屈曲した口縁部は、斜め上にのびる。体部外面の下半は斜めハケメ調整、上半は縦方向のハケメ調整を施し、内面はヘラ削りする。

甑（86）は口径48㎝、高さ42㎝、底径15㎝をはかり、両側の把手を欠失している。口縁部と底部付近をヨコナデ調整する以外は、外面をハケメ調整し、内面下半にヘラ削り痕をとどめる。口縁端部は凹面をなす。胴部の中央付近に焼成後の穿孔が1箇所観察される。

これらの遺物は奈良時代後半に属すると考えられる。

SG14（図5.33、6.7）　A地区のE16区に位置し、弥生時代住居SH12の床面を掘り込んで造られている。重機を用いた表土除去中に石材が露出したもので、その際にかなりの変形を生じている。

70㎝四方の方形土坑内に板状角礫を用いて「小石室」を構築し、内部に須恵器壺の骨蔵器を安置したもので、須恵器坏蓋で蓋をしていたと考えられる。骨蔵器と蓋はいずれも破片となっていて、蓋は倒面に落下していたが、骨蔵器の底部は現位置を保っていた。付近に骨片が散乱していた。

「小石室」は、東側を除く三方と底面および天井を板石で構築したものである。土坑底面は使用した石材の大きさに応じて部分的に掘りくぼめている。石材にはすべて溶結凝灰岩を使用するが、底石と壁石の隙間には片岩等の小角礫を詰めている。東側には壁石が遺存しないが、これが本来の姿かどうかは不明である。

SG14骨蔵器（図6.7）　骨蔵器は、須恵器の壺（85）で、口縁部を欠く。最大径22.4㎝のやや肩の張った体部で、頸部下端までの高さは20㎝。垂直に近く立つ口縁部は短いものであったと想像されるが、意識的に打ち欠かれた可能性がある。

須恵器坏蓋（84）は、口径17㎝、高さ2.8㎝で、口縁部の下方への折り返しは不明瞭で、端部は薄くおさめられている。摘み状のしっかりしたつまみをもつ。

E　近世墓

本遺跡の近世土壙墓は、AB両地区とも西側斜面裾の平坦面に位置するものと、丘陵上に存在するものとに分けられる。前者には、A地区ではA17区を中心として7基で一群をなすものがあり、B地区では2基で群をなす。後者は丘陵頂部か、尾根筋付近に散漫に分布する。A地区で10基、B地区で3基の土壙墓を検出した。

SG1（図5.34）　A17区の近世墓群中、北端に位置するもので、直径1.1m、深さ0.7mをはかる円形土壙である。底面中央から銅銭6枚と鉄鋏1点が出土した。

SG2（図5.34）　SG1の南に隣接する。直径1.2m、深さ0.9mの円形土壙で、北東寄りの底面から銅銭と鉄製毛抜き1点が出土した。

SG3（図5.34）　SG2の南側に隣接する。直径1.2m、深さ0.7mをはかる円形土壙である。底面から銅銭6枚が出土したほか、底面近くの埋土中から鉄釘と片岩角礫が検出された。

SG4（図5.34）SG3の南側に隣接する円形土壙で、直径1.1m、深さ0.7mをはかる。埋土中から数点の鉄釘と鏃状の不明鉄製品1点が出土したが、銭貨の副葬は認められなかった。

SG5（図5.34）　SG4の南に位置する直径1m、深さ0.7mの円形土壙。壙底には人骨の一部が遺存していた。残っていたのは、頭骨に一部と下顎骨、上腕骨と大腿骨である。底面から櫛、和鏡、銅銭が出土した。鉄釘も出土している。下底部付近で直径53㎝をはかる棺痕跡を検出した。

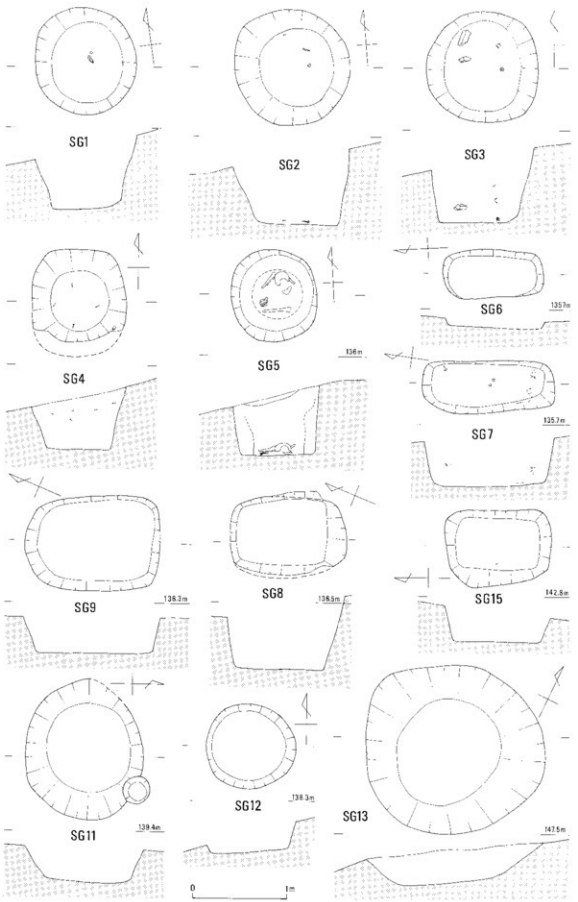


図5.34　近世墓実測図(1：40)

SG 6（図５.34）　SG５の南に隣接する長軸を南北に向けた長方形土壙で、南北1.1m、東西0.5mをはかる。東壁面側で深さ13cmを残すのみで、流失が激しい。遺物は出土していないが、埋土の状況と、次に説明するSG７との類似から土壙墓と判断した。

SG 7（図５.34）　SG６の南側に位置する、長さ1.4m、幅0.6m、深さ0.5mをはかる長方形土壙である。壙内から多数の鉄釘が出土したほか、底面中央から銅銭と鉄銭各１枚が出土した。

SG 8（図５.34）　B地区のB289区、南西斜面の地滑りにより形成された段状地形下方の平坦面に所在する。南北1.2m、東西0.9mの方形土壙で、深さは0.8mをはかる。

SG 9（図５.34）　SG８の南東に隣接する長さ1.5m、幅１m、深さ0.4mの長方形土壙。長軸を北西から南東方向に向け、SG８と一致する。

SG11（図５.34）　B地区のC26区に位置する直径1.5mの円形土壙で、深さ35cmをはかる。本土壙の南方丘陵上にはSK13･14･15など直径１mから1.5mの円形または方形土坑が存在する。これらには石臼や備前焼等の破片が出土したものがあり、近世墓であった可能性もある。

SG12（図５.34）　B地区の西斜面、SG１-７の近世墓群の30m北方に位置する。直径１m、深さ0.3mの円形土壙である。陶器類が出土した。

この一帯は、斜面上方の東側に比高差３～４mの崖状の急斜面があり、その下部に形成された平坦面ないしは緩斜面となっている。SG12の東側は平坦面となっていて、遺構検出作業中に弥生時代等の遺物が出土した。そのため、東西方向のサブトレンチを設定して土層の検討を行った。その結果、この地形は地滑りによって形成されたことが判明した。本土壙墓は、こうした地形を選択して営まれたものである。

SG13（図５.34）　A地区の丘陵尾根上、F13区に位置する。直径1.9mの円形土壙で、現状の深さは40cm程度である。表土を除去する際に付近から角礫凝灰岩（豊島石）製の石塔の一部が出土しており、近世墓であると考えられる。

SG15（図５.34）　A地区の南尾根上、D16区に単独で存在する。南北1.1m、東西0.8mの方形土壙で、壙内から鉄釘状の鉄片が出土した。近世墓の可能性が高いと考えられる。

以上の近世墓出土遺物については、特に銅銭等の錆化が激しいせいもあって充分な整理ができていない。今後、改めて分析をおこない報告したい。

F　遺構に伴わない遺物

両調査区からは遺構に伴わない状態で弥生土器と石器を主体とする遺物が出土した。これらのほとんどは斜面堆積の土層中から発見されたもので、本遺跡の形成時期を示す重要なものも存在するので、種類別に説明する。

弥生土器（図６.２、６.３）　29から43までの15点がA地区の中央西斜面、B17区から出土した。壺形土器（38-43）と甕形土器（29-37）がある。壺の口縁部は、いずれも大きく外方に開くものである。39の口縁端部は拡張して垂下するが、端面には凹線文を認めない。上面に２条の突帯を巡らせ、間には櫛描きの格子目文を施す。突帯にはハケメ工具で刻み目文を加える。38･40の肥厚させた口縁部端面にはハケメ工具で刻み目文を施す。38の頸部下端には１条の突帯を巡らせ、指頭圧痕文を加える。40の頸部下端以下には櫛描き文を施すが、器肌荒れのため直線文を認めるのみである。

甕形土器の口縁部（37）は、端部を上方につまみ上げて拡張したもので凹線文は施さない。底部はしっかりした平底から垂直に近く立ち上がった後に外方に開く、古相を示している。外面は縦ヘラ磨き、内

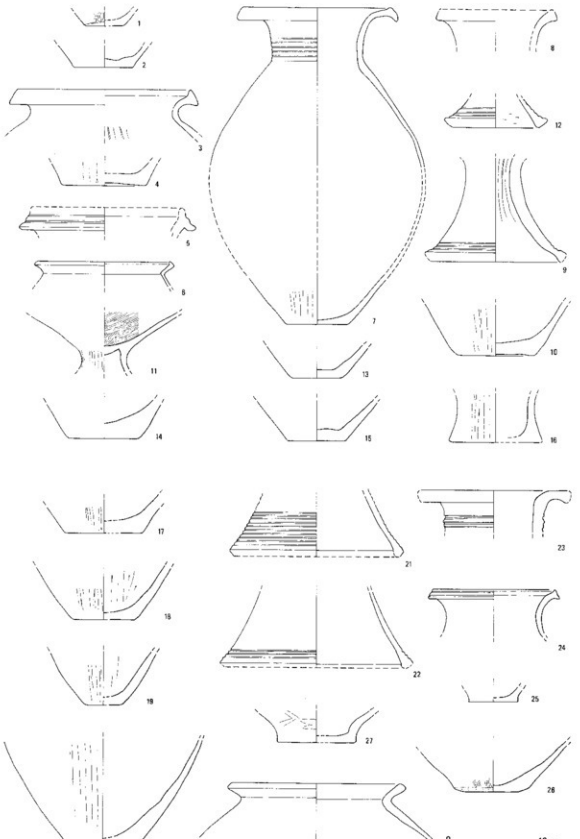


図６．１　各遺構出土弥生土器(１：４)

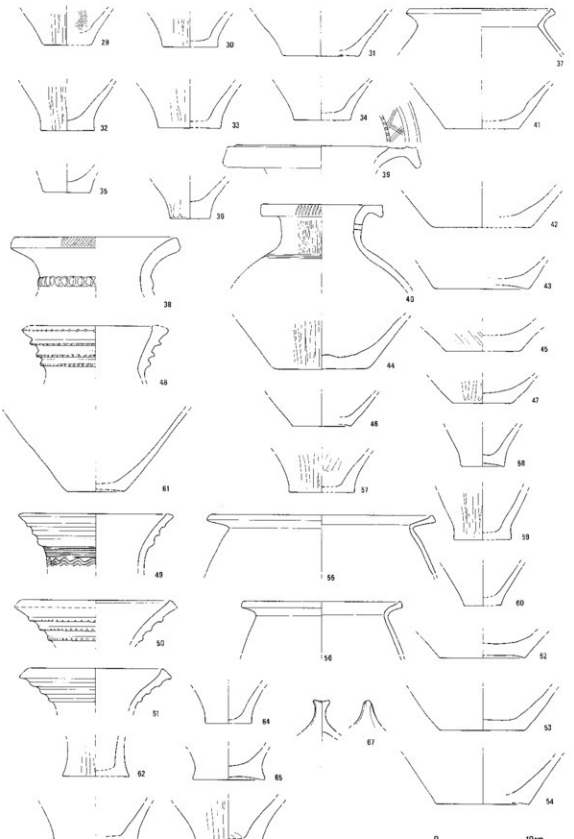

29
30
31
37
32
33
34
41
39
35
36
42
38
40
43
48
44
45
47
46
61
57
58
49
55
59
60
50
56
52
51
64
67
53
62
65
54
63
66
0
10cm

図６．２　弥生土器２（１：４）

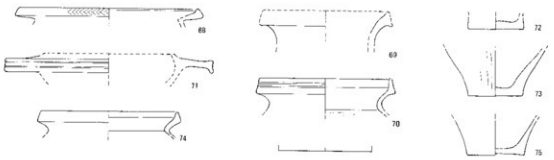


図６．３　B地区出土弥生土器（１：４）

面はハケメを施した後にナデ調整を加えていて、ヘラ削りするものはない。以上の土器は中期中葉に属する。

44から48、57、61の８点はA地区の南方西斜面、A18区から出土した。壺形土器(48･44-47･61)と甕形土器(57･58)がある。壺の口縁（48）は上方に開くもので、外面に３条の突帯を巡らせる。突帯と口縁端部には刻み目文を施す。甕の底部は安定した平底の古相を示すもので、これらはB17区出土の土器と同様、中期中葉を主体とする。

49-51、52-56、59･60、62-67の16点はA19区およびB19区から出土したものである。一部はA18区にまたがって出土した。壺形土器（49-51、52-54）、甕形土器（55･56、59･60、62-66）、蓋形土器（67）がある。壺の口縁部（49-51）はいずれも上方に緩やかに開くもので、外面に３条の突帯を巡らせている。器肌荒れが激しく観察できない個体もあるが、50は刻み目文を施す。突帯下部には櫛描きの直線文と波状文を交互に配置している。甕の口縁部（55･56）は、端部を肥厚させ上端をつまみあげる程度で、凹線文は施さない。甕底部は、底面と体部下端面が鋭角をなし、古相を示す。壺も含め内面のヘラ削りは認められない。蓋と思われるものは扁平な突起部分が遺存するにすぎない。

以上の遺物は、住居址等の居住遺構が付近に見あたらないことから、斜面上方の集落から廃棄されたか、流れ込んだものと考えられた。

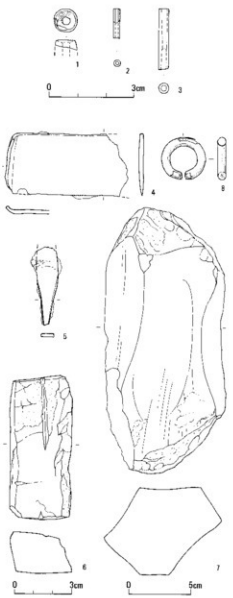


図６．４　玉類、金属製品、紙石

図６．３掲載の土器（68-75）は、B地区から出土したものである。68はB24区の１柱穴から出土した甕形土器の口縁部で、拡張した端面を２列の刻み目文で装飾したもので、甕に似た形態をもつ壺形土器の可能性もある。凹線文は認められない。中期中葉に属する。

61から71はB28区の段状地形の堆積土中から出土したもので、壺形土器（69）、甕形土器（70･72）、

図6.5 石器2

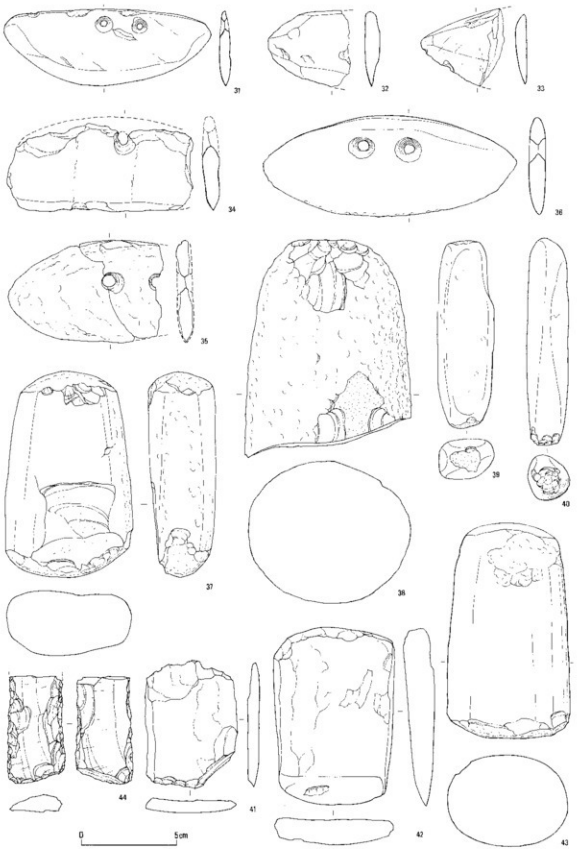


図6.6 石器2

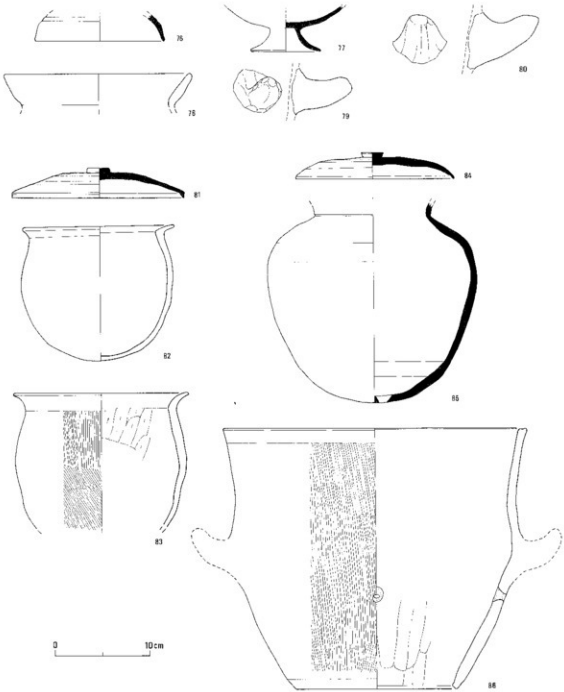


図６．７　古墳・奈良時代土器（１：４）

高坏形土器（71）がある。69は保存状態が悪く、文様等は不明。70は立ち上がった口縁部に浅い凹線文を施したもので、頸部以下の内面をヘラ削りする。71は口縁上部が屈曲して外に張り出したもので、端部を拡張して凹線文を施す。

73は、B地区南東部の古道SD５で検出された小ピット内から出土したもので、甕形土器の底部である。中期後半。

74･75はB地区の南西隅、C30区の斜面から出土した。いずれも保存状態が悪く、調整等は不明。

石　器（図６．５、６．６）　A地区では弥生土器と同様に西側斜面の包含層中から出土した。これらの中には弥生時代以外に、縄文時代に属するとみられる石器も若干数存在する。以下、出土地点別に説明

する。

1・2、17、24-27はA地区の西斜面、B13・C13区の包含層から出土したもので、石鏃（1・2）、同未製品（17）、「楔形石器」（24-27）がある。いずれもサヌカイト製。

石鏃1は、凹基式で両逆刺が舌状に伸びる特徴的な形態をもつ。2は凹基式で両側縁の一部がくぼむ形態をもつ。1は縄文時代に属するものと思われる。

「楔形石器」は、いずれも剥片を得るための石核と考えられる。25は高さ1.7cm、幅2.5cm、厚さ5mmの、剥離作業が極限まで行われたもので、残核と呼ぶにふさわしい。両面とも上下から繰り返し剥離されて生じた剥離面をとどめ、階段状剥離が特徴的に認められる。26は高さ2.7cm、幅6.7cm、厚さ1.7cmをはかる。分厚い剥片を素材とし、一側縁に敲打痕を残す。上面は表裏の剥離面を切っていて、剥離作業中に破損した状況を示す。27も同様に剥離作業中に破損したものだが、破損後も剥離作業が継続した例である。

A地区南西隅のA18区およびA19区からは石鏃（15）、削器（18）、打製石剣（44）が出土した。すべてサヌカイト製。

石鏃は平基式で、長さ2.5cm、幅1.8cm。

削器は、いわゆる横形「石匙」と呼ばれるもので、高さ3.3cm、幅4.8cm、厚さ6mmの完形品である。出土時に裏面の一部を欠いた。左右に抉りがある。表面の風化が比較的進行していて、縄文時代に属すると思われる。

44は、長さ5.7cm、幅3.1cm、厚さ9mmをはかり、上部を欠失している。丁寧に加工された基部の一部には自然面をとどめる。打製石剣にふつう認められる両側縁の刃潰しや研磨痕は観察されず、両側縁は鋭利である。また、裏面左上には成形後に剥片剥離が行われた痕跡が存在し、注意される。

A地区のB17区から出土した石器には、「楔形石器」（29）、石包丁（33）、太形蛤刃石斧未製品（38）がある。

「楔形石器」（29）は、打製石包丁に似た断面形をもち、下縁は鋭利な刃部状を呈する。打製石包丁の破損品とも考えられるが、上方から左下に伸びる「裁断面」の存在によって、破損後も剥離行為が続けられたことがうかがえる。サヌカイト製。

石包丁（33）は、外湾刃の背部の直線的な形態をもち、緑色片岩製。

太形蛤刃石斧未製品（38）は蛇岩の川原石を母材としたもので、表面の一部に礫面を残す。成形剥離終了後、全面の敲打作業中に下部を欠損している。現長11.5cm、幅8.9cm、厚さ7.5cmをはかる大形品である。

石包丁（35）は、B地区のC23区から確認調査中に出土した。火を受けていて表面の剥落が著しい。白雲母石英片岩製。

28はB地区のC25区から出土した「楔形石器」である。素材となった剥片の厚みが足りずに剥離行為が中止されたものと思われるが、あるいは最終的に削器として用いられたものかも知れない。ただし、縁辺部は鈍く、明瞭な刃部を形成しない。素材の背腹両面は対向する剥離面で、素材自体が楔状石核から得られたことを示している。

以上の他に、出土地点の不明なものとしてサヌカイト製石鏃（4・16）、石包丁（36）、石槌（37）がある。石鏃のうち4は、二次調整が丁寧で鋭利に突出した逆刺の形態から縄文時代に属する可能性がある。石包丁は片岩製の完形品で、外湾刃の木葉形を呈する。石槌は、蛇岩製の太形蛤刃石斧を再利用

したもので、敲打面は平滑で丸味を帯びる。

管　玉（図６．４－３）　１点の管玉がA地区のC13区包含層から出土した。緑灰色の碧玉製で縞状の細かい脈理が観察され、長さ2.2㎝、断面径3.7㎜をはかる。弥生時代に属すると考えられる。

４　考　察

A　弥生集落と石器製作

弥生集落の時期　男戸嶋遺跡弥生集落の開始時期は、A地区西側谷部の包含層出土土器（図６．２）から推定することができる。これらの土器の特徴をまとめると次のとおりとなる。

壺形土器には長頸壺（38-40）と広口壺（48-51）が存在する。本遺跡の場合、後者の存在が特徴的である。この壺は、津出では中期前葉（Ⅱ期）から中期後葉（Ⅳ期）前半まで存在するとされる（註１）。いっぽう、この種の壺が多量に出土している岡山市南方（国立病院）遺跡の調査ではⅡ期中葉からⅢ期前葉までしか認められない（註２）。また、岡山県南部を中心にした高橋　護氏による編年案ではⅡ期後半からⅣ期の直前までと位置づけられている（註３）。

このように広口壺の編年的位置づけにはなお検討すべき齟齬が認められるが、本遺跡においては同時に出土した長頸壺と甕が、凹線文をもたないという点では一致しており、Ⅲ期中葉頃に人々の居住が開始したと判断される。集落がどのような変遷をとげて廃絶にいたったのかは、住居址出土の土器資料が少なく、また保存状態が悪いためあまり明確ではない。B地区の一部で出土した甕（70･74）はⅤ期中葉頃に属する可能性があるが、各遺構から出土した土器の大部分はⅣ期までにおさまるものであった。したがって、本集落は中期後半期を通じて形成されたものと考えられる。

男戸嶋遺跡の石器　本遺跡からは弥生時代石器が比較的豊富に出土した。これらの石器類はしたがって中期後半期のものである。なかでも注意されるのは多くの住居でサヌカイト砕片が出土したことで、本遺跡においてさかんにサヌカイト製石器の製作がおこなわれたことを示している。

砕片としたのは、剥片のうち大きさが約２㎝以内のものと剥片以外の石片である。剥片はSH１で１点出土した程度で、ほとんど出土していない。砕片が出土したのは量の多少を問わなければ10住居址におよんでいる。このうち、数センチ以上の石片は数点しか存在せず、２㎝未満のものが大部分を占める。比較的多く砕片を出土したのは、SH11（205点）、SH12（74点）、SH16（38点）、SH４（35点）、SH10（18点）の５住居である。これらの砕片の形態は幅広で、明確な打面をもたないことが特徴である。いっぽう、SH３からは石鏃の未製品２点が出土しているので、本遺跡内で石鏃を製作したことは明らかである。ところが、先に述べたように剥片類の出土はきわめて少ない。石核から素材剥片を剥離し、これに一次調整を加えて石鏃を製作したという一連の工程が同時に進行したとすれば、素材はすでに失われているか、出土した砕片のなかに求めるしかない。おそらく、その両者が該当するものと思われる。

本遺跡出土のサヌカイト製石器の大部分は石鏃で、これに石錐が加わる程度で、他の削器などの製品はきわめて少ない。石鏃、石錐の寸法は２㎝程度までで、素材となった剥片の大きさもまた似たものであったことは未製品の形状から推定できる。ところで、これを剥取したとみられる石核は「楔形石器」に求めるほかない。このことは、ほかに石核に相当するものが認められないこと、また素材の可能性が考えられる大きさの砕片にみられる特徴から推定される。本遺跡から出土したサヌカイトの最大のものは長さ６㎝、厚さ１㎝、重さ60gをはかるにすぎない。剥片の破損したもので、繰り返された剥離痕をとどめる。以上みてきた本遺跡におけるサヌカイト石器製作のあり方は、弥生中期後半（Ⅲ･Ⅳ）期に

おける岡山県北地域の石材消費地の姿を典型的に示すものである。

いっぽう、男戸嶋遺跡では太形蛤刃石斧の未製品（図6．6-38）が出土したことも重要である。美作地方では太形蛤刃石斧は深成岩を主体とする火成岩が多く用いられているが、未製品の出土はほとんど知られておらず、その製作過程、なかでも石材の採取形態については不明であった。本例には摩耗した自然面をとどめ、おそらく吉井川から採集された川原石が母材となったことを示している。石材の岩石学的な分析による、石材選択の検討などは残された課題であるが、肉眼観察では当地域の太形蛤刃石斧の石材種類は多様で、素材となった川原石の石材組成を反映していると予想される。

その他の扁平片刃、磨製石包丁は片岩を石材とする。出土した扁平片刃石斧未製品（図6．6-41）は緑色片岩を選択的に使用する。遺跡内には剥片の形態で素材が搬入されたことが推定されるが、石材採取の実態は不明である。

石器生産システム？　以上のように機種別に石器製作の状況をみてくれば、これらの集合としての弥生時代の石器製作システム（体系）自体の存在には否定的にならざるを得ない。存在するのは機種別の石器製作の姿でしかない。これらは相互に規定したり全体を形作ることはなく、厳密な意味でのシステムとは呼べない。本地域ではサヌカイト製石器の生産についてのみシステムが認められる。

岡山県北地域の弥生Ⅲ・Ⅳ期の石器組成では、サヌカイト製脊張具・武器が比較的高い比率を占める（註4）。これに石鏃を加えたサヌカイト製小形石器は、美作地方では当該期のほとんどの遺跡で出土していて、当時の人々が恒常的にサヌカイトを入手していたことを実証している。いっぽう、岡山県南部では通常存在するサヌカイト製打製石庖丁は本地域ではほとんど出土せず、そうした石材取得の困難さも物語っている。ほとんどが金山産と推定されるサヌカイトの取得がどのような実態であったかは、今後解明すべき課題であるが、原産地との間に岡山県南部の集団の存在を考えれば、これらとのネットワークをつうじて入手していたと想定するのが自然であろう。

岡山県南部ではサヌカイトが大形剥片（盤状剥片）の形で搬入されていた。これを分割して各種石器の素材としたが、機種別の製作技法等の実態はほとんど分析されていない。打製石包丁などの比較的大形の石器は、盤状剥片を直接剥離して素材としたことが予想されるが、小形石器はその剥片をさらに石核として利用したに違いない。男戸嶋遺跡におけるサヌカイト製石器製作の実態は、一見後者を切り取った姿のようにもみえる。しかし消費しつくされた母材が、どのような形態で遺跡に搬入されたかを復元することは困難であり、県南部と同様な盤状剥片が搬入された可能性もまったく否定することはできない。すくなくともこうした石材遠隔地における石器製作の姿は、岡山県南部など石材近接地における石器生産構造を知る手がかりとなるだろう。ここに石器生産システムの存在を想定する根拠がある。

註

1　中山俊紀「津山の弥生土器1（壺形土器）」『年報津山弥生の里』津山弥生の里文化財センター1996

2　出宮徳尚・神谷正義・岡崎順子『南方（国立病院）遺跡発掘調査報告』岡山市教育委員会・岡山市遺跡調査団1981

3　高橋　護「入門講座・弥生土器－山陽1－」『考古学ジャーナル』173ニュー・サイエンス社1980

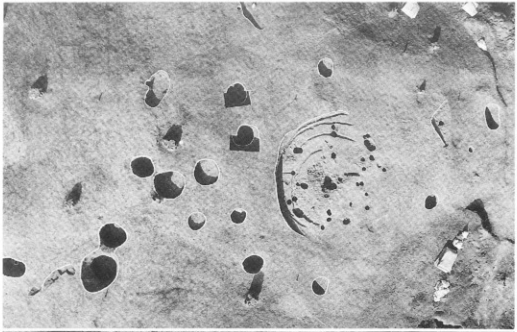
4　安川豊史「岡山県北部の石器組成の変遷」『農耕開始期の石器組成』1　国立歴史民俗博物館1996

図　　版

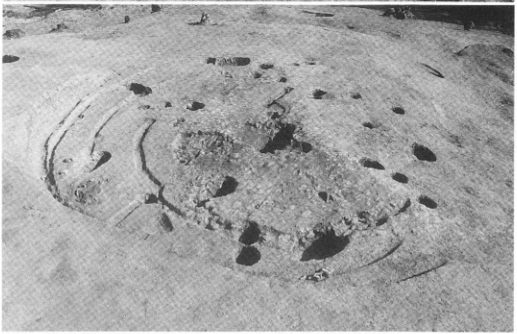
1　遺跡全景
（北上空から）

2　同上（南上空から）

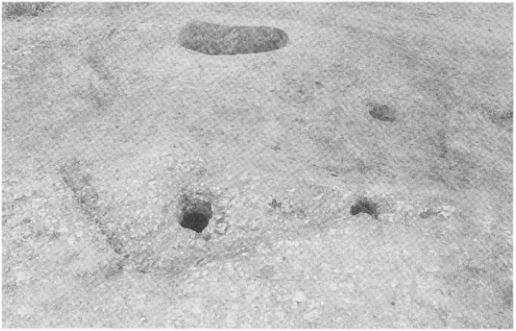
3　同上（上空から）



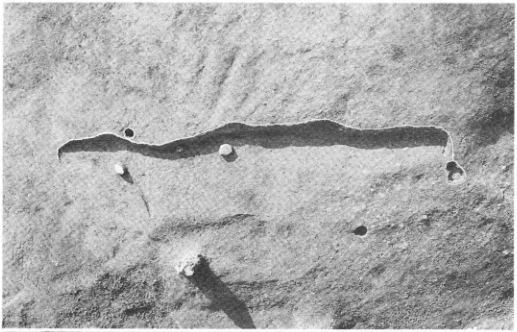
1　ＳＨ２と北側貯蔵穴群(上空から)



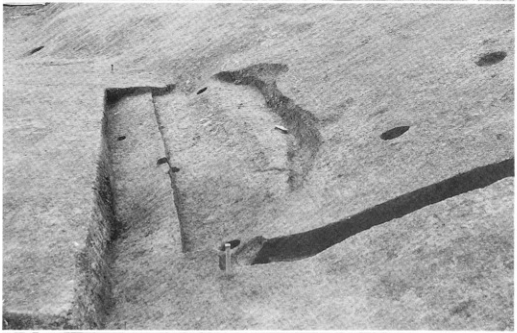
2　ＳＨ２(南から)



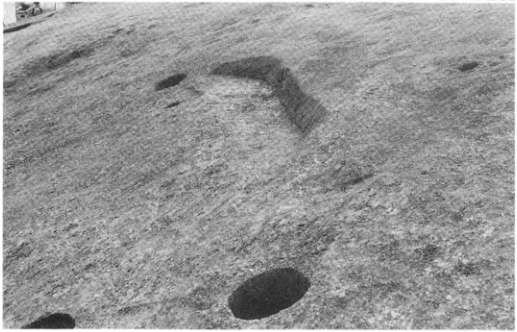
3　ＳＨ３(西から)



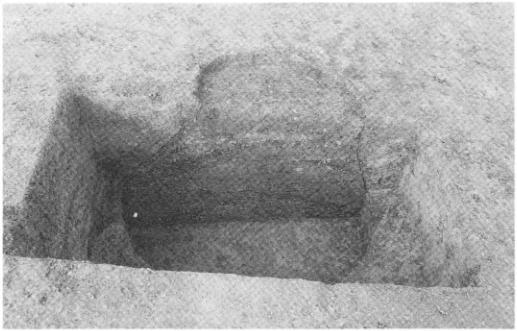
1　ST4・5
（上空から）



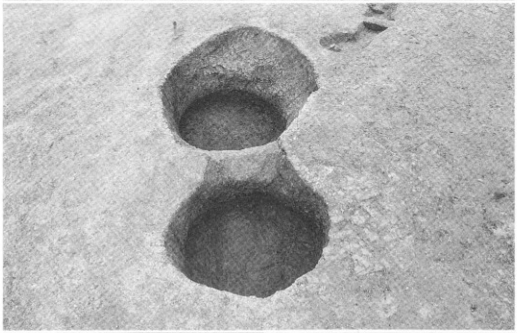
2　ST6（北から）



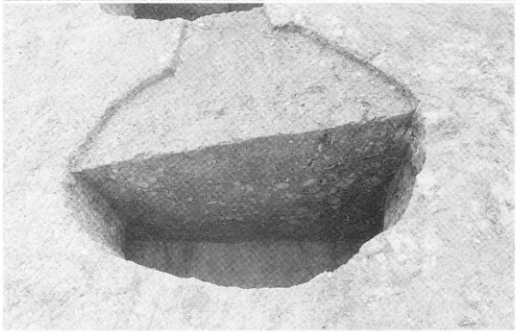
3　ST11（北から）



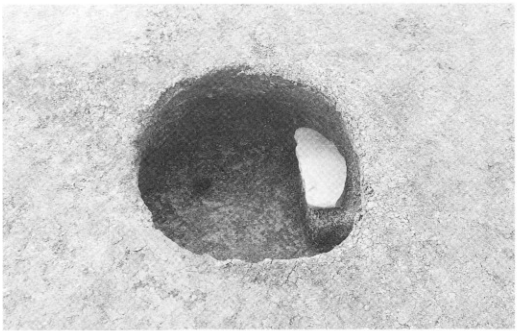
1　SK1（北から）



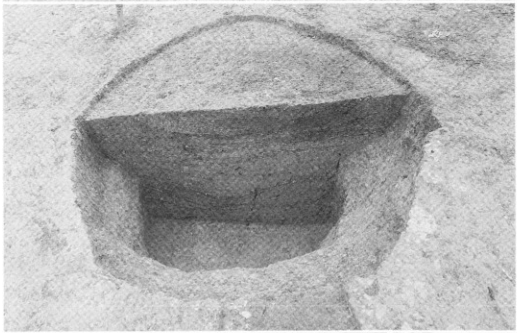
2　SK5・8
（北から）



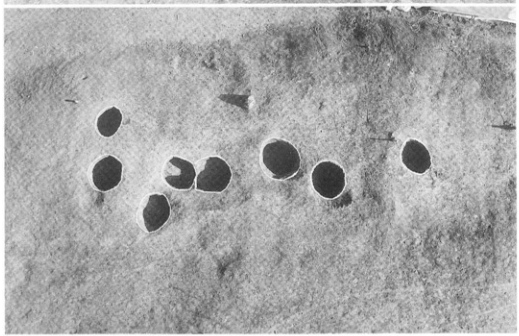
3　SK8（北から）



1　ＳＫ６（南東から）

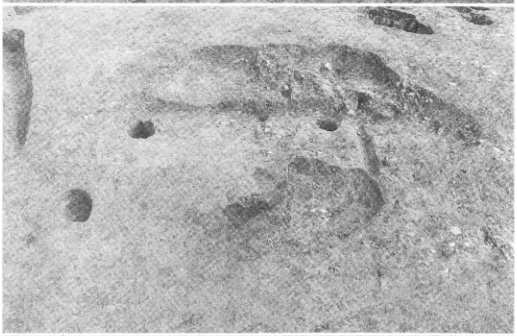


2　ＳＫ５（北から）

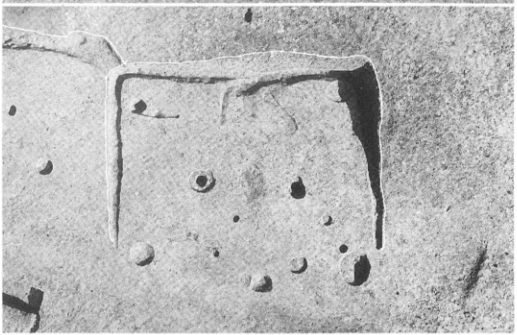


3　南貯蔵穴群
（上空から）

1　SH1（南から）

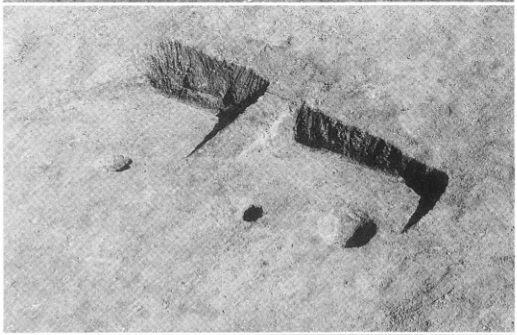


2　SH4（西から）

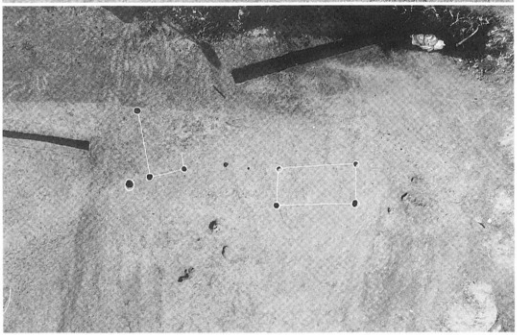


3　SH5（上空から）

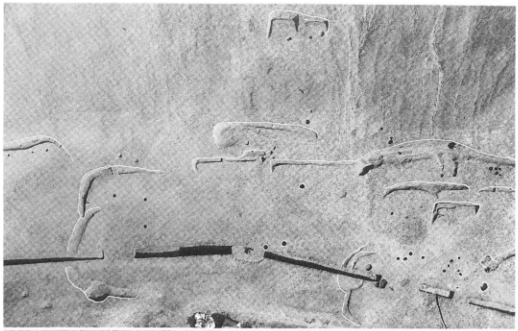
1　SH6（南から）



2　SH7（南から）



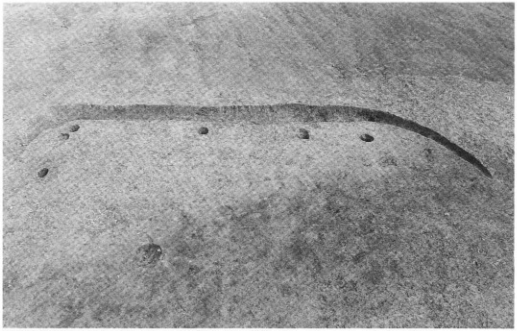
3　SB1・2
（上空から）



1　中央谷部
（上空から）

2　南谷部
（上空から）

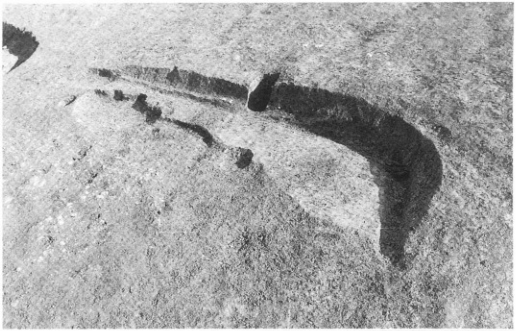
3　谷部調査風景
（南から）



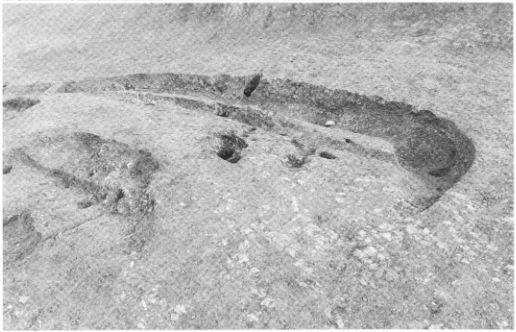
1　ＳＴ１（西から）

2　ＳＴ２（南西から）

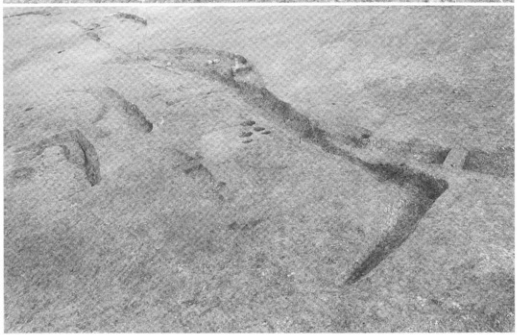
3　ＳＴ７（南から）



1　ＳＴ８（南西から）



2　ＳＴ９（南西から）



3　ＳＴ10（南から）